なぜ恵みはすべてを変えるのか?

チャック・スミス著
CHUCK SMITH "Why Grace Changes Everything"

目　次

神との愛の関係

1. 赦されている！

2. ドアは決して閉じられることがない

3. 御国にえこひいきはない

4. 恵みの肖像（ポートレイト）

5. 一度に一歩

6. 工場ではなく庭（園）である

7. 祝福を信じる

8. 苦闘が始まる

9. 事実、私達は自由である

10. 皆、放縦に走ってしまうのではないか

11. 仕掛爆弾と地雷

12. 全部か一つもないか

13. 王室のメンバー

14. 私達の唯一の責務

神との愛の関係

「神はあなたを愛しています。」というこの簡素な聖句の重要性をじっくり考えたことがありますか。それは誰でもつかむことのできる最も重要な真理“神は私たちをご自身との愛の関係に入るよう招いておられる”という真理を含んでいます。私たちはただ神が無償で私たちに与えて下さる深い愛とあわれみを信頼し、信じること、それが私たちの果たすべき役割です。

神との愛の関係の中で経験することのできる自由と喜びは、言葉に表現できない程素晴らしいものです。しかし一方で律法的に神と関わることを主張し、またそれに固執している人（戒律主義者）が多くいることは悲しい現実です。彼らの義は自分が主のために何が出来るのかということに基づいているのであって、主が彼らのために既に成し遂げてくださったことに基づいているのではないのです。彼らは自分を神と結びつけておくために常に“しなくてはならないこと”と“してはならないこと”とを書いた膨大なリストを持ち歩き、それを守ろうと必死に努力しているのです。

実は私もこのような憂鬱な否定的な義というものに全く関係なく生きてきた訳ではありません。私は子供の頃、自分を近所で一番敬虔な子供だと考えていました。やってはいけないと言われていたことをしなかったからです。私はタバコを吸いませんでした。ダンスもしませんでしたし、ショーを見に行ったりもしませんでした。私はそのような事は全く罪深いことなのだと教えられていました。ですから私はそのような行為を避けてしなかっただけでなく、密かにそのようなことを楽しみ、遊びふけっていた信仰の弱い友達よりも自分はずっと高いレベルにいる義人なのだと信じていたのです。私はタバコの吸いがらを拾って密かにタバコを吸うことで知られていたある伝道者の息子よりも自分はずっと聖いのだと思っていました。自分はそのような事をしている周りの人よりもずっと高いレベルにいて、神もそのことに気づいて下さっているに違いないと確信していました。

しかし、私は大きな問題を抱えていました。実際にはショーを見に行かなかったにせよ、私は心の中で“白雪姫　”のショーを見たくてたまらない気持ちでした。そしてそんな自分に良心の呵責を覚えていました。そして私はつぎの日曜日に再び救われ、神に来週こそは変わります、そのような事はしませんと約束するのですが、そのような神との関係が翌日の朝食まで保てばましな方でした。

私の義は私の意志の力と努力とにかかっていたため、すぐに私の神との関係は非常に緊迫したものになってしまうのでした。私は毎年夏になると自分の教会のユースキャンプに参加しました。最後の晩、大きなキャンプ・ファイヤーを囲んで“みなささげまつり”や“われ主に従う”などで賛美し、感情的に高まっている時、私たちは一人一人紙を渡され、自分の中で神に変えて頂きたい点や主に対して誓いたいこと、決心したいことを書くように言われました。そして一人一人その紙を、渡された松かさに押し入れ、火の中に投入れました。私の投げた松かさが燃えていくのを見ながら、私の頬を幾すじもの涙が流れ落ちていきました。私はいつも神に自分の人生を神の愛で焼き尽くして頂きたい、そして自分を主に仕えるためだけに完全に投じたいのだと祈りの中で言っていました。

キャンプ・ファイヤーを離れると、私たちは小さなテーブルにつくよう指示されました。そこにはキャンプリーダー達が用意した次のように書かれたカードが積まれていました。「私は神の御恵みにより、これからの一年間決して映画館に入ったり、タバコを吸ったりアルコール飲料を飲んだり、汚い下品な言葉を使ったり、ダンスをしたりしないことを約束致します。」私たちはこの誓いのカードにサインをしてそれからの一年間財布に入れて持ち歩いたものでした。

私はこの全ての誓いを破るまいととても注意深くしていました。しかし、いつも最後にはからからに渇ききった戒律的な神との関係に陥るのでした。私は契約によって神に縛られていた為、キリストと歩むことにおいて喜びなど殆どありませんでした。誓いを破ることなど私にはできませんでした。私はこの誓いを守ろうと心に決めていました。そして私のこの努力に対して神は私に借りを負っているとわたしは信じて疑いませんでした。神は私に良くして下さらなくてはならない、少なくともこの誓いを破っている者よりは私に良くして下さる義務がある、と考えていました。

ですから、想像してみて下さい。私が自分程義人ではないとみなしていた友達がある日、瓶の中にあるゼリービーンズの数を当てるというコンテストに優勝した時に私の受けた大きなショックを。私は神に腹を立て、「神様、どうして私を祝福して下さらなかったのですか。彼らよりも私の方が優秀するにふさわしい義人であることはあなたもご存じの筈です。」そのことについて考えれば考える程、私は混乱してしまいました。私は自分の責任を果たそうと必死になっていたにも関わらず、神の方では私に何の関心も払っていない様でした。私は続け様にがっかりさせられました。勿論、しばしば私も自分に正直になり、自分が考えたいと思うほど義人ではないという事実を認識し始めました。私は自分の態度が、往々にして、本来とるべき態度でないことを知っていました。私は、自分の人生に対する神の御心には自分が（神の望まれておられるような人）完全には満たないことを思い知らされた時もしばしばありました。私は高校の時こっそりショーを見に行ってしまいまいました。それからの6カ月というものは神への誓いを破ってしまった、という強い良心の呵責の下に過ごさねばなりませんでした。神は私を祝福するに値する人間として見て下っているという考えを捨てなくてはならないと考えたこともしょっちゅうでした。私には山ほど祈りたいことがありましたが、こんなにもひどい失敗をし神をがっかりさせた自分にはそんな権利はないと考えていました。

この“行いによる義”という重荷は、アリゾナ州ツーソンでの私の牧会活動の最初の幾年かにも影響を及ぼしました。牧会をしていく内、私はやがて牧会には自分のいままでの経験よりももっと何かがなければならないし、自分の神との関係も、もっと楽しい関係であるべきだということに気づくことに、そう時間はかかりませんでした。また尚悪いことに、私はアメリカ中を伝道の奉仕をしてまわっている有名な伝道者の集会に出席しては、救いを受けたり奇跡と思われる癒しを体験したりする人々が仮設テントから溢れている様子を見ていました。私は自分自身の人生においても、牧会活動においてもそのような神の明確な力を見たいと切望していました。ですから、私は水さし一杯の水と聖書とノートだけをもって一人ツーソンの砂漠に行き、断食と祈りにより主を待ち望みました。私は神に自分の人生に対する祝福と力と油注ぎとを切に願い求めました。そのような霊的訓練を幾回か繰り返した後、私は断食して祈ったのだから神は私の教会を祝福して下さるに違いないと信じ、だんだん興奮を覚えるようになりました。私は、神が何をしてくださるのだろう、早くその御わざを見たいと、次の日曜日が待ち遠しい思いでした。しかし、残念なことに私は断食のためにすっかり衰弱してしまい、日曜日には説教檀にも立てない程でした。私の思いはあちこちをさまよい、メッセージのつじつまを合わせることも出来ない程でした。人々はうとうとし始め、私は打ちのめされた思いでした。神の素晴らしい働きを期待していたのに、実際には、いびきのコーラスが聞こえてきたのです。私はいらいらし、腹を立て、こう考えました。「神様、あなたは私があんなに断食して祈っていたのをご覧にならなかったのですか。あなたはこの教会と私を祝福してくださらなくてはいけないのですよ。」と。

私は当時、自分の断食や祈りが、私の望み通りのことを神がして下さるよう強制する行為であり、神に義理を負わせようとする試みであったことを理解していませんでした。私は、使徒行伝に書かれている様な奇跡を人々が見たら、皆イエス・キリストが神である現実を信じるようになるに違いないと思っていました。

しかし後になって、私は、世界に自分たちが提供出来る究極の証しは、私たちの互いに対する愛情であり、神ご自身の御こころそのものから流れ出る愛情であることを悟りました。ルールや規則に従うだけでは、そのような愛の関係は生まれてきません。私たちは、自分たちの関係に律法を強制しようとすることは出来ますが、実際には神の愛のみが私たちの切望してやまない安定と安心を得るための唯一の道なのです。聖書では、愛が律法を全うすると教えています。事実、イエス様は、律法の中で一番大切な戒めはどれかと問われた時「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。また、あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」とおっしゃいました。律法ではなく愛が、私たちとの神との、また仲間のクリスチャンとの関係における鍵なのです。

神は、律法のもたらす義務感や罪責感などよりずっと強力な綱によって、私たちが神に引き寄せられている、その美しさを経験して欲しいと願っておられるのです。もし私たちが依然としてルールや規則のリストによって束縛されていたのなら、すぐにそのルールなどの拘束力に対し、もがき苦しむでしょう。愛の喜びによって結ばれている関係と、義務や罪責感によって縛られている関係には大きな違いがあります。神は、ご自身の民が義務や罪責感などの外側からのプレッシャーが果てしなく載っているリストによって縛られることなど、決して意図なさいませんでした。神にとっても私たちが次のようにうめき、不平を言う声を聞くことは決して喜ばしいことではないのです。「ああ、なんてこった。他にやりたいことは山ほどあるのに今日もまた教会に行かなくてはいけないのか。もし行かなかったら神はもう私を愛してくれなくなるし、牧師も自分のメッセージを聞きに来なかった私を責めるような目で見るだろうからな。」もしあなたが、この様に面倒くさいという感情に苦しんでいるようでしたら、それはあなたが神との愛の関係に入っておらず、律法主義に陥っていることは明確です。

神は確かにこのような味けのない、愛情のない存在以上のものを私たちに与えたいと願っておられるのです。「私の定めたことすべてを守りなさい。そうすれば私はあなたを愛して祝福してあげよう。しかし、そのうちの最も小さいものでも破ったらすべては水の泡と消え、お前は私の御国からは外されるのだ。」などというような長い契約を、神がお作りになった訳では決してありません。クリスチャンは神に対して重荷となるような契約で縛られてはいないのです。パウロは、自分を束縛している唯一のものはイエス・キリストの愛であると宣言しています。「というのは、キリストの愛が私たちを支配して（私たちに迫って、促し）ているからです。（第2コリント5:14詳訳）」

私が自己義認という束縛から解放される為に、神は私の人生において忍耐強い御わざを何年も続けて下さいました。私は長い間、色々な人がローマ書から大きな祝福を受けたという話を聞いていました。私は常に祝福を求めていましたから、ついにそれを試してみることにしました。しかし学んでみても、ローマ書を自分自身に適用するのは難しいことでした。しかしとにかく、他の人が素晴らしい恵みと感銘を受けたとは一体どのような内容のものであるのか、自分にも発見できるかどうか、忍耐強く頑張ることにしました。

ある日、私がローマ書を学んでいた際、神は私の神との関係に大革命をもたらすようなことをして下さったのです。神は“恵み”という単純で使い古されているが、稀にしか正しく理解されていない言葉の意味を私に啓示してくださったのです。その時から私はこのような何とも自由な、そして神を愛し神に愛される関係に入ったので、私の牧会活動においてたとえ素晴らしい奇跡をみることがなくても、そのようなことは気にならなくなりました。私は、自分自身はつまずき倒れやすいけれども、私が失敗したからといって、私が神から引き離されるようなことはないということに気づきました。以前の私のキリストとの関係は、上がったり下がったり急勾配のジェットコースターの様でしたが、かなり穏やかなものとなり、神の素晴らしい愛に包まれて安定したものとなりました。

私が、“神が私たちの味方であるなら誰が私たちに敵対できるでしょう。”(ローマ8:31)という深遠な真理を見い出した時、私がどのように感じたか想像してみて下さい。私は何年もの間、神が自分に敵対しているという間違った概念のもとに生きていました。 神は私がルールの枠からはみ出してしまうのを待って、烈火の様な裁きを私の上に下そうと待ち構えておられるという情景を思い描いていたのです。

律法主義に常に付きまとう恐れではなく、神の無条件の愛のもたらす平安を私が楽しむ事こそを、神は願っておられるのだということを、私はついに悟ったのでした。私は全く新しい形での神との関係を持ち始めました。

律法とは、神の民にとって安全の為のガイドラインとして作用するよう意図されたものであること、また律法の拘束力は、親が自分の子供の為を思って与える安全ガイドラインのような機能を果たすものであることを私は学びました。一度神の恵みの素晴らしさを私たちが見い出せば、もはや律法に閉じこめられる必要はないのです。私たちは、神を愛しているのでいのちに自由に近づくことが

出来、私たちが持っている神との愛情に満ちた関係を傷つけるようなことは何もしたくないのです。神との交わりの喜びを知った時私たちは、神と自分との間に何の障害も邪魔も入って欲しくはないのです。

事実、神の愛を経験すればする程、神ご自身が私たちにとって第一の願いとなり、生活の焦点となるのです。そして、律法の威圧的、強制的な要素は不必要になります。私たちは、ただ神を愛しているが故に神を喜ばせたいと切望するようになります。そして、人間にとって神との純粋な愛の関係を経験することが、生きていく上での最も大きな喜びなのです。神が自分の味方であり、自分を愛しておられることを知ることにより、私たちは誰も味わったことのない程の大きな安心感を得ることが出来ます。神の栄光に富んだ恵みを発見したことは、私の霊的な歩み全体の内でも最も重要といえる出来事でした。私は全く新しい土台の上に、神と関係を持つことを学びました。それは、私の行いや私の義という土台ではなく、イエス・キリストを通しての、神の私に対する愛という土台です。

それが恵みであり、恵みが人生を生きるに値するものに変えるのです。実際、恵みこそが命、本当の命、満ち満ちた命、満足のいく充実した命というものを可能にするものなのです。私たちの神との関係は、自分の努力というちっぽけな砂利の上に築かれているのではなく、神の変わることのない愛情深いご性質という巨大な岩の上に築かれているという驚くべき真理に対して私たちの目が開かれた時、人生は恐るべき可能性というテクニカラーの爆発をもって私たちの前に開けるのです。

恵みは、荒れ果てた寂しい吹きさらしの平原を肥沃な緑の牧場に変えます。恵みは、奉仕を義務として歯を食いしばり耐えながらやるものから、愛に駆りたてられて自発的に熱心にやるものへと変えます。恵みは、自分で努力し失敗して流す涙と罪責感を、神の右の手により無償で提供される喜びの笑いと永遠のスリルに変えます。“恵みはすべてを変える”のです。

あなたは神の恵みの中に生きることの深い喜びをもう発見しましたか。自分と神との関係は自分の弱々しい努力によるのではなく、神の万能の腕が私たちのために成し遂げて下さったことによるという真理を覚えておくための誰かの手助けを、あなたは心よく喜べますか。

あなたが現在霊的歩みのどの辺りにおられるのか私にはわかりませんが、ほんの少しの間私と共に、神が私たちのために注ぎ出して下さった驚くべき恵みについて考えてみませんか。なぜなら、本当に“恵みは全てを変える”からです。

1章　赦されている

ある晩私は、前内務省長官ヘンリー・キッシンジャー氏のスピーチを聞きました。キッシンジャー氏は群衆に向かって、自分の犯した最初の間違いは彼の自叙伝の１１５９ページに記されていると言っていました。また、それは最初の間違いであると同時に、最後の間違いであるとも言っていました。
もし私が、同様に自叙伝を書くとしたら、私が最初に犯した間違いは、多分既に本の前書きの中に見つけられることでしょう。目次自体に出てこないとしたらの話ですが。私自身の善という基礎の上に、神の御前に立つことなど決して出来ることではありません。それは、私が腐敗した道徳的に堕落した人間であるということではありませんが、私は完全に聖い神の前に受け入れられるに値する程よい人間ではないのです。いえ、それには程遠い存在なのです。

行き詰まりの義

義人になろうとする上で最もよく見られるやり方は、義であることと義ではないことを定義し、ルールを定め、そのルールに従って生活することです。このやり方には1つ問題があります。それは、誰もそのルールを完璧に守ることは出来ないという問題です。失敗すると私たちはその言い訳を作り出します。その典型的なものが、自分の失敗は本当は自分の過失ではないという言い訳です。
例えば、グラスを落として割ってしまったとします。私たちは、自分の体の筋肉をうまく動かすことができなかった為に落としてしまったのではなくて、誰かがタイミングの悪い時にふいに自分に声を掛けたから、自分は驚いて落として割ってしまったのだと言います。また、他の部屋で誰かが騒がし過ぎたから失敗してしまったのであって、私が悪いのではないと言うのです。「ほら、見てよ。あなたがこんな事をしたから、それでこんな失敗をしちゃったのよ。」「これは、あなたがこんなことをさせたから起こったのであって、私のせいではない。」このような調子で誰一人、自分の非を素直に認め、自分の身に責めを負おうとする人はいません。
この態度は、アダムの時代にまでさかのぼります。アダムは自分の失敗をエバのせいにしました。「『あなたが私のそばに置かれたこの女』が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」（創世記3:12)とアダムは神に言い、「自分がこうなったのはエバのせいだ」 と言ったのです。箴言では、このように言っています。「自分をきよいと見、汚れを洗わない世代。」(箴言30:12)
もし、あなたが自分のことをとても純粋な人間であると考えているにも関わらず、まだ汚れから洗われていないようだったら、義はあなたから逃れてしまっているのです。聖書はこう言っています。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」「もし、罪を犯していないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」（第1ヨハネ1:8,10) 聖書は私たちの問題を明確に述べています。全世界は神の御前に罪あるものであり、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができないのです。」（ローマ3:19,23）
私たちがルールを守ることによって自分の義を築こうとすると、必ず最後には自分が状態に応じて上下するはかりによって機能していることを、認めざるを得ない状況に陥るのです。私は、常に自分をあなたよりも道徳的に優った人間として見るだろうし、あなたも常に私を自分よりも道徳的に劣った人間としてみることでしょう。私は、あなたの生活を見てあらゆる種類の傷や欠点を見つける事が出来ますが、私は自分自身の生活を見ても殆ど欠点を見つける事が出来ず、その数少ない欠点でさえも大して悪質には思えないのです。
私の行いによって達成することの出来る義も、見せかけの義に過ぎないのです。聖書はこう宣言しています。「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」（イザヤ64:6）

「もし私たちの神との関係が、私たちの義や善によっていたなら、
私たちは決して成功することは出来ない。」

ある人たちがこのような不潔な着物を装って活歩しているのは、滑稽でさえあります。彼らは「私はお前達よりもずっと聖いのだぞ」と言わんばかりに、偽の敬虔を装い、超霊的な空気を漂わせてぶらついているのです。彼らはささやく様な口調で話します。そのほうが、敬虔で義人であるように聞こえると考えているからです。彼らは欽定訳聖書の言葉を使います。「あなたは」とか「あなたの」と言うよりも、「汝は」とか「汝の」と言う方が、 ずっと敬虔で義人であるかの様に聞こえるからです。彼らは、自分は義人であるという考えにすっかり満足し高慢になり、もったいぶって歩き、人の注目を集める様な態度をしているのを私たちは見かけます。神は首を横に振られ、「不潔な着物め。」とおっしゃるのです。

もし私の神との関係が、私の義や善によって決まるのであったら、私は何年経っても成功することはできません。私はそのことで失敗しています。私は神の栄光を受けるには、大分足りないのです。私が最善を尽くすことの出来る時はといえば、全てが順調で、私のバイオリズムも正常で、楽しい日々を送っている時です。私は「ああ僕もなかなか格好いいな。大した人物だよ僕も。」と考えるのですが、神は、この様な私の最良の時でさえも私を見て首を振り、「不潔な着物だ」とおっしゃられるのです。私の最善の努力も、全く受け入れられるには程遠いものなのです。

律法を守ろうとすると、私の心は責められました。というのは、真の律法は、人の内側の態度を取り扱うからです。私が自分の努力によって義を勝ち取るという基準で努力していた頃、私は、他の人がしているある一定の事に対して、自分が憤りを感じていることに気づきました。私は苦々しい気持ちになりました。私は自分がある一定の人々を嫌っていること、またその人たちの所有物をねたましく思っていることに気づきました。私は自分が自分の作った原則を破ってしまったこと、そして自分の神との関係も一掃されてしまったことに気づきました。私には、 また一から始めるより他にどうしようもありませんでした。

残念なことに、やっと神と正しい関係を回復する事が出来たと感じられる頃、ある出来事が起きました。私は感情的な行動をとってしまい、また振り出しまで落ちてしまうのです。私は、やっと神と良い関係が持てると感じられるようになる段階まで、再び良い行いという梯子を初めから登り始めることを余儀なくされます。しかし、やっとその段階にたどり着いたと一息つくのもつかの間、高速道路で無茶な運転をしている人に、ひやっとさせられた私は、「一体あんたどこで免許取ったんだよ。バカヤロー！」と怒鳴ってしまい、私はまた一から全過程を始めることになるのでした。

何が基準であるのか

イエス様を通さなくても自分は神に受け入れられる自信がある、イエス様など必要ない、という人は、 いくつかの極めて重大な問題に取り組む必要があります。もしあるレベルの善に到達することによって天国に行くことが出来ると信じているのなら、その到達すべき基準とは、どのようなものでしょうか。神は、どのようなことを人間に要求なさっているのでしょうか。多くの人がこう言います。「私は基本的に親切でいい人間だと思っているから、自分の真価だけで神の御前に立つことも厭わないよ。」

しかしこのように言う人達は、神の基準は私たちの基準とは違うということを考慮に入れ忘れています。イエス様は、自力で天国によじ登ろうとする人達に対し、神の要求がどんなものであるか次の御言葉をもってお示しになりました。「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」（マタイ5:48）神と正しい関係を持ちたいと願う人に対して要求される基準とは、完全であ

ることです。完全であるように懸命に努力することでもなく、また単に言葉や行動が誠実であるというのでもなく、神が人間に意図された全てのことを守ることにおいて完璧、全く欠陥の見られない状態であることです。自分の良い行いによって永遠の命を獲得することが出来ると信じている人が、神の聖さと神と正しい関係を持つこととはどういう事なのかについて、正しい理解をしていないのは明らかです。

義なる行為の基準を定めるとしたら、イエス・キリストによって築かれた基準を使う必要があります。なぜなら、イエス様のみが神に「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ3:17)と言わせた、只一人の方であるからです。神との交わりを楽しむ為には、私たちはイエス様と同様に義なる存在でなくてはならないのです。イエス様はヨハネ16:8,10で「その方(聖霊様)が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。・・また義についてとは、わたしが父のみもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」イエス様の天国への昇天は、ご自分の御子についての神の証しでした。神は、まるで次のように言っておられるかのようです。「*これが*、私が天国で受け入れる義なのだ。」イエス様の生涯のみが、義の唯一の基準です。神に受け入れて頂きたいのなら、私はイエス様と同じ位置にいなくてはいけません。聖書は、神が受け入れる義には一種類しかなく、それはまさにキリストご自身の義であると教えています。ですから、自分の良い行いという基礎の上に神の御前に立ちたいと願っている人は、イエス様に見られる善に見合う程の生活を送らなくてはいけないのです。

しかし、私はそのような事が不可能であることを知っています。私には、そのような義を達成することは出来ません。イエス様ご自身が次の様におっしゃいました。「わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」(マタイ5:28)「わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。」(マタイ5:22)また、こうもおっしゃいました。「あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には下着も拒んではいけません。すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。」(ルカ6:27－30)そして、イエス様は私たちにこう命じました。「ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。」(ルカ6:35)

誰が*こんなに*義人であり得ましょうか。私は、自分がこのようにはなれないことを知っています。私は惨憺たる結果をもって失敗しました。ということは、私は永遠に神から分離されるということでしょうか。私が神との交わりを楽しむことの出来る道はないのでしょうか。私は常にこの空しさの中に、失望感、挫折感の中に決して得ることの出来ないものを求め、手に入れようとして生きていかなくてはならないのでしょうか。

私たちが神から赦される希望がもしあるとしたら、それは私たちの行いという基礎とは違った基礎でなくてはなりません。パウロがこう宣言している通りです。「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。」(ローマ3:20)

私達が神との交わりを楽しむことが出来るとしたら、私たちの義以外の基礎でなくてはなりません。神が義の為に打ち立てられたルールは、あまりにも厳重すぎて私たちにはとても守ることはできません。私たちには無理なのです。私たちの唯一の希望は、別の形式の義が私たちの為に与えられることのみです。私たちの行いというものからは、全く相違する原則に基づいた義です。

神様、感謝します。その様な原則が事実、存在するのです。*恵み*と呼ばれる原則です。

恵みとは何か

*恵み*という言葉の根源の意味は、“美”です。新約聖書における恵みは、“神がその人の真価に関

係なく、与えて下さる好意、贈り物”という意味です。恵みとは、私が自分の力では得ることの出来ないものを私にくださることです。恵みとは、私にはその価値がないのに神に受け入れられるということです。
聖書は、私たちが神に対する信仰と信頼を土台に、恵みを受けると教えています。ヘブル11:6には、信仰がなくては神を喜ばせることは出来ないと書いてあります。イエス・キリストを信じる信仰と、そのイエスが私たちの代わりに死んで下さったことを単純に信じる信仰により、私たちは聖い神から赦されているのです。私たちが神に信頼を置く時、私たちの過去の記録は、水に流されるのです。
何かの律法や宗教制度を守ることによって、私たちが赦されることはありません。不可能です。私が神に近づくことが出来る様な基礎を築くために、キリストが十字架につくことは必要不可欠な事でした。
イエス様が園で祈っておられた時、イエス様はおっしゃいました。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」（ルカ22:24）つまり、イエス様はここでこうおっしゃっていたのです。「私の死以外の方法で人々が救われるのでしたら、それが可能でしたら・・・例えば信心深くいることで救われたり、何らかの方法で自分の義を得ることによって救われることが可能でしたら、私は十字架につきたくはありません。どうか私をこの恐ろしい試練に会わせないで下さい。」しかし、それは不可能でした。ですから、キリストは十字架につき、死んで葬られ再びよみがえったのです。キリストの死は、神があなたや私に恵みを差し伸べることを可能にしました。
多分、次の説明はこの真理を分かり易くする上で役に立つことでしょう。あなたが、ある犯罪で告発されたと想像して下さい。あなたは、近所の人の所有地に無法侵入したことで告発されています。どんな被告弁護人も知っている通り、あなたがその告発から解放されるには2つの方法があります。一つはあなたがその人の所有地には侵入しなかったことを証明する方法、もう一つは侵入してそこに行く権利があなたにあったことを証明する方法です。
さて、この論理を私たちの霊的状況に当てはめてみましょう。神は私たちが罪人であることを告発しました。神の律法とみこころに反抗したことを告発なさいました。また、私たちの不義であることを告発なさいました。
私たちはこれらの告発に対し、どう弁明することが出来るでしょう。私たちは無実だと言うことは出来ません。私たちは実際有罪なのですから。すべての人が罪を犯したのです。かといって、私たちにはそうする権利があったと言うことも出来ません。そんな権利はなかったのですから。私たちの行為は明らかに間違っていました。それでは、律法は、私たちの赦されたいという願いにおいて、 価値あるものなのでしょうか。答えはノーです。この件は開かれているが、閉じられています。私たちにはそうする権利がなかったのに、とにかくやってしまったのです。ですから、私たちは神の御前に有罪人として立つのです。

大銀行強盗

例証を変えましょう。私が銀行を故意に強盗したと仮定します。律法によると、私は罪に定められます。なぜなら、私は銀行強盗をしなかったと言うことも出来なければ、しなかったとして証明することも出来ないからです。ビデオカメラにしっかりと私の姿が映っているとします。私は自分には強盗をする権利があったと言うことは出来ません。強盗は米国憲法の修正箇条には含まれていないからです。ですから、法律の範囲内には私の赦される法はありません。
裁判の間、私はこう言うことも出来ます。「一生の間、もうどんな銀行強盗もしません。私はこれから清く正しい生活をします。私はもう決して誰からも不当な手段で、お金を取りません。」しかし、こう言ったところで私が既にしてしまったことを正当化することは出来ません。また、私は今まで教会に

献金したり、家族を養ったり、自分はお金を使って良いことをしてきたから、当然今回は赦されるべきだと言う事も出来ます。しかし、私の義なる行為も、私の罪を清算し埋め合わせることは出来ないのです。

裁判官は私に私の取ったお金全額を、その銀行に返すよう命じるかもしれません。また私への罪の宣告の一部として、アメリカをよりきれいにする為、道路の捨てられている空き缶を拾って歩くよう命じるかもしれません。私は残りの人生を良いことの為にのみ費やすかもしれません。しかし、 そうしたとしても私がしてしまったことを清算することは出来ないのです。律法に定められている行いをすべてしたとしても、あなたの罪は消えません。私の過去の悪い行いは、依然として存在します。わたしは強盗で、有罪という評決は明らかです。それでは何故、霊的なことで多くの人は自分の良い行いという美徳を、神の御前に自分を無実とする為の言い訳として用いたがるのでしょうか。

自分の罪や不義に対して、後悔や新しい抱負をもって反応する人が多くいます。私たちは改訂をし、新しいやり直しをしたがります。しかし、このような努力によって、赦しを得ることは出来ません。私たちが最大限の努力をしても、私たちが既にしてしまったことの罪を取り除くことは出来ません。私たちは、良い行いによって正当化されることはありません。たとえ全生涯を良い行いをして過ごしたとしても、たった一つの罪を償うことは出来ません。

神の赦しの土台は、神の一人子の犠牲です。私たちの全ての罪が　ー　私たちの過去の過ちも将来犯す過ちも　ー　全てがイエス・キリストという罪のない羊、罪を知らない完全な方の上に置かれました。イエス様は私たちの為に死なれました。イエス様は私たちの罪を背負い、私たちの罪の為に苦しみ死んで下さいました。パウロは書いています。「神は罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。」（第2コリント5:21）イエス様は、私たちがイエス様を通して赦されるように私たちの為に罪となられました。つまり、イエス様は、私たちと立場を交換されたのです。「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」（第2コリント8:9）イエス様は私たちの罪を取られ、私たちのイエス様に対する単純な信仰と信頼によって私たちを赦されたのです。

イエス様、私たちの希望

神が、私たち全ての不法行為をイエス様の上に置かれた時、キリストは私たちの罪に対して課せられる裁きを受けられました。イエス様は、私たちに当然課せられるべき罰（聖書はこれを死と呼んでいる）を受けられました。（ローマ6:23参照）もし私たちが、私たちの主、救い主としてイエス・キリストとして信じるなら、私たちは犯した全ての過ちを赦されると神は宣言なさいました。「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」(第1ヨハネ1:7)この清めは、律法には決して出来ないことです。これが、恵みの備えです。

「私たちは自分の努力で天国によじ登ろうとすることも出来るし、
自分の信仰をイエス・キリストに置くことも出来る。」

事実、信仰のみが私たちの*唯一の*希望です。私たちの良い行いや、努力、奉仕は決して私たちに神の赦しをもたらすことは出来ません。パウロは、強い語調で次のように宣言しています。「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」(ローマ4:5)何の奉仕をしていなくても、ただ信じている者に、神は義を与えて下さるのです。神は、イエス・キリストが私たちのために成し遂げて下さった御わざに対する私たちの信仰の故に、私たちにこの赦しを与えて下さるのです。

選択はあなたのものです

あなたには選択の余地があります。あなたには、自分の努力で天国によじ登ろうとしたり、キリストと同じ位、善になろうと努力することも出来ます。もしくは、自分の信仰をイエス様に置き、神の恵みによる贈り物として神との正しい関係を頂くことも出来ます。

私にとっては、この選択は全く選択でさえもありません。私は、自分の良い行いによって天国に行こう事など全く不可能であることをよく知っているからです。私は、私の過去の罪という基礎の上にはなす術もなく、罪に定められて立ち尽くすのみです。私には、神の恵みを抜きにして、神に受け入れられることなど全く不可能なのです。

良き知らせがここにあります。神は、神に受け入れられる方法を備えて下さっているのです。どんな罪も神のご臨在には宿ることの出来ない程、完全に聖く、純で義なる方は私たちのような人間でも神と交わりを持つことの出来るような道を作って下さいました。イエス・キリストが私たちの為に払って下さったこの犠牲を私たちが信じる時、たとえそれが私たちの受けるに値するものでなくとも、御父は私たちに完全な赦しを与えてくださるのです。

それが、恵みの福音です。私たちは完全にはほど遠い存在ですが、私たちの内の誰もが、それぞれ神と関係を持つことが出来るのです。私たちは、御子イエス・キリストを通して神と麗しい関係を持つことが出来るのです。

私たちが、神の御子を通して信仰によって御父と関わる時、私たちは堅実な関係を持つことが出来ます。私たちは、今、神の子どもです。神は私たちの父なので、一体自分は神のみもとに来る価値のある存在なのだろうかと悩む必要はありません。私たちはその様な価値があるという土台に基づいてみもとに行くのではなく、私たちの神との関係故に行くのです。

これが恵みの福音の全貌です。神は、私たちが神に対して何の不法行為もした事がない者のように、私たちをご覧になられます。しかし、私は自分をその様な見方で見ることに困難を覚えます。私は鏡で自分の姿を見、「チャック、お前は罪人だ。食欲さえもコントロール出来ないのだ。お前にはあまりに多くの欠陥がある。」と言うのです。しかし、神は私をご覧になり、「あなたは赦されているのだよ。」とおっしゃいます。神は、ありのままの私を愛しておられ、受け入れて下さっています。それは、私がキリストの内にあるからです。神がご自身の一人子を受け入れておられる様に、 今私をも受け入れて下さっているのです。パウロは、こう教えています。私たちは、（神に）「愛されているお方」にあって受け入れられている、と。（エペソ1:6）神に愛されているのはキリストですが、キリストにあるあなたも、キリストが神に受け入れられているのと同様に受け入れられているのです。

これが、この恵みの福音が、わたしがかつて聞いたことのある中で最も良い知らせである所以です。神は、私たちの罪の為に死ぬ為に、ご自分が遣わされた神の御子を、私たちが信じているので、私たちを赦しておられるのです。私たちの全ての罪は、消されました。もう罪のつけはないのです。パウロが私たちに言っている通りです。「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。主が罪を認めない人は幸いである。」（ローマ4:7,8） 神の子供として、私たちは自分に必要なものは何でも御父のもとに来て求める権利を持っています。神は、何が私たちにとって最善であるのかご存じであるので、その知識に従って私たちの要望を聞き入れるか、拒むか、御父の英知を信頼する権利を私たちは持っています。私たちは、私たちを愛してやまない天の父に自分を委ねることが出来ます。神は、私たちにとって最善のものだけを与えて下さるのです。

神が、ー 私たちが受けるに値する存在だからではなく、神が私たちを愛するが故に、ー ご自身の愛の豊かさや満たしを与えたいと願っておられるという事実を知ることは、何という喜びでしょう。これがイエス・キリストにおける恵みの福音なのです。

２章　ドアは決して閉じられることがない

赦されているというだけでも素晴らしいのですが、赦しは恵みの福音の半分でしかありません。神はキリストにおいて私たちを赦して下さったことを信じる人は多くいるのですが、そのような人たちが信じることに困難を覚えているのは、この良き知らせのもう半分の部分、つまりイエス・キリストを信じるだけで神は私たちを義と認めてくださるということです。

そのことを誰もが信じる訳ではありません。そのことを信じるには、全く程遠いところにいるのです。様々なグループが義の基準を築き上げようとしましたが、この基準が如何なるものであるべきかに関しては滅多に合意までこぎ着くことが出来ません。

金は中か外か

さほど昔のことでもありませんが、いくつかの団体がボタンを身につけるのは不義であると教えました。そこでその団体に属する人たちは衣類にホックを使い、どんな服にもボタンをつけることなど考えもしませんでした。彼らは「あなたはボタンを身につけていますか。」と聞き、相手がはいと答えようものなら「あなたは何て不義な人なのでしょう。全く恥ずかしいことです。」と憤慨して言いました。今日でさえ、金を身につけることは全く罪深いことであると教えている団体があります。もし金を身につけているのなら、あなたは決して義人にはなり得ないとその団体は言うのです。人々は昔から様々な義の基準を、－　常にその特定の基準を実行していけば、神は自分を受け入れて下さるという考えを持って、－　築いてきました。。

しかし、規定や行いによって義を築き上げようとする上で浮き上がって来る本当の問題は、実際のところ私たちが自分自身の作った基準でさえも滅多に守ることが出来ないということです。私たちは、皆何が良いことで何が悪いことかという道徳の基準を受け入れます。これが本当の私であって、または、少なくとも外部の妨害がなかった場合の、自分の姿であると私たちは言います。心理学者達は、これを超自我、理想の自分と呼びます。しかし、残念なことに誰もその「本当の自分」を知りません。なぜなら、「本当の自分」は完璧であるからです。実際、私自身も本当の私を知りません。環境が、常に自分を本来の素晴らしい私となることから妨げ続けているからです。

心理学者達は超自我と共に「自我」についても語ります。本当の自己、本当のあなたである「自我」です。悲しいことに本当のあなたは、決して理想的なあなたの基準に到達することは出来ません。

さて、あなたの超自我と自我との間に膨大な違いがある時、あなたは不適応の人間とみなされます。一方あなたが自分は完全な人間ではないし、理想の自分としてそんなにも高い基準を持ってはいない場合、あなたはよく順応した人として賞賛を受けます。

心理学者は、患者に対して、その人の持っているゴールは非現実的であると言うことによってその人の超自我の基準を下げようとします。「誰もそんなに完全じゃないし、誰もそんなによい人間ではないのだよ。」「あなたがやっていることは、何も異常なことではないよ。誰でもすることだ。自分に対してあまりにも高い基準を設けようとすべきじゃないね。」療法士達は、私たちがよりバランスのとれた生活を楽しむことが出来るように、常に超自我と自我との相違を狭めようとしています。超自我の基準を下げることによって癒そうとしているのです。

これをイエス・キリストの御わざと比べて見て下さい。イエス様は、超自我を低くしようとはなさいません。イエス様は、　自我を引き上げることを目的にしておられます。イエス様は、本当のあなたの姿を引き上げたいと願っておられるのです。

本当の私は、理想の私には比較にならない程低い位置にあるのですが、イエス・キリストに対する私の信仰故に、　私は神の御前に義人であり、神は私を完璧な義人としてご覧になっているのです。

これが、福音の２番目の局面です。１番目の局面とは、あなたのイエス・キリストに対する信仰ゆ

えに、あなたの罪は洗い流され赦されているというもの。2番目の局面とは、あなたがイエス・キリストを信じているので、神はあなたを義人として見ているというものです。あなたがイエス・キリストを信じているので、あなたがしていることやしていないこと、倫理のおきてを守る守らないに関係なく、神はあなたを義としているのです。
これが栄光に満ちた福音、よい知らせです。私のイエス・キリストに対する信仰によって神が私を受け入れて下さることを知ること、そしてイエス・キリストによって自分が義とされるとは実際素晴らしい知らせです。

戸は開かれている

何故福音は、そんなによい知らせなのでしょうか。私はもう決しておびえて次のように言う必要なないのです。「私は神のみもとには行けないよ。いま嘘をついてしまったからね。今、ついかっとなって我を失ってしまったから。あの人を裏切ってしまったから。失敗してしまったから私にはもう神に助けを求める権利なんてないんだ。」もし私の義が、私の行いによってもたらされるものであったなら、サタンは神への戸を実際四六時中閉ざすことが出来たでしょう。なぜなら、私が自分でしなくてはいけないと感じることの全てを実行することなどないからです。自分で分かっていながら、いつも理想通りの清く正しい行動を取る訳ではありません。私は、いまだに自分の超自我に到達していません。私は、自分が信じている正しさの基準にさえ従って生きることさえ出来ていません。私がこのような数々の理想の基準に到達することに失敗しているので、サタンは私が神のみもとに行くことから私を妨げる手段として、私の失敗を使おうとするのです。「お前は神の要求に従うことに失敗したのだから、お前には神に助けを求める権利なんてないんだ。お前は神がお喜びにはならない行為だと知っていた上で、そういう行為をしてしまったのだ。お前は今困って神に助けて頂きたいと願っているが、神が今更お前の助けを求める声に耳を傾けると思うか。そんな筈ないに決まっているだろう！」
サタンが私に自分の内側に目を向けさせ、自分自身に目を向けさせることが出来るならば、神への戸をいつも閉じていることが出来ます。しかし、私がイエス・キリストを見上げており、自分がキリストに対する信仰故に義と認められていることに気づいたら、サタンは決してその戸を閉じることは出来ません。
しかし、サタンは依然として私のところに来ては言います。「チャック、お前はなんて腐ったどうしようもない奴なんだ。お前には人々の前に出てイエス・キリストの栄光の福音を伝える資格なんてないよ。お前にはあそこに立って神の御言葉を教える資格なんてないんだ。お前はこういう面でも失敗したし、ああいう面でも失敗したじゃないか。お前なんてどうしようもない奴だ。」
この様なサタンからの責めを受けたときは、 いつでも私の頬はほころび始めます。私は自分が数少ないことで合格していることを確信しているからです。私は、 サタンが持ち出しもしない2、3のことがあることも知っているのです。私はサタンに言います。「サタン、そんなことを言って私を責めたてても、 私を恐がらせることは出来ないよ。それに私を何処かに隠れさせたり逃げ出させる様に仕向けることも出来ないよ。実際お前が言っている事が事実であることは、 私も知っている。私は自分が失敗したことも自分に弱点があることも知っているんだ。でもお前には私をイエス・キリストから引き離すことは出来ない、いや逆にお前は私をイエス・キリストの方へと導いているんだ。私の唯一の希望はイエス・キリストの十字架なのだからね。」と。
そして私は、私が安全でいられる唯一の場所、唯一の希望のある場所に逃げます。確かなことは、私は自分自身にも自分の義にも希望が持てないということです。しかし私は、イエス・キリストが私のために成し遂げて下さった御わざと、神が私をキリストに似た者に変えていく為に、聖霊の力を通して私の内になして下さっている御わざとに大きな希望を持っています。
私が自分の力では出来ないことを、神は私に変わってして下さっています。私のとても弱かった部

分を、 神は強くして下さいました。私は自分の弱さを認め、どうすることも出来ず無力にも自分の身を神に委ねました。私が、 かつて弱く続けざまにつまずいていた面に今、私は力強く立っています。なぜなら、神の力は私の弱さのうちに完全に現われるからです。（第2コリント12:9）
確かに私はまだ、神が私にお望みになっておられる全てを持った存在になってはいません。まだほど遠い存在です。しかし、神に感謝すべきことに私は過去の私ではありません。現在の、まだ未完成の段階でも、神は私を義人、聖なる者とご覧になって下さっているのです。だからこそ私はキリスト・イエスの内以外の何処にも捕えられたくないのです。私たちは決して自分をキリスト・イエスと切り離して見るべきではありません。

義に級や段階はない

私たちがイエス様を信じているという理由で、神が私たちにキリストの義を与えて下さっているのならば、私たちが良い行いによってその義をより良いものにしようとするのは愚かなことです。神が私たちに与えて下さった正しい身分を、私たちが改善することの出来る余地などないのです。私たちは義人です。私たちがイエス・キリストの御わざを信じ信頼しているので神は私たちをその様に見ておられるのです。

「現在、そして永遠における私たちの義は、
神の御子イエスに対する私たちの単純な信仰の結果である。」

天の御国では、自分がいかに努力して義人となったのか自慢する人はいないでしょう。私たちは、アブラハムやダビデやパウロが、神の御前に義人としての身分を得るために、自分がいかに素晴らしい行いをしてきたかという、いつ終わるともしれない自慢話に耳を傾けなくてもいいのです。アブラハムもダビデもパウロも単に神を信じたので、その信仰により義人と認められたのです。
私たちの内誰一人として、天の御国でお互いにどちらがより多く良い行いをしてきたか比較し合う人はいません。神の王座の前に栄光を受ける人は、一人しかいないのですから。輝く星は一つしかないのです。天の御国には、自分のしてきた良い行いに対して与えられた栄光の中に浸る人がいれば、街角に立ちどうして自分がこんな結果になってしまったのか後悔のうちに思いを巡らす人がいる、というようなある種の霊的カースト制度のようなものは存在しないのです。イエス様、イエス様のみが、私たちの救いの栄光をお受けになるのです。栄光がイエス様のものでなかったら、私たちの内誰一人としてそこにいることはないでしょう。
パウロが、こう言い表しています。「私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」（ガラテヤ6:14） 私たちが、神のためにどんなに多くの良い行いをしたとしても、どんなに多くの人を神に導いたとしても、どんなに多くの教会を神のために築いたとしても、私たちの唯一の誇りは、イエス・キリストという私たちのために死んで下さった方のみです。私たちの義は、良い行いや人間の努力、またはある儀式を守ることやある食べ物に関する律法を守るという次元の問題ではありません。私たちの義とは、ここにおいても現在、永遠においても、神の御子イエス様に対する私たちの単純な信仰の結果なのです。
信仰による義は、キリストに属す者達の間の差別、つまり誰が優秀で誰がそうではないという議論を全て消し去ります。私があなたより優秀ということはないし、逆に私があなたより劣っているということもないのです。私たちは皆、ただ神の栄光に富んだ恵みによって救われた罪人なのです。神が受け入られる義には一種類しかなく、それはイエス・キリストの義です。
もし私が、自分自身の義や行いという土台に立って神と関わることを求めていたり、今週は良い態度で過ごしたとか、聖書を多く読んだとか、よく祈ったという理由で神に祝福して貰うことを期待して

いるとしたら、私の神との関係はいつも弱々しいものになっていたことでしょう。私は時に自分の神との関係は良く、また時にあまり良い状態ではないと感じていたことでしょう。なぜでしょうか。それは私が自分の義という土台で神と関わろうとしているからです。

恵みがなかったら、私の神との関係はいつまで経っても実在の確立したものにはならず、平安を楽しむことなど不可能になってしまいます。もし私の神との関係が、私がどう感じるかとか、私がどの様な生活をしているか、もしくは私自身の義によって左右されるものだったら、私はほとんどの時神と関わりを持つことが出来なかったことでしょう。

しかし、私の神との関係は、神の私に対する恵みに基づいて成り立っている為、祝福の戸は決して閉じることがありません。神の祝福は、神の恵み、神の無償の好意に従って与えられるのです。私は、決して神の祝福を受けるにふさわしい人間ではないし、神の祝福とは、私が努力をする事によって得ることの出来るものでもありません。私の人生にもたらされる恵みとは、常に神の私に対する無償の好意、愛に従って与えられるのです。神は私をとても愛しておられ、私を祝福して下さいます。神は、本当によくして下さいます。私たちが、神の私たちに対する驚くべき恵みを知った時、私たちの心からは真実に神を誉めたたえる言葉が沸き上がってきます。

頑固な傾向

自分の義は、自分が神の為にする行いに何らかの関係があるという概念を取り払うことに私たちはとても苦労します。私たちには、ある一定のクリスチャンをその態度や行い故に、他のクリスチャンより聖いとみなす傾向があります。そして私たちは、自分が人を判断するのにもこの基準を用いていることに気づくのです。誰かが自分と同程度の奉仕をしていなかったり、自分程熱心ではなかったりすると、その人は自分程義人ではないと私たちは判断するのです。

この、行いによって義の度合が決まるという考えを取り去ることは、実に難しいことです。この概念は私たちの内に余りにも深くしみ込んでいるので、私たちの多くが罪悪感と常に戦うことになります。私たちはクリスチャンであっても、自責の念に駆られる様な事をしている自分に気づくことがあります。私たちは神を愛しているので、神の子としての身分と合わせ、自分の個人的な行いの基準を適用したいと考えるのです。私の内にはいまやキリストがお宿りなっているのだから、自分はその神の愛
ー寛容で忍耐深く、穏やかで親切で慈悲深い愛ーを周りの人に表わしたいと。

しかし、私のいのちにある愛は何ともろいのでしょう。例えば、私が高速道路を走っていて、私の前の車が私の命取りにもなるような危ない運転をしたとします。きわどい所で助かった私は、すぐさま怒りの感情に満たされクラクションを鳴らし、その人の車のバンパーを後ろからつついて、私がどんなに腹を立てているか、自分を危険な目に合わせた馬鹿者に教えてやりたいという衝動に駆られます。しかし、このような一連の卑劣な事をした後、私は自分の車のナンバープレートに「Calvary（カルバリー）」 と書かれていることにふと気づき、前から持ち続けてきた自責の念が 、私の心に流れ込んできます。「神の証し人になりたいと言いながら、 お前は一体どういう証し人なのだ！」と自分を責めたてる思いが洪水の様に私の心を満たし、全く自分は何と不義な存在なのだろうと感じさせます。自分はまた積み上げてきたものをぶち壊しにしてしまった、また神の要求に沿えなかった（失敗した）、と感じ完全に神から引き離されたように感じるのでした。

「努力や行いという土台の上に神との関係を持とうとすることは、
常に、苦闘を意味する。私たちは神の恵みを体験するまで
神の平安を知ることは出来ない。」

自分の行いは間違っていたとしても、自分の行いは自分と神との関係には何の影響も及ぼさないことを理解することは、 実に難しいことです。行いと律法の概念を義と切り離して考えるのは実に難しいことです。自分の行いがどうであるかという問題と自分が神の前にどんな身分をいただくかということは深く関連している様に思われるのですが、実は何の関連もないのです。

私が、神の御子イエス・キリストを信じているという単純な理由の故に、神は私に正しい身分を与えて下さった、これが真理なのです。もし、「運転中は決して腹を立ててはいけない」とか、「子供に対してかんしゃくを起こしてはいけない」などの一連のルールを守ることによって神と正しい関係を持つことが出来るとしたら、自分の行いと、神に対する自分の身分とが関連していることになります。しかし、いのちを与えるルールなどないのです。それは、罪が神からの分離と死をもたらしたからです。私たちがいのちを持つために、神は行いによる義よりもより良い約束に基づいた新しい契約を築かねばなりませんでした。その新しい契約が、恵みの福音です。

恵みと平安

あなたは、どうしようもない人かもしれません。自分は怒りっぽい惨めな人間だし、いくら神でも私を愛することなど出来る訳などないと、あなたは感じているかもしれません。自分の肉の失敗に飽き飽きし、裁きの日には神に背を向けられて当然の人間であることを自分でもよくわかっているとします。

しかし、突然、神があなたに素晴らしい栄光に富んだ祝福を与えて下さったとします。その瞬間、あなたの心から自発的に神を崇める賛美が沸き上がってきます。これこそが、真の賛美、崇拝です。神の恵みに対して自然に沸き上がって来る神への崇拝です。「神はなんて私に良くして下さるのだろう。私には何の価値もないのに。」と思わず口走る崇拝です。

私は、恵みという土台に立って神と関わっているので、私が神の祝福から切り離されることは決してありません。しかし、もし私が自分の善や行いという土台に立って、神が私に代ってご介在下さる事を期待しているとしたら、私は大半の場合祝福から切り離される事になります。

私は、神が私の人生を祝福して下さらないのは、神の恵みに対する私の信仰が欠けているからであって、私の表面的な振舞いには何の関係もないことを発見しました。私は神の祝福が無条件で与えられることを学びました。神の私の人生に対する祝福を多く見れば見る程、自分がいかにその祝福には値しない人間であるかより強く気づかされました。この真理の故に、私は素晴らしい平安を持つ事が出来るのです。私には心配したり、くよくよしたりする必要がありません。

もし私たちが自分の神との関係の土台として自分の義を信頼しているとしたら、私たちが常に平安を持つことなどあり得ません。努力や行いという土台のよって神と関わりを持とうとすると、常に苦闘し、緊張し、力み、圧迫感を覚えることになります。私たちが神の平安を知るようになるとしたら、まず私たちが腐っていてとてもそれには値しない存在であるにも拘わらず、この神の驚くべき恵みがまず私たちに向かって流れて来ることに気づかねばなりません。

そして私たちがこの神の素晴らしい恵みを受け入れた後、神の恵みが私たちの心や生活を満たします。私たちは、自分が完全には程遠い存在であるにも関わらず、また神の要求に失敗する者であるにも拘わらず、神は私たちを愛しておられることを知っています。誰一人として自分を愛してくれていない様に思える時でも（自分でさえ自分のことを愛せないのだから、誰も愛してくれなくても無理はないとさえ思える時でさえ）神は、私たちを愛しておられるのです。

あなたは、新約聖書のベトちゃんドクちゃん（ベトナムに生まれた体の結合した双生児）について聞いたことがありますか。それは「恵み」と「平安」という短い2つの言葉です。その2つはいつもその順序で組になっています。双生児のうちお兄さんに当たるのが、「恵み」と言えます。それは常に「恵

みと平安」であり、「平安と恵み」という風にはなりません。何故でしょうか。なぜなら逆にすることは、馬の前に荷馬車を置くようなものだからです。正しい順序は常に、恵みと次に平安です。なぜなら、私たちは自分の生活における神の恵みを経験するまでは、自分の心に神の平安を知ることは出来ないからです。

イエスと同じくらい聖い者

聖書は、イエス様に信仰を置く者は義とされていると言っています。それは、どういう意味でしょうか。それは、神が私たちに、まるで私たちが一度も罪を犯していないかのような神の御前における身分を与えて下さったということです。

これは、神が成し遂げるのに決して小さな役割ではありませんでした。というのは、もし、私たち全てが実際罪を犯し、的を外してしまったのなら、神はどうして私たちが一度も罪を犯したことがなく依然として公明正大であるかのように見ることが出来るでしょうか。神が私たちの生活そのものを見た上で、神のその正義感あふれる公明正大なご性質に従って行動をとらなくてはいけないとしたら、神はどうやって私たちが完全であるかの様に取り扱うことが出来るのでしょうか。

これが、福音の力の入り込む場所です。神は、罪のないイエス様を私達のために罪ある者とされました。神は、罪のないキリストの上に私達の不法の全てを置いたと聖書は教えています。イエス様は、文字通り私に代わって罪人の私が受けるべき罰を受けて下さったのです。

これが、栄光に富んだ恵みの福音です。私たちは、自分達が律法の下で達成し得る何事にもはるかに優った、神の御前における義という身分を持つ事が出来るのです。私たちがどんなに慎重に律法を守ろうとしても、私たちは常に不満足な結果しか収めることが出来ません。しかし、キリストに対する信仰によってもたらされる義が私たちに与えられ、その義は完全です。その義につけ加えることの出来るものは何一つありません。キリストの内に、私は神の御前に完全に完璧な義人としての身分をもって
いるのです。私に突きつけられる請求書はありません。神の目に、私は完璧なのです。これは私が完璧な人であるということでは決してありません。これはイエス・キリストが完璧なお方であり、私はキリストに対する信仰の故に与えられた、キリストの義を持っているという事です。

私は、神が私の心にもたらして下さった神の恵みの知識と、現在私が持っている神との愛の関係をどんなに感謝していることでしょう。それは変わることがありません。私が落ち込んでいようと間違った行動をとっていようと、腹を立てていようと、変わることはありません。それはぐらつくことがなく不変で、常にそこに存在し、満ち満ちた関係です。私が人を愛し、優しい存在である時も、卑劣でさもしい存在である時も、神は私を愛しておられます。神の恵みと、恵みに基づいた福音を知ることは、なんと素晴らしいことでしょう。

３章　御国にえこひいきはない

この人が救われることなど殆ど不可能だと考えている人が、神の御わざによって次の決心者になって驚くことが頻繁にあることに、あなたは気づいておられますか。カルバリーチャペルでも、 長い間連絡の途絶えていた友達同士が廊下でばったり会って「一体、ここで君が何をしているんだ」とお互い不審そうな顔で見つめ合い、手に聖書を持ち、顔に笑みを浮かべたお互いの姿に、驚きつつ喜び合うことも、決して珍しいことではありません。お互い相手が救われようとは、夢にも思っていなかったのでした。

初代教会において、サウロの救いの為に祈っていた人が沢山いたようには、想像しずらいです。初代教会の人たちは、 多分こう祈っていたことでしょう。「主よ、あの男を消し去って下さい。あの男は私たちを殺して、教会を滅ぼそうとしています。主よ、どうかあの男を止めて下さい。」彼らは多分、神がサウロを厳しく裁かれることを願っていたことでしょう。

しかし、神は彼らが予想もしなかった方法で、サウロをお止めになりました。神はダマスカスへの途上にあった時、サウロの人生を停止させ、彼を１８０度方向転換させました。サウロはパウロとして生まれ変り、恵みの福音史上最も偉大な、人々に真理を指し示す人物となりました。

神は、候補者のうち最も意外な人を取って、神の恵みの戦利品に変えることの専門家です。神は、私たち一人一人に、素晴らしい変化をもたらすことがお出来になります。神は私たちの価値観を変え、私たちをキリストにあって新しい創造物とすることがお出来になります。神は、私たちを神の恵みが成し得る事の実例になるよう招いておられます。

誰も小さすぎる人はいない

時々私たちは、神は 「特別な」人　ー　強くて知的で美しい人　ー　しかお用いにならないと考える間違いを犯します。残りの、特に才能もない私たちが用いられる余地など、神は持ち合わせておられないと私たちは考えるのです。何という大きな考え違いをしていることでしょう。神にとって特に重要な人物などいないのです。神はごく普通の人をお用いになり、平凡な人を通して働かれるのです。パウロが次のように書いている理由がここにあります。「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」（第1コリント1:26,27）

神は、私たち普通の人々を愛しておられ、キリストの体の内で自分の役割を私達が果たすことが出来るように、賜物を与えて下さいます。私たちが持っている能力は、どんなものも神の御手からの賜物、贈り物なのです。私たちが持っている物全ては、神から与えられた物です。パウロが、 言っている通りです。「あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。」(第1コリント4:7)

まるで神から自分が務めも何も頂いてはいないかのように、また私が皆さんに分かち合うことの出来るものは私の才能や才気であるかのように、自分の牧会活動を得意がることは出来ません。私の持っているもので値打ちのあるものは、どんなものも神から頂いたものです。まるで自分が神から独立した人間であるかのように、誇ったり自慢したりすることなど出来る筈がありません。神を離れては私は何の価値もない人間です。神を離れては私は何も出来ないのです。

人々は、よく神の働きにおける自分の役割の重要性や素晴らしさを誇り、得意がったりするようになりますが、真実を言うと、神は私たちの内の誰一人として必要ではないのです。誰かがいないと神がお困りになるということはありません。もしこの真実により、あなたが自分を重要でない、取るに足らない人物だと感じるのでしたら謝ります。しかし、これが真実なのです。神は私たちを用いることをお選びになっていらっしゃいますが、別にそうしなくてはいけない訳ではありません。神には、誰

か他の人をお用いになることも簡単に出来るのです。
私にとってこの真実は、わくわくするものです。私が素晴らしい人物であるから、私が主にご奉仕するよう選ばれたのではありません。神は私たちの能力や可能性、偉大さ故に私たちを選んだりはなさいません。神が私たちをお選びになったのは、神がそう決意されたからです。自分を重要人物とみている、誇った人たちはそのような事を好みません。そのような人達は、選ばれるということを大した事として受け入れることが出来ず、結局のところ、大抵の場合用いられていません。神は恵みによってお用いになる人を選ばれます。神は私をお選びになり、また、あなたをお選びになります。
天国は、驚きに満ちた所になることでしょう。私たちが周りを見渡す時、最初に驚くことは、天国に来ることは決してないだろうと思っていた人々を天国で見かけることでしょう。第二番目の驚きは、栄誉を受ける場の最前列に座っている人達を見た時です。私たちは、こう口々にささやくことでしょう。「あの人達は誰なの？一度も見たことないけれど。」「あの内の幾人かは、カルバリーチャペルに行っていた人だよ。」と誰かがそう言うと、他の人が「でもチャックは、何処にいるの？」と言います。群衆のずっと後ろ、天井桟敷（劇場最上階の一番安い席）から、私は大声で言います。「ここだよ！神に感謝します。神の恵みのお陰で私は天国に来ることが出来ました！」

天国では全ての人が平等

ダマスカスへの途上でイエスと対面する前までは、使徒パウロは人生の大半をパリサイ人として過ごしました。ご存じの通りパリサイ人とは、イエス様に強く反対した、厳格で律法的なユダヤ人の宗派でした。私たちは相手がどのような人物であるのか、その人のする祈りという私たちに与えられている数少ない信仰を指し示すものによって、雰囲気を感じ取ることが出来ますが、毎朝ラビ（ユダヤ教の指導者）達は次のような祈りを捧げていました。「御父よ。私が異邦人としても、奴隷としても、女としても生まれなかったことを感謝致します。」これが何年もの間、パウロの祈りの生活の一部であったことは、疑う余地がありません。
パウロがガラテヤ3:28にて、ユダヤ教の人々の頭にしみこんでいたこの伝統的な祈りの３つの構成要素全てにくびきを返していることは、実に興味深いことです。「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」

「イエス様は、全ての人が利用できる神への平等な道を作られた。
神は、私たちを最愛の子供として受け入れられる。
ーこれが福音の素晴らしさ、美しさである。」

イエス様は、実に全てに平等を保たせるお方です。イエス様の恵みは、誰かを他の人の上に置くようなことを嫌うのです。私たちは、皆一つです。なぜなら、神はキリストにおいて一人の罪人を、もう一人の罪人と同様に受け入れるからです。神は私たち個人一人一人に、途方もない価値を置かれています。
この福音は、世界の何処に行っても途方もない衝撃、影響を与えています。女性の権利について考えてみて下さい。ニューギニアにキリスト教が伝わる迄は、女性は神を礼拝する価値のない存在と見られていました。礼拝の場所を触っただけで女性は殺されました。このような女性に対する二流の市民としての蔑みは、恐れと恥辱の空気を作り出し、女性の非常に高い自殺率へとつながりました。女性には殆ど生きる目的がなく、虐げのみが重くのしかかっていました。恵みの福音が、この文化に届いた時の衝撃を想像してみて下さい。突然、男性も女性もキリストにあっては男女間に何の優劣も差別もないことを発見したのです。

イエス様は人口統計学上の分類に関係なく、全ての人が手にすることの出来る平等な神への道を築かれました。神は、私たちを義とされている他人、また遠い知人として受け入れるのではありません。最愛の子供として受け入れて下さるのです。ヨハネは、私たちにこう教えています。「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」(ヨハネ1:12)これが、福音の美しさです。

私たちがどのような人間であっても、過去どんなに間違ったことをしてきても、もし私たちが信仰をキリストに置くなら、私たちは全ての罪から赦されるのです。そして、この殆ど理解することの出来ない祝福に加え、神は私たちをご自身の子どもとして受け入れて下さるというのです。パウロが、次の箇所で言わんとしていることはこれです。「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。」 (ガラテヤ3:26)この箇所での「子ども」とは、文字通り息子としての地位を与えたことを意味します。

神にとって重要な人達などいません。神の恵みの対象となるのは、強い人や美しい人、頭の良い人のみではないのです。神は私たちのような平凡な人を御そばに呼び寄せ、優しく愛情をこめて私たちをその力強い腕で包むのです。これが、恵みの福音です。

恵みによって選ばれた

パウロは、自分の人生全体を神の恵み深い選びの結果として見ました。パウロは、それをこう言い表しています。「けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が、異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき・・」(ガラテヤ1:15,16)これこそ、 神が私達一人一人の人生にしたいと願っておられることです。神が、今あなたの内になさりたいことなのです。神は、あなたを通して世に御子を明らかにしたいと願っておられるのです。

実際あなたが母親の胎に宿った瞬間から、神はあなたを神の御子が明らかにされるための完璧な道具とするよう御わざを始められているのです。パウロが、次のように書いている理由は、ここにあります。「生まれたときから私を選び分け(詳訳すると、神は私を母の胎から分離し、恵みによって私を召されたという意味)」 (ガラテヤ1:15)パウロが宣教を始めるずっと前から、神がパウロを宣教のために整えておられたとは、実に驚くべきことです。

神は、異邦人達に恵みの福音を伝える特別な人が、いずれ必要になることをご存じでした。この役目をする男は、排他的になりがちだったユダヤ人として頭に深くしみ込んだ伝統から絶たれる必要がありました。ユダヤ人達は決して異邦人と交わろうとせず、異邦人と共に食事をしたり、異邦人の家に入ったりすることさえ拒むからです。事実、パリサイ人達は通りを歩く時、自分の衣をきつく縛り上げました。衣が異邦人に触れるのではないかという恐れの為です。万一ユダヤ人でない人にどこかで触れようものなら、パリサイ人は家に帰り、入浴し、衣を洗濯し、その日は決して宮に入ろうとしませんでした。自分を汚れた者とみなしたからです。しかし、神が福音を伝えるのに必要とされていた人は、異邦人の中に入って行って異邦人と共に住み、彼らと一つにならなくてはなりませんでした。 神が、この特別な任務を果たす人間として、先祖から伝えられた伝統に最も熱心であったユダヤ人を選ばれているのは実に興味深いことです。

パウロが人生を振り返った時、神の御手がその最も初期の頃から彼の人生の上にあり、またどのように彼を導いておられたのか、パウロは見ることが出来ました。ギリシャ文化が世界に浸透していたので、神が選ばれる人はギリシャの習慣やその哲学に精通している必要がありました。そして、この人はローマ帝国を幅広く旅して回り、あらゆる危険に直面する運命にありましたから、ローマの市民権を所持している必要がありました。

従って神は、サウロがローマ市民として生まれるよう計画されました。サウロの市民権がどのよう

に獲得されたのかは不明ですが、市民権は確かにパウロにとって大きな利点として働きました。非常に難しい、命の危険さえ感じられるような状況からパウロを救いました。（使徒22,25章参照）
タルソも強いギリシャの精神や文化を持っていました。パウロの場合ギリシャの精神や文化に少しばかり触れたというような程度ではなく、まさに彼がその一部だったのです。このようなパウロの要素は、パウロが異邦人を有効な方法で取扱い、ギリシャの考え方のニュアンスを知ることを可能にしました。パウロは、その経歴のお陰で、イエス・キリストの真実をギリシャ人達に伝えることが出来ました。
神の必要としておられた人は、また同時に、全くのユダヤ人である必要がありました。パウロが１２才になった時、その両親はガマリエルという当時最も偉大なユダヤ人の学者の下で学ばせるべく、パウロをエルサレムに送りました。そこでパウロはヘブルの文化や伝統、タルムード（ユダヤの律法とその解説）ヘブライ語聖書（旧約聖書）をマスターすることに夢中になりました。パウロは律法に極めて熱心になり、律法を可能な限り守ることによって義人になろうとしました。パウロは同期生の間でも特に優れていました。ピリピ人への手紙に、パウロはこう記しています。「もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。」（ピリピ3:4）漁師や取税人といった経歴を持ったペテロや他の弟子達は、パウロ程完全に律法を理解する様には整えられていませんでした。
ついに、神がダマスカスへの途上にその恵みをパウロに啓示する日がやってきた時、この使徒は瞬時に旧約聖書の御言葉を、最近のイエス・キリストの登場と照らし合わせることが出来ました。パウロは、メシヤを全く新しい見地から見始めました。パウロは、恵みの福音を伝えるにはまさにもってこいの人物でした。律法を守ることによって義人になることを探求し続けてきた人とは、まさにパウロ自身だったからです。この人こそ「律法による義についてならば非難されるところのない者です。」（ピリピ3:6）と言う事の出来る人でした。パウロは、律法によって義人となろうとすることの無益さを知っていました。ですから、イエス・キリストの栄光ある知識に出会った時、パウロは喜んで、イエス・キリストに対する信仰によって与えられる新しい義を抱きしめたのです。

何も変わっていない

パウロの話は、確かに劇的です。しかし、この種の神の御手による備えは、パウロや他の新約聖書の聖徒達特有のものであって、自分達には関係のないことだなどとは考えないで下さい。例えば、私も自分の人生を慎重に思い返してみると、確かに神が私にさせようとお決めになった奉仕の為に、私を母の胎から分離なされたのを見ることが出来ます。
過去を振り返ってみると、当時はさして重要にも思えなかったが、実はとても重要な出来事を経ていることを見ることが出来ます。今になって、私はそのような数々の出来事が私の運命を形作り、決定するのに役立った私の人生の岐路であったことに気づくのです。振り返ってみると、その時は、神の御手が近くにあることに全く気づいていませんでしたが、確かに神の御手が一つ一つの状況の内に働いていたことを見ることが出来るのです。神は、私を見捨てられたと私は思っていました。しかし今になってみると、その私の人生の困難な状況にて、神が私にお定めになった仕事のために、神がどの様に私の内に働かれておられたのかが分かります。その後の歩みを決定するようないくつかの決断に、神の御手があり、私を導いておられたことに気づくことは実に胸の弾むような事です。
私たちは「救い主イエスと」《聖歌５９０、英題は「All the way He leads me.」（主は全ての道のりを導きたもうという意味）》という聖歌を歌いますが、あとから考えてみると、私は自分の人生の初めから、神の御手が私の上にあったことを証言することが出来ます。私を守るため、神が超自然的にご介入下さったことも、時にはありました。神は私に特別な仕事をさせようと考えておられ、その働き

の為に私を整えておられたのです。
私が生まれる数週間前、私のいとこが脊椎の髄膜炎で亡くなり、私の姉も同様にこの恐ろしい病気に感染しました。ある日、姉はひきつけを起こし、それがあまりにひどいものだったので、私の家族は姉が死んだと思いました。母は自宅であるアパートから通りに走り出て、近所の牧師館に行き、姉のぐったりと死んだような体をカーペットの上に横たえました。牧師と母は、神が姉を生き返らせて下さるように祈り始めました。姉は瞳孔が開き、あごは固くなり、確かな脈拍もない状態でした。
しばらくして、父がビリヤード場から帰宅した時、看護婦が父を待っていてこう言いました。「奥さんを探しに行かれた方がいいですよ。娘さんが死にかかっているんです。いえ、もう死んでしまったかもしれません。」父は通りをすごい勢いで走り、牧師を殴り倒した後で姉を病院へ連れて行く為に、牧師館へ行きました。父は、医者が必要な時に癒しを求めて祈るなど全くばかばかしいことと考えたのです。しかし、中に入り姉の容態を見た父は、既に手遅れであったことに気づきました。父は、神の前にすっかり打ちひしがれて力なくしゃがみ込みました。
牧師は、母に言いました。「さあ、あなたの小さなお嬢さんから目を離し、イエス様にだけ目をお留めなさい。主におすがりしましょう。」私を宿していた母は、顔を主に向けて上げ、言いました。「主よ、もし娘を私に返して下さるのでしたら、私の人生をあなたにお捧げ致します。あなたのお望みになるだけ、どこまでもあなたにお仕え致します。」私の姉は、その時即座に癒されました。姉は泣き始め、ちょこんと座ってきょろきょろと周りを見回し、家に帰りたがりました。父と母は、完全に癒された姉を家に連れて帰りました。
数週間して私が生まれ、医者が「男の赤ちゃんですよ。」と言うと、父はあまりの喜びに雲の上を歩くような気分で、病院の廊下を「主をほめたたえます。赤ちゃんは男の子です！」と叫んで回りました。その頃、母はこう祈っていました。「主よ。娘を私に返して下さってありがとうございます。あなたに仕えますという私の誓いは、この息子を通して果たさせて頂きます。」
母は、私がまだ物心つかない内から、私の心に神の言葉を植え付けました。私が庭でブランコをしていると、母はやって来て聖書の御言葉を暗唱させるのでした。私が４才になると、母は聖書を使って字の読み方を教えてくれました。私は、よく自分で発音することも出来ないような言葉のスペル（綴り）を書いたものです。私がまだ全くアルファベットを知らなかった時、必死にその文字を説明しようとしてVを「テントが逆さまになった字」と言ったのを、母は後に笑いながら話してくれました。母は忍耐と愛をもって私を育て、また主を恐れることを教えてくれました。
７才になる頃には、私は聖書の書物のすべてを言い、書くことも出来るようになっていました。ベットでおとぎ話を話してもらったことは一度もなく、聖書の話を聞くのみでした。“金髪ちゃんと３びきの熊”のような一般の子供が親しむ物語ではなく、ダビデやモーセの話を聞いて私は大きくなりました。母は私に、主が共におられるのなら、何事もまた何者をも恐れる必要はないことを教えてくれました。神が共にいて下さるなら、どんな巨人もあなたに立ちはだかることは出来ないと。私には、自分が神を知らず、また神を愛していなかった時を思い出すことが出来ません。私には、改心して救われた証しというものがないのです。皆の前で信仰告白をして洗礼を受けた経験はありますが、私は母の胎にいる時から、神に対して、また御言葉に対して選び分けられていたようです。
私は成長して、一生の職業を神経外科医とすることに決めました。そして、その職に就く為のコースを取り学び始めました。私が大志を語ると、母はいつもただにっこり笑って勇気づけてくれました。私が生まれた時に、私の人生について母が立てた誓約について母は話してくれたことがありませんでした。
私が十代の時、神はサマーキャンプで私の人生を変えられ、私はイエス・キリストのご支配に従う誓約を立てました。人には肉体的な必要よりずっと大きな必要があることを、神は私に強く印象づけられました。肉体的な必要を満たすことは、人を一時的に助けることにはなるが、霊的な必要を満たすことは、人を永遠に助けることになると。神は、私を人の霊に神の癒しを運ぶ者として召され

たのです。
私は、息子が医者にはならないと聞いて、母は非常に落胆するのではないかと思いました。家族に私の人生の方向が変わったことを知らせたら、皆がっくりと肩を落し、悲しそうな顔をするに違いないと考えていました。しかし、私が母に、自分は神が自分を牧会に召しておられ、また神学校に行くように導いておられるように感じるんだと打ち明けた時、母はただにっこりと笑って「チャック、素晴らしいじゃないの。」と言ってくれました。母が泣きもせず、動揺もしなかったことに大変驚いたのを覚えています。
私は神学校に進み、訓練を受け、ケイと結婚し、妻と共に牧会を始めました。母は亡くなる少し前に、私の姉が一度は死んだ身であること、自分が息子である私を通して実行すると誓った神に対する約束のことを話してくれました。母は私が今まで出会った中でも、最も敬虔な麗しい人で、実に霊的な素晴らしい模範でした。今、人生を振り返ってみて、神が私に意図されていた牧会の為に、私を母の胎にいる時から選び分けておられたことを見ることが出来ます。
あなたに対しても、主が同様にご計画をもって導かれておられることを、あなたはご存じですか。信仰によって、あなたが自分の永遠の運命をイエス・キリストの愛の御手に委ねるなら、あなたは神があなたの人生の様々な出来事や状況を、あなたの周囲の人々に御子の御姿を啓示するような美しいモザイクへと形作っておられることに確信を持てるようになるでしょう。神の御手は、あなたの上にあります。あなたが生まれた時からそうであるように。

恵みによって召される

神の御手が、*恵み*によって私たちの上にあること、それを覚えていることは私たちにとって大切です。私たちは、皆恵みによって召されました。パウロがこう言っている通りです。「生まれたときから私を選び分け、*恵みをもって召してくださった*方が　ー　よしとされたとき　ー」（ガラテヤ1:15）私は、神に仕える者として召されるには値しない人間です。救われるに値しない人間です。天国に存在するに値しない人間です。地獄の最も熱い所に置かれて当然の人間です。
しかし、神は私にも、また私たちにもそのようなものはお与えになりませんでした。神は恵み深くも私たちの人生を計画し、一人一人に特別な仕事を与えて下さいました。その人に対する神の計画を、ほんの一時間でやり遂げることの出来る人もいれば、神のその人に対する究極の意図をなし遂げるのに、ゆっくりとこつこつ続け一生かかる人もいます。

「　神は一人一人に対して各人の成すべき仕事を備えておられ、
私たち全てがその仕事の為に整えられる必要がある。」

モルデカイが、エステルに言ったことを覚えていますか。「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」（エステル記4:14）エステルという存在に対する神の主要な目的は、ほんの数日間で果たされました。神はエステルを育て、ペルシヤの宮殿へ遣わし、アハシュエロス王の妻にしました。エステルのとりなしを通してユダヤ人を救い出す為でした。
神は私たち一人一人に対して、特別な仕事を与えておられ、私たちは皆その仕事の為に整えられる必要があります。私たちは、自分の用いられる日が来るまで人生の大半を、その日の準備をして過ごします。私たちは、自分の人生に与えられた神のご計画を果たし終えて死んで行きます。このようにして、私たちに対する神の目的は、いつの日か達成されることでしょう。
私たちは一生の間、様々な所を通りますが、どこにいようとも神は理由、目的をもって私たちをその場に置かれているのです。神は私たちの人生の上に御手を置いておられ、また私たちの人生の

あらゆる状況の上に御手を置かれておられるのです。私たちが困難な試練を通ることもあるかも知れませんが、苦難も必要なのです。神は私たちに対して持っておられるご計画（神が私たちを用いてなさりたい事）を実現させるに足る性質を、私たちの内に形成なさりたいのです。神は、私たち一人一人の内に働かれておられます。私たちは神の作品、それも傑作なのです。（参照エペソ2:10）神は御国で、私たちの為に、また神の栄光のために、私たち一人一人にお定めになった仕事を私たちが完成することが出来るよう神の恵みによって私たち一人一人の内に働かれておられるのです。

わなに気をつけなさい

サタンは、神の御手が私たちの上にあることを知っており、私たちを落胆させるため、私たちの弱さや無力さを用いようとします。サタンは、しょっちゅう私たちに無理な要求を突きつけては、神がその要求をしておられ、私たちの能力を超えた完璧というレベルでそれに到達するため私たちがあがき懸命に努力するよう、打ち叩いておられるかのように思わせるのです。

サタンがこうしてひっきりなしに私たちを悩ませ苦しませるので、私たちは何度も絶望に陥ります。私たちは非常に落胆し、放り出したいと思うのです。神が私たちに対して設けてもいない水準を満たそうとする時、私たちの心は重くなります。そしてその結果は、時として悲劇的なものになり得ます。

体に障害のある青年が、かつて私の教会に通っていました。礼拝が済むと、この青年はいつも私のところにやって来ては、私に話しかけようとしました。彼にとって人と話すことはとても困難な作業でしたが、いつも私は、彼の自己表現力に感服していました。また彼の知性にも感心していました。彼が私にする質問は、いつも良い洞察力の深いものでした。しかし、彼は大きな悩みを持っており、ある日、彼は教会の前の交通量の激しい道路で、車の前に身を投げようとしました。彼は教会の事務所に連れて来られ、私たちは彼とともに祈り、警察を呼びました。彼自身の安全の為に、医者にきちんと調べてもらう必要があると感じたからです。彼は病院に連れていかれ、検査を受け帰って来ました。

彼が罪の意識から来る呵責に苦しんでいたのは明らかでした。彼はうなるように言いました。「チャック、私はどうしてもタバコが止められないんです。」私は彼にそのことについてそんなに悩まなくてもいいこと、タバコを吸っても彼は二流のクリスチャンにはならないことを教えようとしました。次の日曜日、彼は教会に戻り、神が自分を取り扱って下さったと私に話してくれました。彼は神に対して、本当の意味で献身する段階にたどり着けたと言っていましたが、実はまだ悩みからすっかり解放されていない状態でした。サタンが彼の肉の弱さを責めたて、体の障害のことで彼を苦しめていたのは明白でした。ある日、この落胆と呵責という重荷が、この青年の命を奪い取る結果となってしまいました。彼は近所の高層ホテルから飛び降り自殺してしまったのです。それは、落胆させる手段としてサタン（敵）が、彼の弱さにつけこむことを彼が許してしまったからでした。

もしこの青年が、私たちが神が力を与えて下さる以上の人間にはなり得ないということを学んでいたら、こんな事にはならなかったのです。神の御霊が私たちの内に働いて下さらなければ、私たちの内誰一人として、価値あることを成し遂げることは出来ないのです。ですから私たちは悩んだり、自分を非難したり、自分の失敗に対して、いつまでも自分を責めたりすべきではありません。私たちは、ただ自分の弱さを認識し、謙虚にこう言うべきです。「主よ。私は自分が弱い人間であることを知っています。私には、あなたの助けが必要です。私はこの事をあなたにお委ねし、私が自分の力では出来ない事を私の代わりにしてくださるようお願い致します。」*そうすれば、主はそのようにして下さいます。*

ここでは全ての人が歓迎される

キリストの体は、美しい存在です。体のどの部分も極めて重要です。もし全ての人が口だったら、なんと無力で不気味な体となることでしょう。神は私をキリストの体の口になさいましたが、体全体が口でないのは確かです。体の多くの部分が口よりもずっと重要な役割を果たします。キリストの体が神の意図された通り、一致団結して神に仕える為に協力し合うこと、また、様々な背景から様々な人生の歩みをして来た多種多様の人達によって、この体が機能しているのは、なんとも美しいものです。

あなたがどのような出身であり、またあなたが今どこにおられ、何をしていようとも、神はあなたの中に御子を啓示したいと願っておられます。是非あなたの人生、あなたの態度、あなたの物事に対する受け答えを通して、イエス・キリストの輝きを放たせて下さい。

私たちは、　教会でよく次のようなコーラスを歌いました。「イエス様の美しさが私の中に見られますように、イエス様の素晴らしい愛と純粋さの全てが、私の内に見られますように。聖霊様、あなたはこうおっしゃって下さいました。イエス様の美しさが、私の内に見られるようになるまで、私の性質はすっかり精練（洗練）されるのだと。」これは、単に美しいコーラスというだけではなく、素晴らしい祈りです。これは、私たち一人一人の心の願いであるべきです。「主よ、あなたの美しさが、　私の中に見られるようにして下さい。」ダビデもこう祈っています。「私は　ー　目ざめるとき、あなたの御姿に満ち足りるでしょう。」（詩篇17:15）

私たち全ての者、可愛らしい人、愛嬌のある人も、飾らない無骨な人も、強い人も弱い人も、頭の切れる人もそうではない人も、全てが御霊によってイエス様に似た者に変えられているのです。私たちは共に、神の恵みの対象であり、私たちは共に、栄光の日、神に似た者として目覚める時、満ち足りるのです。

そうでなければ、他にどのようになると言うのでしょう。

４章　恵みの肖像（ポートレイト）

恵みについて抽象的に語ることと、恵みがどのようなものか描くことは全く別のことです。もし“百聞は一見に如かず”であるとしたら、恵みは一体どんな絵になることでしょう。聖書全体の中でも、恵みがどんなものであるのかを、おそらく最も良く表わしている人物が旧約聖書に登場します。新約聖書を書いた幾人かの人も、この人を引用していますが、その人とはアブラハムです。アブラハムは、神を信じる者の父として万人に受け入れられていますが、彼は恵みとは何であるのか、また恵みはどんな役割を果たすのか、私たちに明確な絵（描写）を提供しています。
ローマ書、ガラテヤ書の両方において使徒パウロは、神がその信仰によって受け入れた人の最善の模範として、アブラハムに話を戻しています。ローマ４：３にてパウロはこう書いています。「聖書は何と言っていますか。『（それで）アブラハムは神を信じた。それが神の義とみなされた。』」またパウロは、ガラテヤ3:6,7において同じ例を用いてこう書いています。「アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。」

話しを再び思い出す

創世記１５章には、アブラハムと妻のサラは子供が持てなかったと書かれています。しかし、神は２人に彼らを通して地の全ての国民は祝福されるという約束をお与えになりました。その約束はとても実現しそうもないものでしたが、アブラハムは神を信頼していました。創世記15:6に「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と書いてあります。
しかし、何年経っても子供は与えられません。アブラハムとサラは、神が本当に約束を実現して下さるのか疑い始めました。そしてある日、サラはこの事を自分の手で解決しようとして、アブラハムに自分の女奴隷ハガルのところにはいり、その子を自分達の子供として育てることを提案しました。（代理母というアイデアが、現在私たちが考えている程、近代的なものではないという事はとても興味深いことです。）ハガルは妊娠し、男の子を生みました。その子はイシュマエルと名づけられました。しかしこの子が１３才になった時、神はアブラハムに対するご自身の約束を再びおっしゃいました。しかし、アブラハムは、神がサラとの間に息子を下さるとの約束をまだ信じ難く思っていました。アブラハムは神に“確かにそうなったら良いけれども、もう既にイシュマエルがいるのだから、単にイシュマエルを祝福して下さることはできないのですか。”と言いました。
聖書が「信じて義と認められるすべての人の父（ローマ4:11)」と言っている人、アブラハムでさえ、神の約束が、サラの胎を通して成就することを信じるのに苦労したのは、実に勇気づけられる事実です！主がサラを通して息子を与えるという約束を繰り返しておっしゃった時、それが余りにも信じ難いものであったので、サラは笑いました。しかし何年か後、この約束が成就するとサラは男の子を生み、“笑い”という意味のイサクという名前をつけました。
イサクが大きくなると、兄であるイシュマエルはこの約束の子であるイサクに注がれる関心に腹を立てるようになりました。イサクの乳離れを祝う会にてイシュマエルは遠く離れて立ち、弟のイサクをあざけり、ばかにしていました。サラはイシュマエルの意地の悪い態度を見て、彼と彼の母親ハガルとを追い出すようアブラハムに頼みます。サラは、イシュマエルがイサクの受け継ぐべき財産の分け前にあずかるというようなことはあるべきではないと主張します。
さすがに、アブラハムもこの出来事には非常に悩みました。しかし、神がイシュマエルの面倒を見ることを保証して下さったので、アブラハムはサラの希望通り奴隷ハガルとその子を追い出しました。彼らが神の約束された祝福にあずかることが出来なかったのは明白です。

絵を描く

パウロは、“神の恵みにより人はその信仰によって義とされる”という真実を支持しようとしてアブラハムを引用しています。アブラハムの話には、パウロの言いたい事を明確に表わしてくれるような比喩が含まれている、と彼は言っています。伝統的にパウロの時代のラビ（ユダヤ教の指導者達）は、聖書のどの御言葉にも主に2つの解釈があると考えていました。まず一つの解釈は peshatと呼ばれ、御言葉の平易で明白な意味ですが、ラビ達はこの他に御言葉にはremezという隠れた意味もあると考えていました。またラビの中には更にもう二つの解釈の仕方、つまり derashという比喩的な意味を含み、全く文字通りに解釈できないものと、sod（秘密）という比喩的な意味に論点を譲った解釈があると信じている人もいました。このような複雑かつ往々にして矛盾しているかのように思える学派には、普通の人達を聖書の御言葉に対して疑い深くさせ、また混乱させてしまうという欠点があります。

私たちが焦点を向けるべき最善の解釈は、聖書の御言葉の平易で明白な意味だと私は信じています。神は、ご自分の言わんとすることを明確に言い表すことの出来る方なのです。あまりに多くの人が御言葉の霊的かつ奇抜な解釈を追い求める余りに、聖書の明確な教えから反れてしまっています。その現実に、正面から向き合ってみましょう。私たちは過剰に霊的化してハバードおばさんのお話のように何の害もないものを取り出し、そのお話からとてつもない説教を考え出すことが出来ます。自分の犬に骨をやる為に、食器棚のところに行ったこの年取ったおばさんの非常に霊的な暗示を考えてみてください。私たちは、食器棚が空っぽなのを見て何故おばさんが悲しさやみじめさ、落胆、人生の虚しさに追い込められたのか想像することが出来ます。私たちの考えの源がすっかり枯れてしまったら、それはなんと悲劇的な日でしょうか。

私たちには、ほんの少し想像力を働かせることによって、小さなもぐらの穴から教義の山を作り上げることが出来ます。経験から言って大ざっぱではありますが、最善なのは聖書自体がその比喩を支持するような基礎を提供していない限り、 比喩的な解釈は避けることです。この場合はパウロが聖霊様に啓示を受けて、アブラハムの人生から比喩的な解釈を引き出していますので、 信頼することの出来る解釈です。

「そこには、アブラハムにふたりの子があって、ひとりは女奴隷から、ひとりは自由の女から生まれた、と書かれています。女奴隷の子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束によって生まれたのです。このことには比喩があります。この女たちは二つの契約です。一つはシナイ山から出ており、奴隷となる子を産みます。その女はハガルです。このハガルはアラビヤにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、彼女はその子どもたちとともに奴隷だからです。しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。すなわち、こう書いてあります。『 喜べ。子を産まない不妊の女よ。声をあげて呼ばわれ。産みの苦しみを知らない女よ。夫に捨てられた女の産む子どもは、夫のある女の産む子どもよりも多い。』 兄弟たちよ。あなたがたはイサクのように約束の子どもです。しかし、かつて肉によって生まれた者が御霊によって生まれた者を迫害したように、今もそのとおりです。しかし、聖書は何と言っていますか。『 奴隷の女とその子どもを追い出せ。奴隷の女の子どもは決して自由の女の子どもとともに相続人になってはならない。』 こういうわけで、兄弟たちよ。私達は奴隷の女の子どもではなく、自由の女の子どもです。」（ガラテヤ4:22-31）

話の意義

パウロはここで私たちに、この一連の出来事は純粋に歴史的な意義があるだけでなく、行いによって神の祝福を相続しようとする人達の苦しい状態を説明しているということを教えています。ハガル

とその息子は、律法を全うすることによって神の御前に義となろうとする人の姿です。アブラハムとサラが神の御約束の成就することに絶望し、自分の努力に頼った時、その結果は心痛と欲求不満をもたらすだけのものでした。イシュマエルは肉の産物でしたから、人間の行いによって祝福を求めるタイプの例に用いられています。一方、約束の子イサクは信仰によって神の祝福を相続する者を代表しています。

イシュマエルがイサクをばかにし、からかったように、今日でも律法の下に生きている人が信仰によって生きることを選んだ人をあざ笑い、ばかにするという傾向が変わっていないのは興味深いことです。ユダヤ主義者の圧力攻撃が、この兄弟間の対立に予示されているとパウロは言っています。またイシュマエルとその母が追放されたのと同様に、律法を守ることによって義とされることを主張するパウロの時代の人達は、追放されることになっていました。紀元前70年にこの比喩は、 エルサレムがティトゥス率いるローマ軍団によって破壊されたことにより成就しました。信仰の人を迫害した人達は、文字どおり追放されたのです。

「神の自由、約束、祝福は、イエス・キリストによって
神の前に正しい者とされることを求める全ての人のものです。」

パウロは、律法主義の人の悲しい結末を、信仰の子ども達の素晴らしい未来と比較しています。パウロは、イザヤ書を引用してこう書いています。「喜べ。子を産まない不妊の女よ。声をあげて呼ばわれ。産みの苦しみを知らない女よ。夫に捨てられた女の産む子どもは、夫のある女の産む子どもよりも多い。」(ガラテヤ4:27)パウロはここで、信仰の結果により神の御国に集まる信者は、自分の行いにより神に近づこうとする人より圧倒的に多くなることを意味しているのです。

ちょうどここで、その比喩に焦点が当たります。「こういうわけで、兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子どもではなく、自由の女の子どもです。」(ガラテヤ4:31)キリストに属する者は神の恵みを相続するのであり、神のアブラハムに対する約束「彼の子孫をとおして地の全ての国民が祝福される」が、このような人達において成就されるのです。

私たちは、アブラハムの子孫であるイエス・キリストを通して祝福されてきました。神の祝福と解放(自由)、御約束とは、イエス・キリストにおける信仰によって神の御前に正しい身分を得ようとする者のものです。約束の子どもとして、また神の無条件の愛を受ける者として、 私たちは今キリストとの歩みにおいて常に変わることのない素晴らしい、安定した歩みを楽しむことが出来るのです。

賛美歌は、次のように実にこのことをうまく表現しています。「イエス様が代価をすべて支払って下さった。私はイエス様に全ての恩を負っている。罪は緋色のしみを私に残したけれど、イエス様はそれを洗って雪のように白くして下さった。」 神の御座の前に出る時、私たちはキリストが私たちの為にしてくださったすべてのことに対する畏敬をもって立つことでしょう。神の約束の力を見る時、私たちの内、誰一人としてこう言う人はいないでしょう。「私がこの栄光に到達することが出来たのは、私の信仰深さと揺らぐことのない努力のお陰だ。」と。そう言う代わりに私たちは頭を垂れ、喜びに溢れて、「イエス様ありがとうございます。あなたが全てを成し遂げて下さいました。あなたが私を救うことの出来ることは、私にも分かっていました。私には自分の良い行いによって自分を救うことなど出来ないことが分かっていました。主よ、ありがとうございます。」と言うことでしょう。

鍵となる質問

アブラハムの信仰は、このようなものでした。しかし、鍵となる重要な質問は、神はいつこの人を義であると宣言されたかということです。この人が割礼を受けてからでしょうか。受ける前でしょうか。ガラテヤの偽教師達は、「人は割礼を受けない限り義人になることは出来ないのだよ。」と言ってい

ました。この人達は、割礼という儀式は救われる為には必要不可欠であると断固主張していました。神がアブラハムをその信仰ゆえに義とされたのは、いつだったのでしょう。それはアブラハムが割礼という儀式を受ける前だったでしょうか。後だったでしょうか。それは割礼を受ける前でした。後ではないのです。アブラハムは、この割礼という儀式について何一つ知らなかった時に義とされました。アブラハムが義とされたという記事は創世記の１５章にありますが、割礼という儀式の紹介はその２章後まで出てきません。アブラハムが神を信じ、神に信頼した瞬間、アブラハムは義とされました。
あなたや私についても全く同様です。私たちがイエス・キリストを信じ、信頼した瞬間に、神は私たちを義としてくださるのです。私たちが何をしたか、あるいはこれから何をするかということに基づいて義として下さるのではなく、イエス・キリストに対する私たちの信仰という単純なものに基づいて義として下さるのです。

キリストが天国の主であり神の御子であり、私の個人的な救い主である故に、私はイエス様を信頼します。私がイエス様を信頼する時、神は私に「お前は義人だ」とおっしゃるのです。ある日、 イエス様はこう尋ねられました。「私たちは神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」イエス様は答えて言われました。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」（ヨハネ6:28,29）もし神のわざを行ないたいと願っておられるようでしたら、イエス・キリストを信じて下さい。それが神のわざです。それが神があなたに要求しておられることです。

本物の信仰とは何か

何もしないでいる一部のクリスチャン達に活を入れ、行動させる為に書簡を書くヤコブが、やはりアブラハムを信仰の絵（姿）として用いているのは興味深いことです。彼の特別な懸念は、行いのない信仰は死んでいる（ヤコブ2:26）ということでした。アブラハムの信仰は、ある特定の行いに彼を駆り立てた、それゆえに神はその信仰をお認めになったとヤコブは言っています。「あなたの見ているとおり、彼の信仰は彼の行いとともに働いたのであり、信仰は行いによって全うされ、そして、『アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。』という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。」（ヤコブ2:22,23）

「我々の行動は、我々の信じているものと調和がとれなくてはならない。
信念とは、単に私たちが口で言うことではなく、
私たちがする行為によってあらわされるものである。」

別の言葉で言えば、本物の信仰とは言葉で言い表すこと以上のものです。本物の信仰は適切な行動（信仰にふさわしい行動）にその人を導くものです。もし私がある事を本当に信じていたら、私の行動もその私の信じているものに見合ったものになることでしょう。私が熱烈に何か信じているものに対する信念を主張したとしても、私の行動がそれに見合ったものでなければ、私の主張した信念は疑われて当然です。
例えば私が、月曜日には株価の大幅な値崩れが起こってお金の価値が下がってしまうことを確信しているとします。銀行はどこも閉鎖し、預金もローンも閉鎖され、自分の預金を下ろすことが出来なくなるだろうと言ったとします。にもかかわらず、私が即座に銀行に行き、私の預金の全てを引き出さなかったら、あなたは私に向かって「チャック、あなたは本気でそう信じてはいませんね。」と言う事が出来ます。私達の行動は私達が信じている事と調和が取れていなくてはなりません。さもなければ私達の信念が疑われて当然です。アブラハムは「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」という神の言葉を本気で信じていたので、自分の息子を山に連れて行き、祭壇の上に置いて刀を振り上げることが出来たのです。アブラハムは「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と

いう神の約束を信じていた（この時点でイサクに子どもはいなかった）ので、その振り上げた刀を振り下ろす用意が出来ていました。必要とあれば、神がその御約束を成就させるため、イサクを死からよみがえらせるであろうこともアブラハムは知っていました。（ヘブル1:19参照）アブラハムはこれほどまでに神の約束を信じていました。

私達はどのくらい神の約束を信じているでしょうか。何年も前、大吹雪の中で自分の家の燃料を切らしてしまった人の話を聞いたことがあります。その人は石油を譲ってくれるよう隣人に頼みに行かなくてはなりませんでした。その人の家と隣の家とを隔てていた川は凍りついていたので、その人は4つんばいになり、肘で氷の硬さを確かめながら氷の上を出来るだけ遠くまで進みました。このように進んでは叩き、また進むという風に1インチずつ進みました。彼の肘はすぐに血で染まりました。ようやく川の遠岸にさしかかろうという時、彼は後方にガラガラという音を聞きました。そして彼はその川の上を数頭建ての馬車が騒々しく駆け抜けて行くのを見たのです。

私達の中には「私は神の約束を信じています。」と言う人がいますが、私達はそう言いつつも、本当に神が約束通り私達を支えて下さるのか、こつこつと氷を叩いているのです。私達は余りにも慎重に少しずつ進んでいきます。「神が私の全ての必要を満たすとおっしゃったのは知っているけれど、果して本当にその通りにして下さるのか確信はないなあ。もうこの請求書の支払い期日も来てしまったし・・・本当に神は私を支えて下さるのか打診しているんです。神が約束通りにして下さることを、私は心から願っているんですけどね。」と私達は言います。このような人達とは対象的に、神の約束が成就されることを信じて思い切った行動をとる人もいます。このような人達はどんなに絶望的な状況に見えても、神は常にその約束を成就してくださることを経験から学んだ人達です。このような人達も、以前は氷を念入りに叩いて渡る人であったのかも知れません。しかし回を重ねていくにつれ、神は忠実な方であることを見い出したのです。だんだんに彼らの信仰は強められて信仰に基づいて行動をとるようになったのです。私達は皆、自分の本当に信じているものに従って行動します。私達の信じているものは私達の生活に表わされるのです。

アブラハムの信仰は、彼の行動によって証明されました。イサクを捧げよ、と神に言われた時アブラハムはその場に座って神と議論を始めたでしょうか。アブラハムが次のように言ったと想像してみてください。「神様、イサクを捧げることは出来ません。主よ、一体何をお考えなのですか。イサクは私の息子です。イサクを通して世界の国々は祝福されるとお約束下さったではありませんか。主よ。私にはイサクを捧げることなど出来ませんよ。」と。人が何か口で言うと、それだけでその人はそのことを本当に信じているのだと多くの人は考えます。しかし信仰とは、単に口で言うことではありません。信じているのなら行動が伴います。信仰はあなたがする事によって証明されるのです。

これがパウロと同じ旧約聖書の箇所を引用して、行いのない信仰は死んでいることをヤコブが示そうとしている所以です。何かを信じていると言いながらその信念を実行に移していないのなら、あなたに本当の信仰がないことが証明されます。本物の信仰は口で告白されている信仰と調和のとれた行動によって証明されるのです。アブラハムは神を信じていて、その信仰が彼の信仰と一致している、彼の行動の中に表われていました。それゆえに神はアブラハムの信仰を義とみなされたのです。

アブラハムは彼のしたことの故に義とされたのではありません。彼が信じたことの故に義とされたのです。アブラハムのしたことはアブラハムの信じていたことと調和していました。神はその信仰を受け取られ、その信仰に対して義という立場をお与えになったのです。

絵がつかめましたか？

今まで様々なことをお話ししてきましたが、だからといって、私達の行動が常に完璧でなくてはい

けないという意味では決してありません。イエス・キリストを信じる神の子供として、私達は霊的な戦いに従事しているのです。私達の霊はキリスト・イエスにおいて新しくされていますが、私達は依然としてこの古い堕落した家、つまり体に住んでいるのです。私の堕落した家は、私に強力な要求を突きつけてきます。時に私は、自分の本当にしたいことをしないように自分の肉と戦っている私に気づくことがあります。時々、私の活動や行為が私のイエス・キリストに対する信仰に相反していることがあります。

しかし私にはそのような状況の中に生きていくことは出来ません。私は誰もがするようにつまずき倒れるでしょう。しかし私はそこに横たわってはいません。聖霊様が私をそこにつっ伏したままにはしておかないでしょう。聖霊様は私がもう一度立ち上がるよう駆り立て助けて下さいます。私が何かにつまずいて転んだのを見て、神は消しゴムを取り出していのちの書に書かれている私の名前を消したりなさいません。あなたも自分の子供に歩き方を教えている時、子供が途中でつまずいたからといって「この餓鬼！どこへでも行っちまえ。お前なんて私の子供じゃない。そんな風に転ぶなんて！お前なんか勘当だ。」と怒鳴るでしょうか。いいえ、あなたは転んだ子供を抱き起こしてやり、こう言うでしょう。「大丈夫だよ。もう一回やってごらん。さあパパのところまで来てごらん。さあ、おいで！頑張って！」と。あなたは子供が何度も挑戦するよう励ますことでしょう。

あなたは神の子供です。神はあなたがご自分と共に歩めるよう助けようとしておられるのです。私達がつまずいて転ぶ時、神は私達を外に追い出したりしないということを知ることは大きな慰めになります。神は私達を勘当なさったりしないのです。神は「つまずくなんて、もうお前は私の子供じゃない。」とはおっしゃらないのです。そう言う代わりに、神は転んだ私達を抱き起こし、ほこりを払って「もう大丈夫だよ。もう一回やってごらん。」とおっしゃるのです。

神から出ている者は誰も罪の中に生きることが出来ません。私達が罪の生活を実践することは有り得ないのです。もし罪の生活を続けているのなら、信じていると口で言っていることを本当は信じていないことを自分で証明していることになります。アブラハムは神を信じ、彼の行為がその信仰に伴われていました。

勿論そうは言っても、神に人生を捧げてから一度もアブラハムの信仰は揺るぐことがなかったということではありません。むしろそれには程遠いものでした。聖書は創世記15:6にてアブラハムの信仰が神に義と認められたと宣言していますが、この記事を挟むようにして創世記１２章と２０章にはアブラハムの信仰の大いなる衰退を示す出来事が書かれています。アブラハムは神に頼ることよりも自分で嘘をついて自分の身を守ろうとしました。アブラハムも氷を叩いて進む人になり得ました。しかし、常にそのようなことをする人ではありませんでした。アブラハムも私達同様、時折信仰上の失敗を犯しました。しかし、アブラハムは常にそのような信仰の衰退の中に生きることはありませんでした。彼は聖書が信仰の人と呼ぶ程、信仰によって生きたのです。アブラハムの信仰は彼をその信仰の実践に導きました。

しかし勿論、神はアブラハムの行いによって彼を義人と決めたのではありません。アブラハムはその信仰によって義と決められました。私達とて同様です。私達の信仰は必然的に私達を従順な生活や正しい行動に導きますが、私達に神との正しい関係をもたらすのは、この正しい行動や私達の従順さではないのです。イエス・キリストの義は信仰によって私達に与えられているのです。

私が神を信じており、イエス・キリストを信頼しているという事実のお陰で、私はアブラハムの息子になるのです。私はアブラハムの子孫になったお陰で、神がアブラハムに与えた約束や祝福の契約が同様に私のものともなるのです。

この恵みの福音はアブラハムにおいてずっと昔に伝えられました。アブラハムの人生は、恵みとは何であるのか、また恵みはどんな働きをするのかを示す栄光に富んだ絵なのです。これはルーブル美術館やメトロポリタン美術館に展示されているどんな絵よりもはるかに美しい絵です。神に全信用を置く罪人に対する神の愛の素晴らしい肖像画です。そしてこの絵の何にも優って素晴らしい

ことは、“祝福された者”という印を額につけた私達がその絵の背景にいることです。

5章　一度に一歩

数年前、私の友人は、食料品店に商品を配達するという仕事をしていました。配達中、彼は小さなマーケットを経営している人の奥さんと知り合いになりました。次第に冗談を言い合うような親しい仲になり、やがてしょっちゅう会ってはコーヒーを飲みながらおしゃべりをするようになりました。そしてお互い相手に夢中になってしまい、それぞれ自分の家族を捨てて同棲するようになりました。その頃同様に私の親しい友人でもあった彼の妻が電話をくれ、彼の為に祈ってくれるよう依頼してきました。

やがて、私の友人夫婦が通っていた教会の牧師が彼を訪ねて行きました。牧師は彼に黒い霊柩車の幻を彼に見たから、もしこの愛人のもとを離れて奥さんのもとに帰らなかったらその霊柩車が彼を運び出すだろうと言いました。この高圧的な説得の仕方は、彼を更に怒らせ、不道徳な決心を揺るぎないものにしただけでした。彼の妻はいよいよ困って私が彼に話してくれるよう電話をしてきました。

私は彼を訪ねることに同意し、町でも治安の悪い地域のみすぼらしいガレージ式のアパートに暮らしている友人を見つけました。私は友人の汚い小さな家を見、どんなに彼が信仰から迷い出てしまっているのか目の当たりにして、打ちのめされてしまいました。彼の妻も娘さんも心の温かい素晴らしい人で、彼の家は町でも高級な素敵な場所にありました。彼はパンきれ一枚の為に自分の魂を売ってしまったのでした。彼は玄関に出て私を見ると、恥ずかしそうな気色が彼の顔一杯に表われました。彼は私にとても礼儀正しく中に入って腰掛けるよう勧めてくれました。自分の友の新しい生活を見回した時、私は「ああ神よ、どうして彼はこんなにも少しの物の為にこんなに多くの物を捨てることが出来るのですか！」という思いが私の頭を満たしました。

私の心は砕けてしまいそうでした。私はこの友人を愛していたからです。彼が堕ちていったものの光景を見て私は引き裂かれる思いでした。私は自分の感情を隠すことが出来ず、恥ずかしいことに泣き始めてしまいました。私の心は悲しみにすっかり満たされてしまい、彼の愛人が台所から出て来ても、私にはただ泣くことしか出来ませんでした。私はついにあまりに恥入ってしまい、「本当に申し訳ない。君に会いに来たんだけど、今、君と話すことは出来ないよ。」と言うと立ち上がって友の家を出、自分はなんと馬鹿なことをしたんだろうと感じながら家に帰ってきてしまいました。奥さんと和解するよう説得する為に頼まれて行ったのに、私が出来た事といったら、ただ座って泣くことでした。

翌朝、私は驚くべき電話を受けました。私は暫くショックに立ちすくんでしまったのですが、なんと私が友人宅を去った一時間後、友人は家族の元に帰ったというのです。壊れてしまった関係にこの奇跡的な癒しをもたらす為に神が用いられたのは何でしょうか。はっきりしているのは“私はお前より聖いのだ”という態度ではないということです。神の御霊はこの喜ばしい和解へと導いた、いくじのなさと打ちひしがれてしまう霊を私の内に創造されたのです。私はひどい失敗をしてしまったと思ったのですが、私達が御霊によって歩む事を選び取る時、神は喜んで予想もしないような、素晴らしい方法で力強く働いて下さるということを私は発見したのでした。

御霊によって歩むことは、驚くほど実践的な事です。勿論これは頭に後光を背負い、顔に天使のような笑みを浮かべて人生を漂うということではありません。霊的なことに心を留めつつ、地上のことについて人々と関わっていくことが私達には出来るのです。信者になった人の中には、アメリカ文化にすっかり普及している世的さに対しあまりに強い反応を示し過ぎて、友達や親戚、近所の人とコミュニケーションをとる能力を失ってしまった人もいます。しかし御霊によって歩むことは、決して私達を現実から引き抜いてしまうことではありません。それどころか御霊によって歩むことは、私達が現実の生活にて最大限の効率をもって機能することを可能にします。

（神との）関係が第一

誰かが「重要なことは、重要な事を重要な事として保つことだ」と言いましたが、これは霊的な分野においても全くその通りです。御霊によって歩むことは、確かに驚くほど実践的な条件ですが、私達は常にそれがスタート地点ではないことを心に留めて置くべきです。“関係”の方が“行動”よりも常に大切なのです。

この原理の素晴らしい例が、エペソ書の中に見られます。最初の３章はすべて関係について書かれたもの、それから4章で初めて「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」と言っています。“関係”が何よりも先に来ます。関係はその他ついてくる全てのものへの基礎を提供するからです。

もし私達が、まず最初に適切な関係を築づくことなしに歩もうとするなら、私達は決して成功しないでしょう。歩む為には、まずバランスを得ることが必要なのです。これは物理的分野にても同様です。子供は最初の一歩を踏み出す前に、座っている時いかにバランスを保ったらいいのかということを学びます。次に立つという技をマスターします。そして少しよろめきながら歩くことを学び、マスターしてから歩行能力を発達させるのです。エペソ書にてパウロは、キリストと共に着座するとはどういうことか理解することによって、私達は神の力を経験し始め、その神の力は私達が神のお喜びになるような歩みをすることを可能にすると教えています。ここには大いなる前進があります。まず私達は神とバランスのとれた関係を持たなくてはなりません。それから初めて歩むということを学ぶことが出来るのです。

一度は私達の誰もが、自分の肉に従い、肉や心の願うことに従って生き、神から離れていました。しかし神の恵みは私達の人生を作り変えて下さり、私達は主との喜ばしい関係を楽しむようになりました。私達は、神の御霊に自分の人生の支配を委ねることによって、神との深い交わりを楽しみ続けることが出来るのです。

口で言っていることを歩む

神と交わりを持っていると言い、クリスチャンの決まり文句やキャッチフレーズの全てを周りに吹聴していながら、実際には神と歩んでいない人は大勢います。口で言っていることを実際に歩む（実践する）ということを覚えることは、私達にとって実に重要なことです。私達の生活は神の召しや祝福に見合ったものであり、また神との新しい関係に関して私達が口で証していることと矛盾のないものでなくてはいけません。

「私達の思いは御霊に従って生きるか
自分の肉の欲求に従って歩むかを決断する戦場である。」

問題はこのことにどうやって成功を収めるかということです。私達はどうやったら世の誘惑から身を守ることが出来るのでしょう。パウロはガラテヤ5:16にて、それに対する答えを示しています。「私は言います。*御霊によって歩みなさい*。そうすれば、決して肉の欲を満足させるようなことはありません。（強調付加）」

この箇所にて“歩む”と訳されたギリシャ語は人の人生を支配した特徴、性質を示す為に用いられた言葉でした。もし、ある人が恐ろしく欲張りであったとしたら、その人は欲望によって“歩んだ”人として知られることになります。もしそれが常に人を気遣い、助けの手を延べることを惜しまぬ人だったら、その人は親切によって“歩んだ”人として知られることになります。

御霊によって歩むとは、自分の人生の上に聖霊様が支配権を行使することを私達が許すこと（人

生の支配を委ねること）を意味します。私達は毎日、御霊に従って歩むか肉の欲望によって歩むかの選択を迫られます。私達の思いは、御霊と肉のどちらに支配させるか私達が決断を下す戦場となっているのです。

神が人の思いを、コンピューターにかなり似た構造で作用するように造られたことを思い出すのも役に立ちます。コンピューターはプログラムされたものしか生み出すことが出来ません。同様に私達の心も日々プログラムされています。私達にインプットされる（情報として頭に入れられる）ものが肉からのものであるなら、私達の生活もまた肉的なものになるでしょう。しかし御霊のもので自分の心をプログラムするなら、私達の生活は御霊の優先事項を反映したものになり始めます。

私達の最優先事項が自分の肉を喜ばせる事であるのに、その時、自分が御霊の生活をしていると大胆に告白するという罠に陥るのは、実に容易なことです。確かに、堕落した性質が私達の上に及ぼし得る力は、人生において直面する最も大きな問題の一つです。私達はこの克服出来そうにないように思われる肉の束縛からどのようにしたら解放されるのでしょうか。

これに対する単純ながら深遠な解答は「*肉と戦ってはいけない。御霊を強めなさい。*」ということです。暗闇と戦ってはいけません。あかりをつけなさいということです。

こうする為に私達はまず、自分の性質に霊的な面と肉的な面の両方があることを認識しなくてはいけません。もし御霊によって歩むつもりなら、自分の中の霊的な人を養わなくてはいけません。私達は皆自分の体を養うということの意味を知っています。もし自分の体を養い損なったらその必要を私は強烈に覚えるのです。

断食を三日続けると空腹感が消えてしまうと誰かが私に言いましたが、実際は全く反対でした。断食を三日続けた後、私の思いは想像し得る限りの豪華な食事を思い描くことに忙しく働きました。これは、体が私にその必要が満たされるべきであることを思い起こさせるための働きなのです。ですから私達は体を養います。私達は肉体を強くするために運動をし、ビタミン剤を飲みます。

霊的に強くなる為にも似たような摂生が必要です。私達は常にいのちのパンである御言葉を摂取しなくてはいけません。

御言葉を摂取する

御言葉を頂くことを常に後回しにしているとは、なんと皮肉なことでしょう。「勿論、神の言葉に浸かる時間というものを持つ必要のあることはわかっているんだけれど、ちょっと今はそんなことをしている時間はないんだ。」と私達は言います。そのような時、私達は本質的に霊的断食をしているのです。私達の霊的な面は、時々思い出したように不規則にまたバランスのとれないような方法で養われています。私達が規則的に、また系統立てて御言葉を学ぶということを怠り、「さて、聖書を適当に開いてみて、何か目を引くような御言葉があるか見てみよう。」というような学び方をしている為です。往々にして私達は、一貫して聖書を学ぶという習慣を持たないので、個人の成長もありません。私達は忠実に自分の肉を養いながらも霊的必要を見過ごしているので、結果として私達の霊なる人は弱くなり、肉が私達を支配し始めます。

自分の内の霊的な人に強くなって欲しいと願うなら、私は自分の霊に種を蒔かなくてはなりません。肉に種を蒔きながら、なんとか霊的収穫を得たいと願うことは、ばかげています。御霊によって歩む為には、霊を養い始めなくてはいけません。つまりもっともっと神の言葉に浸かることを重視しなくてはいけないということです。ヨブは「私の定めよりも御口のことばをたくわえた。（私は自分に必要な食べ物よりも神の口からの言葉を大切にした。）」と言っています。（ヨブ記23:12、欽定訳聖書より）神の言葉をその通り必要不可欠なものとして見る事は実に大切なことです。イエス様は御言葉を霊であり、いのちであるとおっしゃいました。ですから御霊によって歩むべきならば、神の言葉に規則的に系統だって浸かる時間を持つことは、御霊に歩みたいと願う人にとって必要不可欠なことです。

神と深い交わりを持つ

祈りを重要視することも、御霊によって歩む喜びを経験する為に必要なことです。神と深い交わりをすることの興奮（喜び）に感動する時、あなたは霊を強められている自分に気づく筈です。私達は自分のすること全てにおいて、また出くわす状況全てにおいて、神の存在により敏感に気づくようになります。

「御霊によって歩むことは、私達が意図的に
常に神を自分の友、道連れとすることを意味する。」

神の存在を意識すると、私達は世界をより完全な、かつ進歩した見方で理解することが出来るようになります。私達クリスチャンにとって最も必要なことの一つは、いつも神のご臨在をもっともっと意識することだと私は信じています。パウロはアテネでエピクロス派とストア派の哲学者達に語った時「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」と宣言しました。（使徒17:28）
神が自分といつも共におられることに気づく時、私達の生活はかなり変えられ得ます。その事実を見失うことは、霊的災害に扉を開くようなものです。神が私達の意識から遠ざけられればられる程、私達はより強い力で自分の堕落した性質を喜ばせ養うものに引き寄せられるのです。私達が霊的につまずき倒れる時、私達は自分の行為を弁解する為に多くの外的な要因を指さすかもしれませんが、私達の問題の根元は神のご臨在を心に留め続けることに失敗したということにあります。御霊によって歩むという戒めは、日々様々な行動をとる際に意図的に神を常にそばにいる旅の道連れとしなさいということです。
神の臨在を常に意識して御霊によって歩む時、クリスチャンとしての基準を守って生きるよう、折りに触れては私達にうるさく説教する人など、もはや必要なくなります。神の愛と神の存在の近さとを心の目前に留めて生きる時、私達の生活はすっかり変えられるでしょう。

いらだちを喜びに変える

私達が人生の支配を聖霊様に委ねる時、あなたの最も嫌いなものに対する考え方さえも劇的に変わります。私達のいる状況は変わらなくても私達の態度がすっかり新しいものに変えられるので、以前はいらだちを覚えたような事にさえ私達は喜びを感じるようになるのです。
嫌でたまらなくてもやらねばならぬ事というものが誰にもあります。私達はやりたくないからと言ってそれをしないと状況が悪くなるだけであることを知りながらも、なんとか避けたいと心の中で葛藤を経験します。
私は生ゴミを捨てに行くのが大嫌いです。しかしゴミを捨てに行かなかったら、その強烈な悪臭が玄関まで臭って来るだろうことを私は知っています。ですから私はじっと我慢しこの役目を果たすのです。こんなことをするよりチョコチップの入ったアイスクリームを食べていたいのですが、この私の義務を怠ったら腐敗しつつある生ゴミの悪臭がチョコチップのにおいに混じって、アイスクリームに対する食欲をすっかり無くさせてしまうでしょう。この家事のように平凡なことの中にさえも、私には選択の余地があります。生ゴミを捨てに行くことがどんなに苦痛かぶつぶつ文句を言いながら済ませることも出来るし、この仕事をする時間を捕らえて神と交わりを持つことも出来るのです。ゴミの集荷場に行くまでの間、私には感謝と愛を捧げる賛美歌を口笛で吹きながら神を礼拝することも出来るのです。神に近づく程、自分がさほどゴミの事を考えておらず、神の恵みについてもっと考えている事に気づくのです。もし心を御霊のものに留めて置くなら、最も気に食わない役目でも心をかき

乱されることなく難無くやってのけることが出来るのです。
もう一つの例として、待つということがあります。急いでいる時に赤信号で止められ、信号が変わる迄の間、ずっと待たなくてはいけないことに気づいた時ほどいらいらするものはありません。
しかし腹を立てながら信号待ちをするよりも、私は聖書を隣の座席に置いておくことを習慣にしました。赤信号に出くわし多少時間の出来たことを知ると、私は聖書の一部を読み始めます。そして後ろの車にクラクションを鳴らされて信号の変わったことに気づきます。御言葉に養われている時間はなんと早く過ぎ去ることでしょう。
神と深い交わりを持つとはどういうことか学んで行くにつれて、御霊によって歩むことが心踊るような経験になってきます。私達は、自分の心の中の神の存在から神の創造物の驚くべき御わざに至るまで、より神のものに調和していきます。

誰が導いているか

歩くことには動きが伴います。私達は歩く時一つの場所から別の場所へと動きます。私達は一つの場所から出発してどこか他の場所に行きます。私達の行く先は私達のとる方向によって決まります。
同様に御霊によって歩むことは、ある霊的位置から別の霊的位置へ私達を動かします。私達が御霊のおっしゃることに耳を傾け、御霊が動くようにと指示する方向に行く時、 私達は次の成熟のレベルへと動きます。しかし、これは私達が困難に陥る部分でもあります。
何かをしたいという思いが来る時、もしくは何かをしようという思いが浮かぶ時、それが神からきたものであるかどうか、どうやったら見分けることが出来るのでしょう。神は私達の心の肉の板に律法を書いたと聖書は教えています。（エレミヤ31:33、第2コリント3:3）神は私の霊に考えを植え、私の霊は私の知性にそれを伝えるのです。これは、ふつう考えや思いもしくは突然の思いつき（インスピレーション）として知覚されています。神は私達の人生に対する御心を伝える一手段としてそれを願いという形で私達に下さることがあります。
しかし残念なことに、私達には私達の堕落した性質から来る願いもあります。私の肉はとても強い思いや願いを私の中に注入する方法を持っています。思いや願いが神から来たものか肉から来たものか見分けることは時として難しいことです。
何年か前、私は前から約束していたメッセージをする為にカリフォルニア州ベンチュラに向かっていてこのジレンマに直面しました。その日は気持ちよく晴れ渡った日で、ちょっと遠回りして美しい大西洋沿いのハイウェイを通って行こうかという思いがふと私の心をよぎりました。サーフィンをしている人達を眺め、涼しい海のそよ風に当たりながら運転して行くことは実に魅力的なことだったので、私はそれが肉からのものではないかと感じましたが、結局その願いに従うことにしました。
様々な状況がうまく作用した為、後になってこの海沿いの道を取ったことは、神の私に対するご計画であったことに私は気づいたのですが、私がマリブ近辺に来た時、私は2人のヒッチハイクの人達が道路脇に立っているのを目にしました。私には車を止めてその人達を乗せてやりたいという強い思いが沸き上がってきました。そして私達3人の北部への旅がかなり進行してきた頃、私はこの2人にキリストの話をすることが出来ました。
その2人はベンチュラに滞在し、次の晩私がメッセージをすることになっていた教会に来ました。その晩この2人は皆の前でキリストに対する信仰告白をし、それ以来その地区の集会にて堅く信仰に立った歩みを守っています。出来事の全容が明らかになって初めて、私はこの一連の出来事を思い起こし「ああ、なんと素晴らしいのだろう。神は私を進むべき方向に導いて下さったのだ。海沿いの道を行きたいという私が心に持った願いは神から来たものだったのだ。」と考えることが出来ました。

しかし、神が私の心に話しかけている時とそうではない時とを区別するのは往々にして難しいことです。私達は神が私達を導かれる時は、神秘的かつドラマチックなやり方でするに違いないと考える傾向にあります。もし神が私に話しかけられるとしたら地は揺れ、光は暗くなり髪の毛は逆立つに違いないなどと私達は考えるのです。しかし実際、神が私にそんな形で話しかけられたことは一度もありません。神は私の霊に語りかけ、私の霊はそのメッセージを私の意識に伝えます。その語りかけ方があまりに自然なので、一体それが本当に神の声なのかすぐに判別するのに苦労する程です。

神の声を他のものと区別する為の一定の基準や簡単な3ポイントチェックのようなものを皆さんに差し上げることが出来ればどんなにいいだろうと思います。もしその様なものが実際存在するとしたら、私自身まだそれを見い出していないことになります。私もあなたと同様、自分に語りかけてくる声が聖霊様の声なのか自分の肉の声なのか識別することに苦労しているのです。神の声を自信をもって識別することの出来るような確実な方法を、あなたが教えることが出来たらと思います。しかし残念なことに、私には出来ません。

しかし神は、私達を混乱の霧の中に放り出したままにはなさいませんでした。神はある特定な状況下において私達を導く為のみならず、私達が神の明らかにされた言葉の真理を理解する為にも聖霊を遣わし私達の心に宿らせたのです。神は、聖書で既に宣言しておられることに反したことに導くようなことはなさいません。

御言葉を理解する

まだ主を受け入れていない人が、聖書を読もうとして非常に落胆するのは非常に興味深いことです。彼らは聖書が何百万人もの人に与えた影響や西洋文明に及ぼした影響力を見て、聖書には一体何が書いてあるのか知りたいと思い読もうとするのです。

このような人達は一様に聖書の言葉の意味が分からず、すっかり行き詰まってしまい憤慨します。これは何も驚くべきことではありません。聖書には、生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れず、それを悟ることができない。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからだ、と伝えられています。（第1コリント2:14参照）一方、御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。私達はキリストを通して神との正しい関係を持つようになったので神の御霊が私達の心に真理を明らかにすることが出来るようになったのです。神の言葉は私達にとって生きた、また理解することの出来るものとなりました。

聖霊のこの絶え間なく続く啓示の働きは実に大切な働きです。聖書のどこか一章を読んでも、そこから何も学ぶことが出来ないということが実に多いのは驚く程です。私はその章の最後に近づくにつれて「さて今私が読んだ箇所は一体どういう意味があるのだろう。さっぱり分からないな。」と心の中でつぶやきます。私はこういう場合そこで止めて祈ります。「主よ。この章には何も私に語りかけて来るものがありません。どうか私の理解を開き、あなたの御霊があなたの言葉から私に語りかけて下さるようにして下さい。」と。そして私がその章をもう一度読むと、私は心に向かって破り出て来る真理に驚かされるのです。

カルバリーチャペルでは、日曜朝の礼拝で詩篇を交読しています。第３部礼拝の頃になると、第１部礼拝では見えなかったものを御言葉の中に見るということがあります。御言葉のどこかの箇所が、私に実に特別な力強い方法で語り始めるのです。全ての真理に導き入れられるというこの経験は、御霊によって歩むことの意味において最も鮮明な部分です。

一心に走りなさい

肉やこの堕落した世の組織、サタン自身の狭間で、私達は霊的成長に関して非常な妨害を受けますが、聖書はこの事に関し「キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走りなさい。」(ピリピ3:14)という勧めをしています。イエス様は言われました。「努力して狭い門からはいりなさい。」(ルカ13:24)努力と訳されたギリシャ語は agonizamai で英語の agonize(苦しむ、もだえるという意味)の語源です。御霊によって歩むことは決してたやすいことでも自然に出来ることでもありません。御霊によって歩むには、偽りのない努力と献身、瞬間瞬間の集中が必要です。

これは私達が日々しなくてはいけない選択であるといっても、決して大袈裟ではありません。私達が御霊によって歩む時、その結果は息をするのも忘れる程素晴らしいものであり得ます。私達は神との交わりにおいてその素晴らしい深さや濃度を楽しむことでしょう。使徒ヨハネも「しかし、もし神が光の中におられるように私たちも光の中を歩んでいるのなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」(第1ヨハネ1:7)と述べています。

神との交わりについて特に素晴らしいのが、交わりを経験すればする程、より強く交わりを願うようになるということです。御父との親密な交わりが与える平安と満ち満ちた思いに個人的に触れれば触れるほど、私達はより強くそれなしに生きることの難しさを感じるようになるのです。私達が神との交わりを欠いている時、私達の内なる空虚感が私達を祈りと御言葉へ引き戻します。

私達が御霊によって歩む時、私達は神との親密な関係からもたらされる途方もない恩恵を楽しみ始めます。私達は心からこみ上げて来る喜びを感じます。私達は次第に悪化する状況に直面している最中にも口笛を吹くことが出来るようになります。それは汚い仕事の真っ最中でも私達が主にあって喜びを感じるからです。そこには御霊によって歩むことから来る平安と深い理解、親切、穏かさがあります。そして肉の執拗な願望に対処していく為の力があります。私達は突如として大きな全体像を見ることが出来るようになり、自分の堕落した性質に現実的かつ合理的な方法で対処する英知を見いだすのです。パウロはそれを集約して「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」(ローマ8:6)と言っています。

神が恵みをもって無償で提供して下さっている栄光に富んだ新しいいのちに私達が心底引きつけられない筈はありません。聖霊によって強められたいのち、喜び、愛、平安が私達から流れ出るようないのちとは私達が熱烈に望んでいるものなのです。

しかしこの祝福を経験するには、私達は御霊によって歩むことを選ばなくてはいけません。私達は神のもとに来て祈りや御言葉に浸かる時間、心の中でイエス様と交わりを持つ時間を持ちたいという願いをより強くして下さるように主に願わなくてはいけません。私達が神の国と神の義をまず第一に求めるようになれるように恵みを求めて私達は祈らなくてはいけません。そうすれば私達は最も悩まされていた罪にさえ圧倒的な勝利を得ることを知るようになり、そうすれば神の御霊は並外れた方法で私達を用いることが出来るようになるのです。

たとえ私達がただ泣きじゃくることしか出来ない時でさえもです。

6章　工場ではなく庭（園）である

あなたは、“製造所”という言葉と“実”という言葉には、大きな違いがあることを考えたことはありますか。“製造所"とは、圧迫や納品期日、常に製造し続ける必要に駆られた工場を連想させます。しかし、“実”とは、のどかで静かな庭、ついその美しい風景の中で何か飲みながらお互い楽しく語り合う時を持ちたくなるような場所を連想させます。神は、製品を求めてご自身の工場にやって来られるのではなく、実を楽しむためにご自身の庭にやって来られるのだということに気づくことは、大切なことです。恵みの福音は私たちに行いというスモッグと逼迫感の立ち込めた工場のような人生を後にして、代わりに神は、私たちの人生の庭の中に見たいと望んでおられる実を結ぶよう招いています。

関係の当然の結果

ガラテヤ3：2,3は、神を喜ばせるような生き方をしたいと望んでいる人達にとって実に重要なメッセージを伝えています。パウロはこう書いています。「ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」

使徒パウロが次の２つの事を比較していることに気づきましたか。

・信仰に関連している「御霊」
・肉に関連している「行い」

私たちが行いの領域に入る時、肉と取引をしています。御霊の領域にいる時、私たちは信仰を扱っているのです。御霊と信仰とは、行いと肉とのように関連しているのです。

誰かこう言うかもしれません。「でもチャック、私たちも主の為に働きをしなくてはいけないのではありませんか。」いいえ。してはいけないのです。私が自分の肉でしたことで神を喜ばせることの出来るものなど一つもありません。一方信仰は、常に実を結びます。

あなたが行いに関わっているとしたら、あなたは肉に頼っていることになります。しかしイエス・キリストと共に信仰によって歩んでいるなら、御霊はあなたの人生に実を結びつつあります。実とは、あなたが義務感から生み出す何かではなく、関係の自然の産物なのです。

桃の木にぶら下がっている美味しそうな実を見てご覧なさい。桃は、熟そうと来る日も来る日も必死に努力し働いてはいません。桃は、ただそこにぶら下がっていればいいのです。熟すことは、　関係の自然の結果（産物）です。留まっている限り、桃は甘い実をならせるのです。

これは、私たちの経験でも同様です。もし私たちが、本当にキリストに留まっているのなら（これが信仰の位置です）、この関係から実がもたらされます。もし私の人生に実が結ばれていないようだったら、私の神との関係は疑問視されなくてはいけません。

パウロが「あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。それとも、あなたがたのうちにはイエス・キリストがおられることを、自分で認めないのですか。－あなたがたがそれに不適格であれば別です。」（第2コリント13:5）と言っている訳は、ここにあります。イエス様は、羊の毛皮を着た狼がいるとおっしゃいました。クリスチャンのような様相をし、クリスチャンのように振舞い、クリスチャンのように話していても「まあ。おばあちゃん、どうしてそんなにお口が大きいの！」と赤ずきんちゃんを驚かせたように、外見には羊であっても実際は狼である人がいるのです。

だとしたら、誰が誰なのか、どうしたら知ることが出来るのでしょう。イエス様は「あなたがたは、実によって彼らを見分けることが出来るのです。」（マタイ7:20）とおっしゃいました。
私たちは、自分がどんな実を結んでいるのか知るために、自分の生活を吟味するように勧められています。もし実が悪いものであったら、関係にどこか間違ったところがある、つまり自分の信仰に間違ったところがあることになります。イエス・キリストを信じる生き生きとした関係は、 必ず実をもたらします。

私たちの大きな間違い

私たちの犯す最も大きな間違いの一つは、自分がどのような存在であるかということよりも、 自分がどのような行いをするかということに関心を払う傾向にあることです。これに対し神は、私たちが何をするかということよりも、私たちがどのような状態であるかということにより関心を持っておられます。神は実を求めておられるのに、私たちは製品を作り出そうとしているのです。
悲しいことに、私たちは何年もの間、次のようなことを聞き続けてきました。「主の為にこういう働きをしなくてはいけないし、神の為にああいう奉仕もしなくてはいけない。」私たちは、いつも無理やり御国の為の奉仕に駆り出され、疲れ果てていました。ですから私たちは、牧師や役員に頼まれては立ち上がって、その神の為の奉仕を始めていました。
その奉仕とは、教会に一度求道してきた人をその自宅に訪ね、教会に導くという奉仕かもしれません。神はその人を、そのような奉仕をする人として召してはおられないのにです。私は見知らぬ人の家を訪ねることに、非常な苦痛を覚える人を幾人か知っています。そのような人は玄関に行ってノックする時、必死な思いでこう祈るのです。「主よ。どうか今夜この人が家を空けているようにして下さい。」人を訪問することは、そのような人にとって自然に出来ることではありません。それは、頼まれて無理やりにやらされることです。肉の行いですから、じきに憤りを感じるようになります。その奉仕が非常な苦痛なので、彼らは消極的な態度を取り始めます。すると教会の役員は、そのような人を呼び出してはこう言います。「先週の火曜日の訪問伝道に君は来なかったね。今度の火曜日には、ちゃんと来てくれよ。」彼らはいやいやながら「はい。」と答え、ますます下方に向かって沈み続けていきます。
あなたはこのようにして、神が造りもしなかった型にはめられてしまいます。あなたは無理やりに不自然な位置に押し込まれ、あなたは自分の神への奉仕のことでいらだちを覚えるようになります。しかし神は、あなたが悩み不平を言いながらするような事を、あなたにして貰いたくないと思っておられます。神はクリスチャンの不平には耐えられないのです。それは神に対する侮辱です。私でさえ、人々が私の為にした奉仕のことで不平を言っているのを聞いたら、たまらない気持ちになります。そのような行為は、私を愚か者であるような気持ちにさせます。一体誰がその奉仕をしてくれと頼んだというのでしょう。
どうしてもしたくないと思うことは、しないことです。後で不平不満を言うのなら出て行って奉仕をすることはありません。文句を言う位なら何もしない方がいいのです。
奉仕は、それを喜んでする人達に任せてください。見知らぬ人と話すことに戦慄、喜びを覚える人もいるのです。そのような人達は、ただ家で退屈していることには耐えられず、まだ会ったことのない人と話してみたいと常に考えているのです。それが、そのような人達の性格なのです。会ったことのない人と話すことは、彼らにとって実に*自然なこと*でありますが、このことが鍵なのです。
奉仕が自然に出来る時、それは“実”という領域にあります。しかし、それが強要されて（圧力の下に）する場合、それは“製造所”という領域にあります。神は私達がするよう召された奉仕の為には、それをする力をも備えて下さいます。神が召しておられる奉仕ならば、私達はそれを自然にすることが出来ます。

他の人に出来ることが自分には出来ないからという理由で、二流クリスチャンであるかのように感じる人が多くいます。「主に感謝します。先週は5人の人に証する機会が与えられ、5人ともイエス様を受け入れました！」などと証しする人と出くわすと、このような伝道の賜物を頂いていない人は、「ああ。私はなんと役に立たない証人なのだろう。私は誰にも証しなかった。私はなんて駄目なのだろう。」と思うのです。このような人は外に立って道行く人々を捕まえては、4つの法則を知っているか尋ねなかったということの為に、罪悪感を感じさせられているのです。

どうして幾人かの人は大きな伝道の働きをすることが出来るのでしょうか。それは伝道という奉仕がその人にとって実に自然に出来ることであるからです。神はその人に伝道という奉仕に必要な才能や力を備えられたからです。しかし、キリストの御体を構成している誰もが“口”ではありません。それに口もその背後に脳があり、必要な場所に自分を運んでくれる足がなくては有効な働きをすることは出来ません。他の人と同様の働きを同様の効率をもって出来ないからといって罪悪感を覚えるべきではありません。キリストの御体は一つのユニットとして機能するのであり、それぞれが体のどの部分に属して奉仕をするかということは神がお定めになったことです。

神は、神が本来あなたに与えられた奉仕をあなたがすることを願っておられます。クリスチャン生活の実は、イエス・キリストに対する信仰によってイエス・キリストに留まっている時、自然に実を結ぶのです。イエス様はおっしゃいました。「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。」（ヨハネ15:8）神はあなたに、神の為に多くの実を結ぶ者となって欲しいのです。その実はあなたがキリストに留まることによってのみ、もたらされます。それこそが唯一の信仰の姿勢です。

肉的な信仰などというものはない

マタイの福音書には、ある日大勢の人がイエス様のところに来てイエス様の為に自分は様々な奉仕をしたではありませんかと言って来るが、主は「わたしはあなたがたを全然知らない。」とお答えになるだろうという話が書かれています。（マタイ7:23）主は肉の行いをお認めにはなりません。

神がアブラハムに「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクを私にささげなさい。」（創世紀22:2）とおっしゃったことを覚えていますか。この主の言葉には、少々妙に聞こえる部分があります。実際、アブラハムにはもう一人の息子、イサクより少なくとも14才は年上のイシュマエルがいたのですから。神はどういう意味で「あなたの子、あなたのひとり子を連れて行きなさい。」とおっしゃったのでしょうか。答えは、イシュマエルは肉の作品であったということです。イシュマエルは約束の子ではありませんでした。信仰の息子ではありませんでした。イシュマエルは肉の産物でした。彼が肉の作品であったので、神はイシュマエルを認めようとなさいませんでした。神は御霊によるご自身の作品であるイサク、信仰の子供のみを認知なさいました。ですから神はアブラハムに「いまあなたの息子、あなたの一人子イサクを連れて行きなさい。」とおっしゃったのです。

神が私達の肉の行いを認めたり、それに対して報酬を与えたりすることは決してありません。一方神は、御霊の実がますます私達の人生の特色となっていくことを妬むほどに願っておられます。

ヨハネ15章には信者がどのように実を結ぶに至るのかについての説明があります。イエス様はおっしゃいました。「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことは出来ません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」（ヨハネ15:4）イエス様は私達が何をするかということにではなく、私達がどういう存在であるかということに強調点を置かれました。私達の生活からどのようなものが生まれ出るかは、私達と主との関係の結果です。私達が主と本当の、正しい関係を持っているにも関わらず、何の実ももたらされないなどということはあり得ません。もし何の実も結

ばれていないようだったら、主との関係を再点検すべきです。「実によって彼らを見分けることができる」（マタイ8:20）のですから。

不法な実の検査官

神は御霊によってあなたの人生に素晴らしい御わざを成して下さいました。あなたがまだ罪人であった時にも、神はあなたを愛して下さっていました。そして信仰によってあなたが神を呼び求めた時、神はあなたがしてきた全ての過ちから救い、義として下さいました。神は全てをご破算にして下さいました。神は過去を、あたかも初めから存在しなかったかのように完全に抹殺して下さいました。これが“義と認める”という意味です。

あなたがイエス・キリストを信仰によって受け入れた瞬間、あなたが十一献金として1ペニー（訳注：アメリカの貨幣の最小単位。日本の1円玉のようなもの。）でも払う前に、またあなたが奉仕の一つもする前に、神はあなたにつけられた黒印（罰点）を取り、きれいに拭き去って下さいました。イエス・キリストを自分の救い主であり主と信じるあなたの単純な信仰の故に、神はあなたの過去全てを赦し、あなたを義として下さいました。あなたの信仰の故に、神はあなたにイエス様の義を与えて下さいました。あなたの神との関係は信じることによって始まったのです。

これは実に基本的なことなのですが、なぜか私達は往々にしてそのことを忘れてしまいます。時々、信者が他の信者を批判したり、あら捜しをしたりします。「ねえ、あの人達が何をしているか知ってる？全くひどいんだ。自分では自分のことをクリスチャンだと言いながら、あいつらこんな事もしているし、あんな事もしているんだ。全く全然基準に従って生きようとしていないんだから！海岸にも行くらしいんだ。何を考えているやら。」とひそひそ聶くのです。

このような信者は自分を裁判官に仕立てているのです。彼らは実の不法な検査官になり、他人のしもべの質を裁いているのです。パウロはこのことに関してこう言っています。「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。」（ローマ14:4）

「人を喜ばせるよりも神を喜ばせる方がはるかにたやすいことだ。
神を喜ばせるにはただ神を信じ、神を信頼すればいい。
それが恵みの福音である。」

もしあなたが私に仕えているのなら、私があなたの奉仕を裁くことでしょう。私はこう言うかもしれません。「お前はなんとどうしようもないしもべなのだ。一体私は何でお前のような奴を今までそばに置いておいたのだろう。」と。あなたが私を不快にさせるようなことをする時、あなたにこう告げるのも私です。「おい、お前の皿の拭き方は全く気に入らないね。まだ皿に水がついているし、まだ濡れているのに食器棚にしまっているじゃないか。棚から出す時、グラスに湿気があるなんて嫌なんだ。そういう所に細菌が繁殖するんだよ。さあ洗い物は完全に乾かすんだ。」　一方、私はこう言うかもしれません。「お前はなんて素晴らしいしもべなのだ。お前は素晴らしい働きをしてくれたよ。お前のようなしもべを持って私は幸せだよ。」いずれの場合でもあなたの奉仕（働き）を裁くのは私であって他の誰でもありません。

つまり　私が指し示そうとしている真理とは、私はあなたの主人ではないのだから、私はあなたの仕え方にどうこう指図する立場にはないということです。あなたはあなたの主人の前に立つべきであって、私にはあなたの奉仕を裁くことは出来ません。私には「お前はなんてどうしようもないしもべなのだ。」と言うことは出来ませんし、神へのあなたの奉仕を裁く権利もありません。神があなたのお仕えしているお方であり、あなたが立つのも倒れるのもあなたの主人次第なのです。パウロはロー

マ書の先の箇所で続けて「主には、彼を立たせることができるからです。」（ローマ14:4）と言っています。
あなたがいかに成功を収めるのか、一部の人に分かって貰えなくても心配することはありません。私は神が人よりもずっと簡単に喜ばせることの出来る存在であることを発見しました。皆を喜ばせようとするのは無駄な努力です。たとえあなたが誰も彼も一人残らず喜ばせる事にどうにか成功したとしても、誰かがあなたは八方美人であるとあなたを責めるでしょう。皆を喜ばせることなど不可能なことなのです。素晴らしいのは、私達が皆を喜ばせる必要がないということです。私達はただ神を喜ばせればいいのです。ただ神を信じ、信頼していればいいのです。私達は自分の行い（肉の働き）や熱っぽい活動で神を喜ばせることはできません。私達が神を信じ、神を信頼する時、 私達は神を喜ばせているのです。それが恵みの福音です。

それは私の喜びです

信仰は主を喜ばせ、信仰は関係を生み出します。関係は実を生み出します。私は一日中ただ座って神聖な義人であるかのように清らかな態度を取り、人々に微笑みかけては親切な言葉をかけ、愛情を見せている訳ではありません。私は活動に縛られているのです。仕事ではなく活動です。「ねえ、知ってるかい。私はまさに私のしたいことをしているんだ。実際、楽しくて仕方がないことをしているんだ。」と言うことが出来るとは、なんと素晴らしいことでしょう。活動とは、仕事でも頼まれてする親切な行為でもなく、単に私が楽しんでいる事です。
何年か前に、私がある群れで奉仕していた時、私はよく会議に行き、友達に会いました。共に食事に出かけると、私が早速神が私の心に解き明かして下さった御言葉について語り始めます。すると、彼らは「おいおいチャック、仕事の話はよせよ。」と言い、話題を変えようとします。私は「仕事の話とはどういう意味だよ。それが僕の人生の全てなんだ。他に話したいことなんてないんだ。聖書の話ほど話し合っていて興奮を覚えるものはないね。」と言うのです。
あなたが自分で喜んですることの出来ることをしている時、それは仕事ではありません。あなたは仕事をしているのでも工場で骨折って働いているのでもありません。あなたの活動は神との関係から生み出された実なのです。
神の愛があなたの心を満たす時、あなたのしたいと考えることは只一つ、神について語ることです。神の言葉や神の素晴らしさ、神の愛についてです。あなたは自分がしたいことをしていることで見返りを期待して動くことはありません。自分にとって全く自然な事に対して報酬を期待したりはしません。（神は、*実際*、あなたの人生からもたらされた実に対して報酬をお与えになるでしょうけど。）あなたはそれをしたいからしているのです。神があなたの心にそれをしたいという思いを入れられたからであり、それをするのがあなたの天性であるからです。あなたはもし自分がそれをしなかったら、自分は死んでしまうかのようにあなたは感じるのです。
パウロも次のように書いています。「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。」（第2コリント5:14）「もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわいに会います。」（第1コリント9:16）
私達の誰もが、主の御言葉をイスラエルの王に宣べ伝えて牢屋に放り込まれたエレミヤのような経験を持っていることと思います。エレミヤは牢屋の暗闇の中に座り、こういう意味の事を言ったのです。「もうこれで辞めます。神様、これが私の辞表です。もう決してあなたの名によって語ってくれなどと私に言わないで下さい。私はもう絶対そんなことはしませんから。もうこれ以上私の心に御言葉を与えるような事はしないで下さい。主よ、私はもう辞めたのですから。分かりましたか。もう終わったのです。私はもう決してあなたの名によって語ることはしません。あなたは私にこのような取扱いをし、牢屋に放り込むことさえお許しになったのです。あなたは私の世話をきちんとしてくれていま

せん。でももういいのです。私は辞めたのですから！」（エレミヤ20:9）
エレミヤは苛立っていました。腹を立てていました。しかし彼はすぐにこう告白しています。「しかし、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れて耐えられません。」彼は話す以外どうすることも出来ませんでした。エレミヤは話さなくてはならなかったのです。エレミヤはそれが仕事であるかのように、自分を無理やり強制する必要はありませんでした。実際、彼は話すまいという方向に自分を強いていました。しかし結局、彼は話しました。何故でしょう。それが自然だったからです。話すことは神と彼の関係からもたらされた実だったからです。

不平は御霊の実ではありません

神は工場を運営しているのではなく、庭を育てておられます。神はあなたの作りだした製品には興味はなく、あなたの実を楽しみたいと望んでおられます。神はあなたが自分の肉に頼ることを喜ばれず、神の御霊に頼るようあなたを招いておられます。パウロが私達に次のことを思い起こさせています。「御霊で始まったあなたがたがいま肉によって完成されるというのですか。」（ガラテヤ3:3）
御霊で始まったものを私達の肉で完成することは出来ないのです。多くの人がまさにこの事をしようとして努力していますが、私達は自分の信仰に肉の行いをつけ加えて、神との関係を向上させることは出来ないのです。
多くの人が主を信じて間もない時期、主を愛し、主に仕えて栄光に満ちた素晴らしい時を過ごします。御霊の喜びはまさに彼らのものなのです。暫くするとクリスチャンの先輩達が現われて彼らに重苦しいつまずきを負わせるのです。「なあ、兄弟、もしおなたが本当のクリスチャンだったら、こういう事をする必要があるんだ。何故そんな事をしているんだい。自分でクリスチャンと名乗るつもりなら、何故こんなことすらもしていないんだ？」と。クリスチャンの先輩達は彼らに重荷となるような様々な奉仕やクリスチャンとしてすべきとされている事を課すので、彼らにとってキリスト教とはつらく嫌な仕事になっていきます。キリスト教が自然なものまた喜びではなくなり、面倒な骨の折れる仕事、労働、作業になり始めます。
私達は一体いつになったら、神が私達に下さった義を向上させることは出来ないという真理を学ぶことが出来るのでしょう。行いが基礎になっている関係は、すぐにつらい嫌な仕事になり、私達は主との関係における喜びを失ってしまいます。突如としてそれは義務、責務となり、わずらわしい務めとなるのです。やがて私達は不平不満を持ち、つぶやき始めます。主の喜びは私達の歩みから遠ざかって行きます。私達が自由を楽しむ事はもはやなく、束縛のくびきの下に骨折って労働するのです。私達はこう考えるのです。今夜お祈りしなくではいけない。でないと明日はひどい目に会うぞ。でももう疲れきっているし、ベットから出たくないなあ。お祈りをしなくてはいけないんだろうけど。でも寒いしなあ・・・。
このような場合、神はきっとこうおっしゃるに違いません。「いいから黙って寝なさい。そんな気分で祈りを捧げて私の邪魔をしないでおくれ。私の心を乱さないでおくれ。一体誰がそんなことをしてくれと頼んだと言うんだい。」
このようなレッスンをマスターしている人がいるとしたら、それは福音の伝道者もしくは牧師位なものだろうとあなたは思うかもしれません。しかし、牧師の中にも肉の行いによって御霊の事の必要を満たしているかのように私達を信じさせようとする人がいます。そのような人達は、自分達のような素晴らしい牧会活動をするのには、どんなに自分が清められ捧げられなければいけないか、また自分達のような力強い牧会をするのにどんなに大きな犠牲を払わなくてはいけないか説明します。そのような人達は自分の神に対する決心の堅さや自分自身の捧げ方、自分の行なった断食のことを話し、まるで自分達の行い故に「では彼らに私の力を託そうか」と神の心を動かす程の霊的なある

レベルまで自分が到達出来たかのように話すのです。
「神は誰にでもこの力を託すということはなさいませんが、私達はこの力を獲得する事が出来ました。」と彼らは言います。実際、彼らは往々にして次のようなことを言います。「私は他の部屋にいき、ドアを締めて言ったのです。神様、私はその力を頂けるまでここから出ませんからね、と。そして私はその部屋に留まり、その力を頂くまで断食して、祈りました。」と。彼らは自分の義が神の好意を獲得したかのように話します。しかし実際はそうではありません。それは単なる行いに過ぎません。それに神は決して肉の行いに対して名誉を与えたり認めることはありません。
パウロは言いました。「あなたがたがあれほどのことを経験したのは、むだだったのでしょうか。万が一にもそんなことはないでしょうが。とすれば、あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で奇跡を行なわれた方は、あなたがたが律法を行なったから、そうなさったのですか。それともあなたがたが信仰を持って聞いたからですか。」（ガラテヤ3:4,5）本物の牧師はすべての栄光を神に帰します。イエス様は言われました。「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」（マタイ5:16）

私達は皆招かれている

神の御わざは私達の義の故になされるのではありません。神の御わざは信仰による恵みによってなされるのです。つまり、私達誰でも神のわざをなす事が出来るのです。特別に油注がれた器である必要はありません。

「あなたの人生を、あなたがキリストに留まることによって
生み出している実を、神がやってきては楽しむことの出来る庭にして下さい。」

エリヤは、私たちと同じような人だったとヤコブは言っています。（ヤコブ5:17）エリヤは落胆したり、動揺したり、腹を立てたり、ばかばかしいと投げ出したりしました。にもかかわらず彼は祈り続けていましたが、３年間雨は降りませんでした。エリヤは超神聖な人でもなかったし、神秘的な人でもありませんでした。エリヤは私たちと全く同じような人でした。私たちの持っているような感情を持ち、私たちと全く同じように落胆する人でした。しかし神は彼の信仰の故に彼の願いを聞き入れました。
あなたも同様の可能性を持っているのです。必要なのは主を信じ、主を信頼することです。
あなたは御霊の内に始まったのですから、御霊の内に続けなくてはいけません。信仰によって始まったのですから、信仰において続けて下さい。どうか行いに堕落しないで下さい。あなたのクリスチャンとしての経験を退屈なものにしないで下さい。工場の労働者にならず、どうかあなたの人生を神がやってきてはあなたが信仰によってキリストに留まることによって生み出している実を楽しむことの出来る庭にして下さい。

7章　祝福を信じる

間違いというものは、決してなくなろうとしません。2000年前にガラテヤの教会をつまずかせた誤りについて考えてみて下さい。どうした訳か、この傾向は未だに衰えを見せていません。パウロがそのことについて語っている（否定している）にも拘わらず、多くの教師が律法を行うことによって聖霊を頂くことが出来るという考えを推進しています。神の祝福と力とを十分に経験する上で最も大きな妨げ、つまずきの石となっていることの一つが、（事もあろうに）教会で奨励されている教義であるとは、なんという悲劇でしょう。私たちは、自分の人生に聖霊様をお迎えしたいと願うのなら、自分の行動を清めなくてはいけないと教会で教えられるのです。祝福されるにふさわしい者となる為に、ありとあらゆる不純物を取り除かなくてはいけないと。

確かにそのような教えは誠実であるように聞こえますが、全く間違った教えなのです。私たちは自分の行いや努力によって義とされなくてはならず、そうして初めて神は私たちに触れるために御手を差し伸べて下さるかも知れないというのがそのような教えの真髄なのです。私が神から最善のものを受け取ることをあまりにも長い間妨げてきたものが、まさにこれと同様の間違った教えだったのです。

忠実であっても苛立っていた

ペンテコステ派の教会で成長した子供として、私は“聖霊のバプテスマ”というものを受けたいと熱烈に願っていました。私は多くの“（聖霊を）待つ集会”に足を運び、父に付いていって土曜日の男性の祈祷会にもしょっちゅう参加しました。そこで私は主を待ち望み、私の人生を神がその力で満たして下さるよう祈りました。

私は心から主を愛していましたし、得ることが出来るのなら神の力の全てを頂きたいと願っていました。しかし、何かがその妨げとなっていました。何年もの間、私はある隠れた罪が妨げとなっていると考えていました。そして実際そうだったのです。しかしそれは私が想像していたような罪とは全く別の種類のものでした。私の持っていた問題とは、情欲や貧欲や悪い習慣ではなかったのです。私の問題は自己義認でした。

そんなにも若い人が霊的な高ぶりと苦闘していたとは奇妙に聞こえるかもしれませんが、実際私は苦しみもがいていたのです。私は聖書を暗記していました。私は聖書の各書巻を暗唱して言い、字で書くことさえ出来ました。御言葉ならどの章からも引用することが出来ました。私は決してショーを見に行ったりしませんでしたし、タバコを吸ったこともありませんでした。踊りに行ったこともありませんでした。私の通っていた教会では全てこの様なことを罪深いこととして教えていた為、私は宗教上このようなものを避けていました。

私は牧師の子供がタバコの吸い殻を拾っては、タバコを吸っているのを何度も見ましたが、私はそのようなことはしませんでした。私の教会での友達は毎週土曜日マチネー（演劇や音楽会などの興行）を見に行きましたが、私は決して行きませんでした。私は聖なる人になるつもりでした。

それでは何がそんなに間違っていたのでしょうか。神は、私の友達がタバコの吸い殻を吸っている時さえも私の友達を祝しました。「主よ。あなたは私が彼らより義人であることをご存じでしょう。私は彼らのやっているような邪悪な行為は何一つしたことがないのですよ。何故、私でなくて彼らを祝福なさるのですか？」と私は考え、私は大いに苦しみました。

さらに悪いことに、私は、祈り求めて、聖霊の満たしを頂いた人達の次のような証しを聞きました。彼らが神を待ち望んでいた時、主は彼らのポケットに入っていたタバコを示され、彼らがタバコを祭壇の上に置いた瞬間、神ははっきりと彼らを聖霊で満たして下さったというのです。

「私は神の祝福を獲得しようと努力していた。しかし私が十分に良い人間になることはなかった。単純な信仰によって神に求めるということを私はしなかった。」

多分私の問題とは、祭壇に置くべきタバコのパックを持っていなかったということでしょう。ですから私はそうする代わりに、その週に犯した私の罪を心の中でリストにし、こう考えたのです。「主よ。私は今週弟に腹を立てました。主よ。どうぞ腹を立てたことを赦して下さい。」そして私は神が私を御霊で満たして下さるのを待ちました。しかし、神は私を満たして下さいませんでした。

私は牧師がこう言うのを何度聞いたか知れません。「神は聖くない器を満たすことはなさいません。神は聖霊つまり、聖い御霊なのですから。従ってあなたは聖い器でなくてはいけません。」ですから私は聖い存在でいられるよう最善を尽くしました。私は考え得る限り全てのことを（念の為、自分がしたことのない幾つかの事も）神に告白しました。私は何度も何度も自分の良心を念入りに調べました。私は神に何度も自分の人生を捧げる祈りをし、また捧げ直しました。私は気がつく限り、どんな小さな事でも疑わしいものは全て諦め、自分が愛着を持っていた大切な事やものをすべて犠牲にしました。全てが、神の御霊に自分の人生を満たして頂くにふさわしい聖なる義人になる為の、無駄な行為だったのです。私はキリストとの歩みにおいて苛立ち、窒息寸前の状態でした。

ついに私は必死な思いでこう言いました。「わかりました、主よ。私は宣教師として中国に参ります。ですからどうか私をあなたの聖霊で満たして下さい。」しかし、主は私を満たしては下さいませんでした。私は主に中国に行くともアフリカに行くとも南アメリカに行くともインドに行くとも約束しました。しかし、やはり主は私を聖霊で満たしては下さいませんでした。

その頃私はずっと行い、つまり自分で設けた基準を守ることを通して義人になることによって聖霊の満たしを受けようと努力していました。私は律法を行なうことによって聖霊を頂こうとしていました。私は知っている限りの方法を試してみました。神によって満たされ、神の賜物を受け取ることに飢え、心から願い求めながら。何故神は私を祝福して下さらないのか思案しつつ幾夜、神の御前にもがき苦しんだことか分かりません。

私は神が私を祝福して下さるには、私が義のプラトー（高原。グラフなどで上昇も低下もしない比較的変動の少ない時期。）に到達しなくてはいけないと信じていました。私がその高い高原に到達出来た瞬間に、聖霊が私を満たすのだと私は信じていました。しかし私は現実に目の前で起こっていることに戸惑いを感じていました。何故、通りを歩いていた人が酒やニコチンの臭いをぷんぷんさせながらイエス・キリストを自分の救い主として受け入れ、その場で聖霊のバプテスマを頂くという事が起こるのか。あり得ないことなのに、現実に彼らはバプテスマを頂いている。

それは全く不公平なことでした。私はずっと主と共に歩んで来たし、主に仕えて来たのに彼らが祝福されて私は祝福されない。私には神の矛盾を理解することが出来ませんでした。自分の受けてきた教えと実際に目にしている現実とを一致させることなど私には出来ませんでした。

神の恵みを理解さえしていたら！私は聖霊の力を受けるのにこんなに長い間待つことはなかったのです。私は神の言葉を読み理解し始めるにつれて、ついにパウロがこう問いかけている箇所に来ました。「あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」（ガラテヤ3:2）突如として、私はこれが修辞疑問であることに気づきました。答えは明らかに、彼らが聖霊を受けたのは信仰をもって聞いたからであるというものでした。

私は面食らってしまいました。私はそれまで一度もそのようなことを教えられたことがありませんでした。私はこれまで自分の力で聖霊の満たしを受けるにふさわしい者となる為に、義人になろう聖くなろうと努力してきました。しかし勿論、そのようにはなれませんでした。単純な信仰を持って願うという事はしたことがありませんでした。私は神が私の助けを必要としていると確信していました。

その日私は自分で義人になろうとする努力を全て脇に置き、単純にこう言いました。「主よ、私は今あなたから聖霊の賜物を受け取ります。」そして私はその瞬間、聖霊の賜物を頂きました。私は思

いました。なんて愚かなのだろう！この事を知ってさえいたら何年も前にこれを頂くことが出来たのに。この事を教わってさえいたら！
規則やルールに従順であることに強調点を置いた教えの為に、私はこの不毛の何年かになんと大きな損をしてきたことでしょう。私たちはイエス・キリストを自分の主、救い主として信頼し、信じることによって聖霊の満たしや聖霊による力づけを受け、自分の内に宿って頂くことができるのです。外面的な規則（律法）を守ることによってではありません。良いものを神から受けるには程遠い罪人である私たちに対する神の恵みや愛、慈愛、善良さを強調しつつ、この単純であるが力強いメッセージを私が何度も繰り返す理由はここにあります。

受け取る者に与えられる神の祝福

一旦神の言葉を理解し始めると、私は自分を神の祝福を受けるにふさわしい聖さの高原に到達させるのは、私の義でも能力でもないことに気づきました。祝福して下さると私が単純に神を信頼する時、神は私を祝福して下さいます。長く生きれば生きる程、私はいかに自分が神に触れられるにはふさわしくないそれに値しない人間であるか気づかされます。神は私が善良で聖く、完全であるから私を祝福したいと願われるのではなく、それが神のご性質であるからそう願われるのです。神はご自分の子供達を祝福することを楽しまれるのです。
あなたの人生から神の祝福を遠ざけてしまっているものがたった一つあることをあなたは知っていますか。あなたが今週ディボーションで忠実でなかった為に、神の祝福が妨げられたのではありません。あなたの人生のいくつかの分野であなたが失敗したから、神の祝福が隠されてしまったのではありません。誰でも失敗するのです。人生における神の祝福を妨げてしまっている唯一のものは、神が祝福を与えて下さると信頼することを、あなた自身が拒否していることです。神の祝福は、神が祝福を与えて下さることを信頼し、信じる人誰にでも与えられます。あなた自身の義や善良さという基礎をもって神のもとに来てはいけません。そんな事をするとあなたは、神があなたの人生になさりたいと願っておられる良い御わざを主から奪う愚かな者になってしまいます。神に受け入れられる唯一の態度は「私は失格者です。私は祝福を受けるに値しない者です。しかし主よ、どうか私を祝福して下さい。」と言う態度です。
神の祝福は神に対する単純な信仰によって自分のものとなるということに気づいて以来、私は神の祝福を経験するようになりました。私は神から余りに多くの祝福を与えられ受けたので、今まで受けた祝福を全て記録することは不可能です。私は決して閉じられることのないドアにたどりついたのです。私が自分の義によってそのドアに行っていた時には、ドアは殆どの時閉まっていました。しかし今、私は神の愛という基礎の上に神のもとに来ているので、ドアが閉じられることは決してありません。
神は常に私たちを愛しておられます。私たちに対する神の愛は日々変わることがありません。今日は昨日よりも愛して下さらないということはありません。神の愛はそのようなものではありません。神の私たちに対する愛は不変で変わることがありません。神の愛は私たちに基づいているのではなく、神と神の愛のご性質に基づいています。
神は愛です。神はあなたを愛しておられ、あなたが鼻持ちならない罪人である時でさえ、あなたを愛し続けておられます。あなたが神に向かって拳をふるい挙げ「お前なんか大嫌いだ」と言って反抗していた時でさえも、神はあなたを愛しておられました。そして神は今もあなたを愛しておられます。神は私たちを愛しておられるので、私たちを祝福なさりたいのです。神の祝福は、私たちの善良さや義、忠実さに応じて与えられるのではありません。神の祝福は、私たちを祝福したいという神の願い、只一つにかかっています。私たちのすべきことは単に、神が祝福を与えて下さることを信じ受け取ることです。パウロの修辞疑問を思い出して下さい。「あなたがたが御霊を受けたのは、律

法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」あなたが余りにも義人になったので「さあて、彼はもう十分に義人になったから彼を聖霊で満たしてやらなくてはいけないな。」と神が決心なさったのでしょうか。いいえ、決してそうではありません。私たちはイエス様を信じた初めの日から、それ以上、正しくなっていないのです。
神は、あなたがただ信じ、ご自分に信頼して、あなたが想像できないほどの祝福と力を分け与えようと熱心に待っておられるのです。私たちは往々にして愚かなガラテヤ人のようです。愛の関係で神と関わることが出来るのに、私たちは何故律法的な関係に戻ろうとする、愚かな真似をするのでしょうか。自分で当然貰うべきと考える物を要求するような愚かなことはしないで下さい。なぜなら、あなたが当然貰うべきものとは死以外の何ものでもないからです。私たち皆がそうです。私たちは皆罪を犯すからです。神はあなたを今祝福したいと願っておられます。あなたを愛しているからです。神はあなたの人生を祝福したいと願っておられます。そしてその祝福への道はあなたの信仰なのです。
私に対しておっしゃっているのではありませんよね

これを読んでいる人の中には、自分は神に対してあまりにも多くの失敗をしたとか、自分は罪に対して弱すぎるからとか、自分は余りにも大きな間違いを犯してしまったからという理由で神が私を祝福して下さることなどあり得ない、と信じている人がいるかもしれません。多分あなたの心は常に卑屈で、あなたの目はさまよっていることでしょう。子供に怒鳴り散らしている私を神が祝福出来る訳はない。こんなに堕落している私を神が祝福して下さる訳はない。こんな私を、あんな私を神が祝福して下さる訳はないと、あなたはいぶかります。あなたの問題点は、自分自身の行いという基礎に基づいて神の祝福を求めているということです。あなたはそのような考え方に潜む罠にすっかりはまってしまっているのでこう言うのです。「私がとても善良で完全になったら、神は私を祝福することが出来るようになる。」と。しかし、それはとんでもない思い違いです。
「主よ。私は本当にこの力を持ちたいと願っています。ですから今あなたに私を満たして下さるよう頼みます。」と私たちが言う瞬間に、神は私たちの人生を聖霊で満たしたいと神が願っておられることを私たちは頭に入れなくてはいけません。
しかし、ここであなたに警告しておかなくてはいけないことがあります。まさにこの時点において霊的な戦いが勃発するのは否むことの出来ない事実です。あなたが神による満たしを求めて祈る時、すぐにサタンはあらゆる種類の偽りや非難をあなたに投げかけてきます。サタンはあなたを混乱させ悩ませます。サタンはあなたに自責の念を覚えさせ、自分はとても祝福には値しない人間だと思わせるのです。「神に祝福を求めるなんて、一体お前は何やってるんだよ。恥を知りなさい。お前にはそんな権利はないんだ。自分の状態を見てみろよ。自分のしたことを見てみろよ。神がお前を聖霊で満たすことなど出来る筈がないだろう。」とサタンはあざ笑います。
皮肉にも、往々にしてサタンはこの偽りを運ぶ人としてクリスチャンを利用します。自分の力で義人になろうとしている人というのは必然的にあなたを責めます。「あなたも分かっていると思うけど、神の祝福が頂けないのはあなたのせいなのだよ。もしあなたにもう少し信仰があったら頂けるかもしれないけど。あなたがもう少し霊的な人だったらねえ。もしあなたがもう少し私のようだったらねえ。」とその人は言います。そのような霊的な砲撃を少し受けただけでも、大抵の人が全てを撤回してしまいます。「主よ。今私が願ったことは忘れて下さい。」と私たちは言います。

「神はあなたに神の愛、神の介入、神の力、神の油注ぎを
経験して欲しいと願っておられます。」

なんという悲劇でしょうか。私は自分が神の祝福を受けるにふさわしい人間ではないことを知って

います。しかし神は私が祝福されるにふさわしい人間であるから私を祝福して下さるのではないのです。神は私に対するご自身の愛とキリスト・イエスにある私への恵みから私を祝福して下さるのです。それが祝福の基礎であって、私が善良であるからでも私が義人であるからでも私が完璧であるからでもありません。ただこのことを柔らかい頭に入れることが出来れば、私たちは想像もしなかったような祝福を受け始めます。

祝福はすぐそこにあるのです。神はあなたを祝福なさりたいのです。あなたは自分がとても祝福されるには値しない人間であることを承知しつつも、神が自分を祝福して下さることをただ信じていさえすればいいのです。祝福はあなたの行いによってもたらされるのではなく、あなたの信念の故に、つまり神が自分を祝福して下さることをあなたが信頼し信じている為にもたらされるのです。

この真理を掴むことが出来ない為に、多くの人が自分のクリスチャンとしての歩みに深刻な問題を抱えています。「どうして神があんな人を祝福なさるのか、私には理解できないね。あの人はタバコを吸うんだ。私はそんなことをしないのに祝福されない。あの人の受けている様々な祝福を見てごらんよ。どうして神はタバコを吸う人を祝福なさるのか、私には分からないね。」と誰かが言います。しかし勿論、神の祝福はタバコを吸うという習慣によってもたらされるのではありません。神の祝福は私たちが“自分は神の子供なのだから神は自分を祝福して下さるのだ”と信じることによってのみ、もたらされるのです。

神は今日ご自身の民を祝福したいと*願っておられます*。「主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。」（第2歴代誌16:9）ただあなたの心を主に向け、神の御言葉を信じ、神が約束なさった通りのことをして下さることを信じるのです。「主よ。今私を祝福して下さい。」と言うのです。そうすればあなたは祝福を受けます。

そのような自由奔放に与えられる恵みは、私たちにとって殆ど侮辱に近いものであることは私も分かっています。「主よ、私に本当の祝福を与えて下さい。私は本当に今夜あなたから素晴らしい祝福を頂きたいのです。」と私が言った瞬間、私の心は私に抗議します。「主に祝福して下さるよう願うなんてどういう意味だよ。今日の午後あんな（罪深い）事を考えていてよくもそんなことが頼めるなあ！」

祝福されるにはそれにふさわしい者でなくてはいけないという考えを否定するのは、実に難しいことです。私たちは失格者であり、とてもそれに値しないにも拘わらず神が自分を祝福して下さることを単純に信じ期待することは、私たちにとって実に難しいことです。 しかし、私たちがついにその障壁を乗り越えて、神は私たちを祝福すると約束して下さったのだから、神は自分を祝福して下さると期待するところまで行き着けば、神の祝福が私たちの人生に触れることを押しとどめることの出来るものは何もありません。

アブラハムの祝福

そして神の下さる祝福とは、なんと素晴らしいものなのでしょう。私たちはアブラハムの子供なので、神がアブラハムに与えたのと同じ祝福を頂くことが出来るのです。

- 「アブラハムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」（創世記15:1）
- 「わたしはあなたの子孫をおびただしくふやす。（直訳：私はあなたを実に豊かに実を結ぶ者にする。）」（創世記17:6）
- 「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となる

ためである。」（創世記17:7）

これら全ての祝福が、それ以上のものがあなたのものなのです。神はあなたをキリストにある者としてご覧になるので、イエスの義があなたに与えられているのです。その事が、その事のみが完全に神があなたを祝福なさる土台であるのです。

あなたが祝福に値しない人であるにも拘わらず、神はあなたに神の愛、神の介入（神の御手が触れること）、神の力、神の油注ぎを経験して欲しいと願っておられることを恵みの福音は主張しています。神はそれぞれの人に信仰の量りをお与えになりました。それを働かせ、それを用いて下さい。そうすればそれは発達します。ただ単純に主を信じ、主に信頼し、あなたを祝福して下さることを神に期待して下さい。

私たちの人生に対して神の御霊の祝福が与えられたのは、私たちがいつの日か神の祝福を受けるにふさわしい程十分に聖くなるからではないことを決して忘れないで下さい。私たちがついに光を見、単純に神がその御言葉を守られることを信じた時に、神の祝福はもたらされたのです。私たちの義の行いは何の関係もありません。

神の道は今まで少しも変わっていません。アブラハムに与えられた祝福は、私たちの主イエス様に対する単純な信仰を通してのみ、私たちに与えられます。私たちの果たすべき役割は主が祝福を与えて下さることを単純に信じることです。

この事を考えてみて下さい。　ー　それ自体大変な祝福です。

８章　苦闘が始まる

さほど前の事でもありませんが、私はある若い青年から自分の肉とな苦闘を続けているという手紙を貰いました。その青年の手紙には、相次ぐ敗北の記録が延々と書かれ、パウロの「私はほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ7:24）という叫びを聞くようでした。

私にとって、この青年の経験を理解することは容易なことでした。私たち誰もが、主との歩みにおいて同様の苦しい時期を通って来たのです。私たちは神を喜ばせるような生活を切望しているのですが、肉の力は余りにも強力で私たちは失敗してしまうのです。

教会の歴史を見ても、 クリスチャン達は肉を制御する方法を捜し続けて来ました。肉に対して勝利を勝ち取る唯一の方法は、自分を修道院の小室に閉じこめてしまうことだと多くの人が信じていた時期もありました。彼らは、自分をつまずかせる可能性のあるあらゆる物や人との接触を拒み避けました。しかし、彼らの遺した日記を一見したところでは、全てのものから離れて孤独になることも助けにはならなかったようです。

ヒエロニムスという初代教会において有名な神学者だった人は、何年もの間檻(おり)より少し大きいだけの部屋に暮らしました。彼にとって、外の世界との唯一の接触は、食事を受け取る為の小さな窓だけでした。彼は、自分の身を完全に神の御言葉の学びや祈り、瞑想に投じる為にあらゆる物やあらゆる人との接触から遠ざかりました。しかし彼の日記には、いかにライフスタイルを厳格にしても、いかに自分を取り囲んでいる壁が厚くても、彼がその小さな部屋の暗闇に座っている間、恐ろしい思いや想像、空想が彼の心に流れ込むことからせき止めることは出来なかったと記されています。

「答えが私達自身の源をはるか超えたところにあることに気づく迄は
私達に助けはやって来ない。神に助けを求めて叫ぶことが
肉の力からの救いを得る秘訣である。」

肉は恐しく強力な敵です。主との歩み全体において常に肉に対して負け戦（いくさ）を続けるクリスチャンもいます。自分は神の安息に一度も入ることなく荒野で死んで行ったイスラエル人のようだと、彼らは感じるのです。

何故このような信者は、神の勝利を楽しむことが出来ないのでしょうか。答えは単純です。この様な人達は自分自身の力で敬虔な生活を送ろうとして全努力、全エネルギーを注いでいるからです。自分の人生や肉との苦闘を神に明け渡し、頼ることをせずに、彼らは義人になる為の新しい方法や新しいテクニック、新しいプログラムを捜し続けているのです。そして当然の事ながら、そのどれも成功しません。

成功を収める為の別のプログラムややり方を必死に捜し求めることによって、自分を“この死の体”から救い出そうとする努力を続ける限り、私達は失敗します。答えが自分自身の力や努力をはるかに超えたところにあることに私達が気づく迄は、私達に助けは来ません。驚くべきことに、弱さのうちに神に叫び、声を上げる事こそが、肉からの救いを受ける秘訣なのです。

別の自己啓発プログラムではなく・・

私達の内の大抵の人にとって、自分が全く無力な存在であることを認めるのは難しいことです。私達は自分の事を、強くて有能な人間、自分の事は自分で処理する能力のある人間であると思いたいのです。心を決めれば簡単に数キロは痩せられるし、悪い習慣も止めることが出来ると信じて、私達は何度、自己啓発プログラムを始めた事でしょう。しかし、自分の力で自分の生活を変えるこ

とが出来ると考えている限り、決して変えることは出来ないというのが悲しい事実です。
クリスチャン生活で、その成長の最も大きな妨げとなっているものの一つが、自分の努力で神を喜ばせるような生活を送ることが出来るという私達の概念です。そのような事が出来ると考えているなら、私達はその事に対して賞賛を得ようとするようになるでしょう。「そら見てごらん。悪い習慣を止めることなんて大して難しい事でもないんだよ。自分でも出来るって分かっていたんだ！」と。その時点で私達は、神に栄光を帰しているのではなく、自分自身をスターとして自分のサクセス・ストーリーを書いているのです。私達は他の人に自分のやり方が彼らにも、どのような効果を上げる事が出来るのか語り始め、神はますます遠くへと除外されて行きます。予想通り、私達の持っていた自分に対する自信は悲劇の第一波目が押し寄せるだけで、もしくは落胆を経験するだけで、私達の持っていた方法全てをすっかり駄目にしてしまいます。
神は私達が全てを試し終えるまで、このような自助的自己啓発プログラムに従ってやってみる事をお許しになるでしょう。神は私達がついに正直にこう告白するまで、自分の努力によって力尽きるまで、試させて下さいます。「私には出来ない。私には自分自身の力で義人になることなど出来ない。ああ、なんと私は惨めな人間だ！」と。そのように正直になることは、私達にとって実に難しいことです。なぜなら自分の無能さや失格、弱さを認めることを強要されるからです。そのように正直になると、自分のプライドが否定されるので、私達はこの様な結論に至る事を嫌います。しかし、私達が希望を見い出すのは、自分が全く無力であることを私達が認めた時に限ります。私達がついに神の恵みに助けを求める時、主は私達に介入され、私達が自分の力ではすることの出来なかった御わざをお始めになるのです。私達がわらにもすがる気持ちで無力さと絶望との叫びへと駆り立てられる時、私達はキリストにあっての真の勝利を楽しみ始めるのです。

苦闘が始まる

ある意味では、格闘があるという事実は実に喜ぶべき理由となります。もし神によって霊的に生きる者とされていなかったら、何の戦いも起きないのです。もし私の霊が未だに不法と罪の中に死んだ状態であったなら、私は邪悪な欲望と苦闘してはいないのです。私は肉の中にどっぷりと浸かって肉に従って生きていたことでしょう。この戦いの中に自分を見い出すという事は、私達が本当に神の子供であるという事の力強い証拠なのです。
そして私達は今、戦いの中にいます。私達一人一人の内に激戦が繰り広げられていることを誰が否定できるでしょう。ガラテヤ5:17にて使徒パウロは、私達にこう言っています。「なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」
ペテロはこの苦闘について全てを知っていました。ある時、この無骨な漁師はイエス様に、他の使徒全員が逃げたとしても自分は逃げないと豪語しました。しかし、夜が明ける前にペテロは3度も主を知らないと言いました。イエス様は常に正しかったのです。霊は燃えていても肉は弱いのです。
ペテロと同様、私達は自分自身を抑制する前に一時的な感情で反応してしまいます。私達は正しい事をしたいと願っているのに、間違ったことをしてしまいます。パウロはこう書いています。「そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」（ローマ7:21-23）
自分を支配しようとする戦いが、常に聖霊と肉の間で、自分の内で行なわれている事に私達が気づくまで、神の勝利を知ることは出来ません。私達の肉はまだ死んではいないのです。私達がキリストの為に生きることを決心し、御霊のもたらす恩恵を味わい楽しみ始めていても、また、私達の肉

的な性質がもはや私達の命に与えるとげを抜かれているとしても、戦いはまだ終わってはいません。私達が信仰を持つ前、肉は私達の生活（いのち）を独占し、支配することを楽しんでいました。そして私達の体が贖われるその日まで、肉は私達をその支配下に引き戻す為の苦闘をひるむ事なく続けるのです。

私達の欲求は不正なものなのか

この時点で、私達の体の欲求や食欲をそれ自体邪悪であるかのように考えるという考え違いをしないようはっきりさせておく事は大切です。私達の体の欲求は神によって造られ、生命を維持していく上で必要不可欠なものです。

肉の欲の中で最も要求の強いのが空気を求める欲求です。息を吸うことに何らまずい点はないのですが、この自然の機能を歪めて、この機能をコカインを吸うために用いることも可能です。そうすることによって私達は自然の、神の下さった機能を不自然なものに悪用しているのです。聖書はそれを“罪”と呼んでいます。

空気を求める欲求の次に強いのは、私達の体にある水分、湿気への欲求があります。渇きに関してなんら不正な点はありませんが、私達がバーに座って物をまっすぐに見ることが出来なくなるまで浴びるほど酒を飲むことによって、その渇きを静めようとする時、それは不正なものとなります。再び、私達は自然の欲求を神の意図されたもの以外の目的の為に用いているのです。

次に強い欲求が、飢えです。食べることに関してなんら不敬虔な点はありませんが、私達が食べ物に気を取られ過ぎる時、これが私達の健康を害し始めます。通常、暴飲暴食によって私達は食べ物への自然の欲求を乱用してしまうのですが、自分の体型を細く保つことに捕らわれ過ぎることも、同様に有害なことです。その様な人達はカロリー計算をし、過度の運動を自分に強いる為に生きており、これも罪です。

性的な欲求も神によって創造されました。これは生殖の為のみならず、夫と妻の相互愛の美しい表現として創造されたのです。しかし、私達がこの欲求をとってそれを快楽のおもちゃとする時、愛はもはやその中心にはなく、不正なものとなってしまうのです。

これら全ての美しい、神の与えて下さった欲求を、自己本意な益に変える為にねじ曲げて用いる事が、御霊に戦いを挑むものとなっているのを見ることが出来ますか。これらの体の欲求の全ては神によって私達に与えられましたが、神はその内の何かが私達を支配することなどご計画なさいませんでした。これらの欲求は生活上必要な部分ではありますが、神はそれらが私達の生活を独占するようには造られなかったのです。

もし、私達の考えること全てが何を食べようか何を飲もうか何を着ようかということだったら、私達は異邦人となんら変わりがないとイエス様はおっしゃいました。（マタイ6:31，32）神を知らない人は体の欲求を追い求める以外、何をすることも出来ませんが、私達信者は命は食べ物より大切なもの、体は着るものより大切なものであることを知っているのです。私達の肉はその本来の位置にあっては正しく適切なものですが、私達を支配するように神によって意図されたものでは決してありません。しかしながら、私達の堕落した状態では、体の欲求はまさに私達の生活（人生）を支配しようとするので、ここに苦闘が始まるのです。

主人（主）の戦闘計画

この時点で、次のような疑問が浮かび上がって来ます。では私達は、肉に対してどの様に対処したらよいのでしょうか。神は肉に対して備えを作られました。神はそれを“十字架”と呼んでいます。

肉を贖おうとしたり、霊的な飾りで飾りたてようとしたり、改善しようとしたりはしないで下さい。肉は

贖うことの出来ないものなのです。肉は十字架につけられなくてはいけません。パウロはこう言いました。「私たちの古い人（肉に独占されていた古い性質）がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだ（支配したがる私達の堕落した性質）が滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」（ローマ6:6）

「肉と御霊との対立を解決する為の聖書の備え（対策）は
個人の訓練や自制ではない。それは聖霊の力である。」

私達の仕事は、これを真理として認めることです。もし肉の願いが、いまだに私達の生活の要素であるのではないのなら、古い性質をキリストと共に死んだものとみなす必要はありません。いまだに自分を支配している肉の分野に私達が遭遇した時はいつでも、肉と聖霊の戦いが私達の中に残っていることを私達は正直に認める必要があります。私達はそれからその特に弱い部分を十字架に持って行き、それを十字架につけられたものとしてみなす必要があります。

しかし、それはほんの第一歩に過ぎません。肉と聖霊との戦いを解決する為に聖書の提示している対策とは、個人的な鍛錬でも自制でもありません。肉を征することの出来る力は御霊に支配された生活からのみやってくるのです。戦いは、私達がこの体の中に生きている限りつきまとうのですが、神は私達に霊的な勝利を得るための源を備えて下さっています。私達に代わって神の御霊が私達の人生（生活）に強く働くのを私達が許す時、私達は自分の堕落した性質に大勝利を収めることが出来るのです。

自分の力で聖くなろうと努力することは、どんな努力であっても、それは明確に肉的な努力です。パウロが絶望の中に「私はほんとうにみじめな人間です。」と叫んだ時、彼は「どうしたら次回にもっとよい結果を得る為の戦略を見つける事が出来るのでしょう！どうしたらもっと満足の得られるような結果を得られるようもっと頑張ることが出来るのでしょうか！」とは言いませんでした。パウロはそうした空しい結果しか得ることの出来ない道を既に試し終えていたのです。敬虔な生活を送るための力が自分の中には宿っていないことに、パウロは気づいていました。自分には救ってくれる人が必要であることにパウロは気づき、こう叫びました。「だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

イエス様は私達の霊を目覚めさせて下さった時に、新しい一連の願いも下さいました。私達は神との親しい交わりや御言葉のより深い理解や知識、キリスト・イエスにあって生きる者となったクリスチャンとのより親密な霊的交わりを求め始めるのです。私達はもはや肉に従って歩むことを願わなくなります。そのようなものの終わりは挫折や失敗、死であることに気づいたからです。肉のために生きることは常に私達を、自分の持っているもの以上の何か、私達の掴むことの出来ない何か、ついに終わることのない満足感を与えることの出来る何かを得させるように駆り立てるのです。しかし手に入れてみると、約束されていた満足感というものは私達の中から逃げていってしまいます。

しかし御霊に従って歩む時、私達は世が理解することの出来ない平安を見い出します。終わることのない苦闘、痛みを伴う空虚感は消え、私達は素晴らしい目的と意味を見い出します。肉はかつて持っていた魅力をもはや持たず、私達の内なる戦いは勝利を収めます。

霊的なマインドゲーム（心理ゲーム）

私達が認める認めないに拘わらず、また私達の好むと好まざるとに拘わらず、私達の中にはつむじ曲がりの（邪悪な）律法が働いており、善を行いたいと私達が望む時はいつでも、悪が内に存在します。私達の人生に頻繁に起こり、私達をうろたえさせる戦いをパウロは正確に描写しています。「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、

自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。」（ローマ7:15-17）
聖書の中で最も単純かつ直接的な戒めを、私達がどのように取り扱っているか考えてみて下さい。イエス様はヨハネ13:34にて「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」とおっしゃいました。ヨハネはのちにこう教えています。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。」（第1ヨハネ4:20）目に見える兄弟（隣人）を愛していないのに、どうやって目に見えない神を愛することが出来るのか、とヨハネはいぶかっているのです。
さて、私達自身の抱えている問題に入りましょう。聖書は人を忌み嫌うことを明確に禁じているので、私達は事を和らげようとしてこう言います。「あの人を嫌っている訳じゃない、あの人のしている悪事を嫌っているだけなのだ。」しかし正直なところ、その人とその行動とを区別して考えるのは実に難しいことを認めざるを得ません。私もそのように明確に区別して考えることには困難を覚えます。私は自分がその人のするひどい行為を憎むのみならず、その人をも憎んでいることに気づきます。その人の購入したばかりの新車が交通事故で潰れてしまったなど、その人の身の上に不愉快なことが起こったという知らせを聞けば、私は自分が心の中では喜びを抱いていることに気づきます。私は自分がこの様な態度を取るべきでない、私の態度はもっと違ったものでなくてはいけないと聖書が教えていることは知っているのですが、正直なところ、私の態度は聖書の教えているような態度ではありません。
自分は本当に神に従順だし、愛し難い人も愛していると自分を納得させようとして、私達は往々にしてマインドゲームをするに至ります。十分な努力をするなら、私達は本当に自分は人々を愛していて赦していると、自分に思い込ませることが出来ます。しかし私達の内なる状態が事実どんなであるかは、容易に愛する事の出来ない人が次のような行為をした時、明白になります。そのような人が後ろからやってきてあなたの背中をドンとつつき、部屋中に聞こえる様な大きな声でこう言います。「ウーン、兄弟、今朝はどうやらデオドラントをつける時間がなかったようだね！」そう言われた私達はとっさにこのような思いを持ってしまいます。「バカヤロー！皆が振り返って私の方をじろじろ見ているじゃないか。嫌な奴め。お前なんか死んでしまえ！」私達は心からこのような人を愛したいと願っているのですが、私達の肉はそうすることを許そうとしないのです。
パウロと同様、私達も皮肉な原理が自分の中に働いていることを見い出します。善を行ないたいと思う時はいつでも悪が存在するのです。私達は結局、自分自身に苛立ち、自分の失敗にうんざりしてすっかり落胆してしまいます。私達は深い霊的な敗北を感じ、パウロと共にこう叫びます。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

誇る理由はない

罪と死の律法から自分を救うことは出来ないことを私達が認めた時のみ、神の栄光に富んだ力が私達の内に働いて、私達が自分ではする事の出来ないことを成して下さることが可能になります。神の力が私達を内から外へと変える時、私達に出来ることはただ神に感謝を捧げ、神に栄光を帰すことだけです。私達は他の人に「私はかつては罪を犯していたんだが、ある日イエス様がそれを喜ばれないことを悟って、自分の意志の力や自制心をかき集めてもう決してその様なことはしないことに決めたんだ。」と言うことは出来ません。自分がいかに素晴らしい自制の効いた人間であるかについて、私達が誇る余地は全くありません。聖書は次のように宣言しています。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」（ガラテヤ６：１４）

実際よりも霊的であるかのように感じられる人々に会ったことがありますか。誰かが霊的な苦闘について話す時、このような言行不一致な人の正体があらわになります。誰かが肉との戦いをしていることを認めると、このような霊的な人達は途端に自己義認的な、“私はお前よりも聖いのだ”という表情を浮かべます。彼らは言葉に出さずに、肉と戦うことが信者にとって恐ろしく異常なことであるかのような雰囲気をそれとなく相手に感じさせます。「もっと祈れば、もっと御言葉に浸かる時間を持てば・・それから私のようにもっと霊的なことに心を留めていれば、肉との戦いなんて起こらないんだよ。」という素振りを見せます。

そのような超霊的な完全主義的な態度は実によく見られますが、このような態度は聖書が明確に教えていることに裏打ちされたものではありません。私は、私達がこの地球に生きている限り、この肉の体に関して肉との戦いが全くないような時を経験する筈がないと私は信じています。私は長年の経験から、私の肉は何年経っても手に負えない煩わしいものであることには変わりがないことを知っています。

例えば、神が変えたいと願っておられる私の肉のある部分をお示しになられると、私はいつも誠意を尽くしてそれに取り組もうとします。私は私の罪の不敬虔さを見、決して再びそのような事はするまいと誓うのです。そしてその問題を克服する為の様々な方法や訓練を用い始めます。自分の置かれた状況に具体的にどう取り組むべきかについてあらゆる種類のアドバイスを求めるのです。しかし、遅かれ早かれ自分が最善を尽くして立てた全ての計画が崩れていくのを私は目撃します。私はとても苛立ち、こう叫びます。「神よ！私を助けて下さい。」すると驚くことに、神はその通りにして下さいます。神の御霊は不思議な方法で私の人生を変え始めます。

私は感謝に満ち溢れるとき、私達を造り変えていく神の方法がいかに素晴らしく単純で、私自身の心得違いの努力よりはるかに優っていることを目にします。私は「一体いつになったら私は恵みのこの単純な概念を理解することが出来るのだろう。」と首を振ります。私にも何か価値のある事が出来、私も全く捨てたものではないことを神に対して証明したいと心のどこかで考えてしまうのです。自分には何も出来ないことが分かっている癖に、やはり次回もこのように考えてしまいます。

神は決して肉が私達を支配する事を意図なさいませんでした。神は私達が勝利を経験することが出来るようにその源と力とを備えて下さいました。しかし私達が自分で戦いに対する解決を図ろうとする限り、私達の最善の努力でさえ解決の妨げとなります。私達自身の力から沸き上がってくる敬けんになろうとする試みは、どんなものでも肉の行いであり、神の目には私達がするまいと努力しているものと同様に忌々しいものなのです。私達の勝利が唯一神の干渉という私達自身の源以外のところからやって来る時、その最終的な結果は栄光と神に対する賞賛です。

避けるべき罠

主を身近に感じるとき「これは本当に素晴らしい。私はもう決して肉に従って歩まないぞ。肉に従って歩むことなど、実に無意味で空しいことだ。」とつい言いたくなります。しかし残念なことに、明日がやって来ると私達は自分の持った良い意向のことをすっかり忘れてしまうのです。ストレスのたまるような長い一日を終え、へとへとになってベットに向かう時、突如として最善の努力をしたにも拘わらず、さまよい離れてしまい、自分自身の用事をして過ごし、すっかり肉に支配されてしまったことに気づくのです。非常に驚くべきことに、私達の肉は再び手綱を握り、私達は自分がもう二度とするまいと約束したことをしていることに気づくのです。

私達が最大の間違いを犯してしまうのはこのような瞬間です。私達は自分を咎め、非難し始め、次はもっと努力することを誓います。どこが問題なのかわかりますか。私達はその様な約束をすることによって、自分の肉へ信頼を与えているのです。こうする事によって私達は自分の努力で自分は霊的に強くなることが出来ると言っているのです。私達は肉の領域に逆戻りしてしまった訳です。

私達はペテロの様に「私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と言っている訳です。
自分が続けざまに同じ戦いを繰り返している様に感じられる時、私達の多くは次第に強い苛立ちを覚えるようになります。しかし私達は、この事に驚くべきではありません。誰もがまず、自分の限界まで来て自分の力では神を喜ばせる様な生き方は出来ないということに気づく為に、凡庸な段階を通らなくてはいけないからです。私達は絶望の中に神に向かって叫び声を上げ、神はその恵みにあふれた救いを成して下さいます。こんなにしょっちゅうどん底まで行かなくて済むような、なんらかの道があると私は考えたがるのですが、残念なことにそのような道を私はいまだ発見しておりません。

内から外に

神は恵みのうちに、私達が一貫して勝利を楽しむことを可能にして下さいました。しかし、天国のこちら側では戦いは決して終わることがありません。毎日私達それぞれがしなくてはいけない選択があります。肉の願うことの為に生きるか、神の御霊が自分を造り変える力に自分の人生を委ねるかの選択です。
自分の源の限界に来て、神が恵みによって自分の人生を造り変えて下さるのを見ることはなんと栄光に富んだことでしょう。信者として私達の唯一の誇りは私達に代わって完成されたイエス・キリストの御わざです。十字架がなかったら私達は皆、なんの希望もなく永遠に失われていたことでしょう。しかし神の私達に対する大きな愛故に、以前は失われていた私達は救われ、キリストに預かる洗礼を受けました。
もはや私達が生きているのではなく、キリストが私達のうちに生きておられる、という素晴らしい関係を、私達は今持つことができます。いま生きているのは、私達を愛し私達のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。神の恵みのお陰で、私達一人一人は今キリスト・イエスにあって新しく造られた者であるのです。古いものは過ぎ去り、全てが新しくなったのです。
私達が神の子どもになると、私達の霊的な面が生きてきます。私達は突然、肉の本能に従うよりももっと意味のある何かが、人生にあることに気づきます。私達は肉の決して満足しない内なる飢えが神との愛の関係において満たされることを突然理解するようになります。神をより深く知るようになればなる程、私達は神の平安や喜びを経験するようになり、御霊において私達が経験する満足のレベルが無限の、肉の狭い領域をはるかに超えたものであることを発見します。
私達が空しい努力をやめて、御霊に代わって働いていただく事はなんと麗しいことでしょう。神の勝利は外側から内側ではなく、内側から外側にやっているからです。永続する勝利とはこのような種類のものです。

9章　事実、私達は自由である

この世でイエス・キリストを信じる者ほど自由な人はいません。パウロがガラテヤ書5:1で言っている通りです。「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」

*自由*とは、自主的に道徳的判断ができる状態のことを言います。生活において本当の選択をすることが出来るということです。イエス・キリストを信じている人は本当の意味で自由ですが、その言葉を罪人を描写するのに用いるのは間違ったことです。罪人がすることの出来る本当の選択は一つしかないからです。イエス様を信じるか否かの選択です。罪人は自分のしていることを止めることが出来ない程、肉に縛られてしまっています。

今日、多くの人々は何故自分がこんな事をしてしまうのか分からずに邪悪な事をしています。彼らは「こんな事したくはない。自分が忌み嫌っている事なのに、どうして自分はこんな事をしてしまうのか分からない。こんな事をする自分が嫌いだ。でもやはりしてしまうのです。」と言います。彼らはある力に束縛され、虜にさせられているのです。その力とはサタンの力です。

キリストのことろに来る前は、私たちはみな不従順の子らであって、その行動のすべては、肉と心の望むままを満たそうとすることすることでした。（エペソ2:3）選択は、ただ、どちらの束縛を選ぶかということでした。私達は罪から立ち返る能力がなかったので、自主的に道徳的判断ができる存在ではなかったのです。不敬虔さの形を取り変えることは出来ても、正しい生き方をすることは出来ませんでした。そのようなひどい状況において、自由はないのです。

「自由でいる為には私達を束縛の下に再び戻すような
いかなる分野においても自由を行使してはいけない。」

私達がキリスト・イエスにおいて頂いた栄光に富んだ自由とは、なんと大きな違いでしょう。神の愛と赦しを受けるものとして、私達は肉の独占支配からの解放を与えられました。私達はもう自分の肉の願いに対する奴隷として生きなくてもいいのです。私達には神に仕え神を礼拝する為、罪から立ち返る能力が与えられました。私達を束縛していた暗闇の鎖から解き放たれました。イエス・キリストを信じ、信頼しているが故に、神に受け入れられる為に律法の基準に従って生きることからも解放されました。神の子どもとして、私達はかつては全く知らなかった自由と解放を味わっています。

私達はキリストにあって自由な者であり、パウロが次のように言うほど私達の自由は広範囲のものです。「すべてのことは、してもよいのです。（直訳：私にとって全ての事は合法的です。）」（第1コリント10:23）

この世の哲学の中にもこれほど幅の広い倫理を含んでいるものはありません。事実、「すべてのことはしてもよいのです。」と言うことの出来る人こそ、今まで生きた人の中で最も自由な人と言えます。

しかし、パウロは全ての事が私達にとって合法的である、私達が全てのことをしてもよいことを主張する一方、「しかしすべてのことが有益とは限りません。」（第1コリント10:23）とも主張しました。つまり私達が追い求めることの出来る自由の部分はあるし、それが救いを危険にさらす事にはならないけれど、私達の神との歩みにおける私達の成長を妨げるであろうという事です。私達は一途で心からの神への献身の妨げとなるような自由の部分を避けるべきです。自由のままでいたいと望むのであれば、私達は自分を束縛の下へ引き戻すような部分にて自由を行使しないよう気をつけなくてはいけません。

悪用された自由

人々は往々にしてクリスチャンとしての自由を誤解し、キリストにあっての解放とは、自分達が自由にどんな罪でも犯すことが出来るという意味だと考えてしまうのです。彼らは、自分の手にしている自由を自分の肉の為の好機として用いています。これは完全に聖書がクリスチャンの自由について教えていることの曲解です。私達の自由とは、決して自由に罪を犯す自由ではなく、また罪を犯すための免許証でも決してないのです。

イエス・キリストにある者として私達が召された栄光に満ちた自由とは、まず最初に、かつては私達を縛っていた私達の肉とその独占支配からの解放です。パウロはローマ書6章にて、キリストにあってのこの解放（自由）は神に仕え、神を礼拝する自由であると教えています。私達は以前のように罪深い肉欲的な生活を送るために自由に（解放）されているのではありません。

エデンにてアダムには途方もない自由が与えられていました。アダムには善悪を知る木以外だったら園のどの木からでも食べてもよいとされていました。神は最初から、アダムがご自分の命令に従わず、禁じられた木から食べ、結果として罪や不幸、苦しみを世にもたらすだろう事をご存じでした。しかし神は、 物理的にアダムがその実を食べることのないように阻止しようとはなさいませんでした。アダムは自分の持てる自由を誤用し、私達は彼の選択の悲劇的な結果に今日も苦しんでいます。一人の人がその自由を悪用した為に罪がこの世にもたらされました。

同様に、私達もキリストにあっての私達の自由を誤用することを選択する事も出来ます。私達がこの栄光に富んだ自由を自分が再び束縛の下に引き戻されるような仕方で用いることも可能です。私達は皆、人々が次のような事を言うのを聞いた事があるのではないでしょうか。「ああ。私はクリスチャンであり自由の身だ。だから私はこの肉の欲求を満足させることにしよう。私にはそうする自由があるのだから。」私達にはそうしない自由もあることを私達は覚えておかなくてはいけません。私達は決して自分の自由を肉の欲望に身を委ねる機会として用いてはいけません。聖書は「私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続ける」為に「いっさいの重荷とまとわりつく罪とを捨て」なさいと教えています。（ヘブル12：1、2）

仕える自由

私達がキリストにあっての自由をどのように用いるべきではないかという事は明白ですが、本題となる問題は「自由をどのように用いるべきか」ということです。神に誉れを帰し、私達が恵みにおいて成長することを助けるような方法で自由を用いるにはどうしたらいいのでしょう。パウロはガラテヤ5:13にて、この問題に対する答えを与えています。私達は愛を持って互いに仕える為に自由を用いるべきであるとパウロは言いました。聖書は神が謙遜な人（しもべとしての状態）に高い評価を与えている事を常に私達に思い出させます。

聖書は繰り返し繰り返し、天の御国で偉大な者となりたいならば仕えなくてはならないと私達に教えています。イエス様は『大宣教命令』の初めに、弟子達に対して偉大な声明をしておられます。「わたしは天においても地においても、いっさいの権威が与えられています。」（マタイ28:18）その権威がどれほど大きなものか想像がつきますか。星に火をつけ、全ての原子を一つに保っている権威と同じ権威がイエス様のものなのです。ではイエス様はその権威をどのように取り扱ったでしょう。宇宙を揺り動かしましたか。数個の新しい衛星を吹き飛ばしましたか。いいえ。イエス様は上着を脱ぎ、僕としての衣服を身にまとい、弟子の足を洗いました。イエス様は最後の人の足首や足の指を洗い終えた時、弟子達にこう言いました。（実にこれは効果的な教え方でした。）「わたしがあなたに何をしたか、わかりますか。・・・主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。（主であり師であるこのわたしが、あなたがたに仕えたのですから、あなたがたも互いに仕え合うべきです。）」 （ヨハネ13:12-14）

もし今「宇宙のすべての権威はわたしのものである。」と言うことが出来たらどうでしょう。あなただったらその権威をどのように用いますか。イエス様はタオルとバケツ一杯の水を手に取り、ご自分の弟子たちの汚い足を洗いました。宇宙の全ての権威はイエス様のものでした。それをもってイエス様は何をしましたか。イエス様は弟子達の足を洗いました。
仕える者になりたいと願う人は殆どいません。逆に私達は命令し、仕えられるのが大好きです。「言ってあれを取ってきなさい！」「その道具を取ってくれ」「君にここへ行って貰わなくては行けないんだけどね。」私達はなんと指図することが好きで、その命令が満足に守られない時なんと腹を立てることでしょう。私達は傷つき、ふくれっ面をします。私達は人を支配するグループの一員でいることに喜びを覚えるのですが、神からの最大の祝福はそのようなグループには与えられません。私達は人をこき使う為ではなく、愛を持って互いに仕える為に解放されているのです。
問うまでもなく、この祝福には神の御霊が私達の心の中に御わざを成して下さることが必要です。わたしの肉は確実に人に愛を持って仕えるというような考えには逆らうからです。人からの最も単純な願いに対してさえも、わたしの即座の反応は次のようなものです。「水が欲しければ自分で汲んでこいよ。昨日は誰に使い走りさせていたんだ？」私の肉は仕えられることが大好きです。人に仕えられることを強く要求します。しかし私は、 私の肉の束縛から解放されています。今私は愛をもって人に仕えることが出来るのです。愛を持って人に仕えるとは何という喜びでしょうか。律法の全てはこの一つの御言葉に要約されています。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」（マタイ22:39）

愛する自由

イエス様より２００年前に仏陀は「人にして欲しくないことは人にするな。」と言いました。仏陀は否定的な言い方をしています。殴られたくなかったら殴るなというのです。これは否定的な命令です。

「黄金律（ルカ6:31）は単に間違ったことを避ける事ではなく、
愛を表現するための実践的な方法を積極的に捜し求めることである。」

今日多くの人が、仏陀のアドバイス（教え）を黄金律と取り違えています。彼らは自分は禁じられているようなことはしていないという理由で、自分を義人であると勘違いしています。「私は誰の心も傷つけはしないし、殺人した事もないし、誰とも汚れた事はしていない。」と彼らは言うかもしれません。彼らの生活は否定的なことに基礎が置かれたものとなり、彼らは文字通り“何の役にも立たない”存在になってしまいます。
しかし、イエス様はこの倫理を実に肯定的な言葉で表現なさいました。イエス様は「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」（ルカ6:31）とおっしゃいました。自分が人に仕えられたいと望む時私達は人に仕えるべきであり、自分が人に愛されたいと願う時、人を愛すべきであり、贈り物を受け取りたいと願う時、贈り物を与えるべきなのです。あなたの隣人をあなた自身のように愛するとは創造的な、意欲的な、喜びに満ちた仕方で人の為に何かを率先して行うということです。黄金律とは、単に間違ったことを避けるというものではなく、むしろ私達の愛を表現する為の実践的な方法を積極的に捜し求めるというものなのです。
私達はまず、神を愛することによって律法を全うし、第2に他人を愛し自分がしてもらいたいと望むような仕方で彼らに接することによって律法を全うするとイエス様はおっしゃいました。私達は他の人によく言って欲しいと望んでいるのですから、私達も他の人達をよく言うべきです。私達は、他の人達には自分の間違いを見逃して欲しいと望むのですから、私達は他の人達にも同様にあわれみ

深い態度をとるべきです。

教会内にまかり通っている蛮行

　誰かが自分について不親切なことを言った時、なぜ私達のとっさの反応はその人の鼻をへし折ることなのでしょうか。私たちは、自分を批判した人たちが、他人に聖いと思われたいほど聖くないことを程に、いくらか批評をします。「いやあ。私はもっぱら真実だけを話したいのですがね・・・ちょっとあの人について言っておかなくてはいけない事があるんですよ。」と言います。そして私達の言った事がその人の耳に入った時、陰口と悪意という果てしない循環において、また新たなる一戦が繰り広げられるのです。
一方、誰かが本当に私に対して好意を抱いてくれていて、私に関する様々な良い噂をしてくれているとしたら、私は「本当に彼は人の性格を的確に判断する才能のある（人を見る目のある）人だ。彼は本当に素晴らしい人だ。」と言います。
誰かが他の人をひどく傷つけてやろうなどというような意向を持っている時、私はその人を少々悩ませるという事をしました。その人がゴミの山を吐き出した後、私はこう言います。「うーん。それは実に興味深いね。君は知らないと思うが、その人は私の叔父なのだよ。知っていたかい。」私はその人がどんな反応をするか見るのが好きでした。
パウロは私達に警告しています。「もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。」（ガラテヤ5:15）お互い陰口を叩き、食い合っているのなら・・互いに対して身を切るような、もしくはその人の心を引き裂くような言葉やいやみを言っているようだったら、私達は愛とは正反対を歩んでいるのです。悲しいことに、最近は教会内でも人間相互間の相関的な蛮行が見られるようになってきています。私達は自分達を破滅に追い込むような悪循環の中に捕らえられてしまった自分に気づくことでしょう。嫉妬や憎しみや争いが発展するとすぐに教会は自分を食い尽くすという事態に陥ってしまいます。私達はお互いの間で滅ぼされてしまうでしょう。
　以前、特に攻撃的な種類の闘鶏の養鶏に成功した、イギリスのある人の話を読んだ事があります。彼の育てた鶏は、 闘鶏場では殆ど無敵で、その人は自分の努力の結果得た業績や評判に大きな誇りをもっていました。毎朝彼は鶏小屋に行っては、自分の育てた闘鶏達を満足げに眺めるのでした。
ある日、鶏を見に行くと恐ろしいことに、囲いの中は羽や血や死体で惨憺たる状態でした。彼の貴重な鶏たちは目も当てられない程無惨に引き裂かれて散らばっていました。彼は急いで雇人を呼び「あんな獰猛な鶏達を同じ柵に入れるなどという愚かなことをしたのは誰だ！」と雷の様な声で怒鳴りました。その雇人はおどおどと「私です。」と答えます。「何故こんなばかなことをしたのか。」と主人であるその人が追求すると、その雇い人はこう答えました。「じつは・・・闘鶏達が味方同士でも戦うということを知らなかったものですから・・。」しかし勿論、鶏達は本当の敵が誰であるかを見分けるほど賢くはなく、自分の本当の敵を見分けることが出来なかったのです。
残念なことに、教会でもこれと同レベルのことをしている時があります。私達は往々にして誰が自分の本当の敵か忘れてしまいます。敵とはバプテスト派の人達でもなければ長老派教会の人達でもありません。私達の本当の敵は、人を欺きや罪の奴隷に縛っている暗闇の力です。私達は自分達を破滅に追い込むライバル心を捨てて、神の御国の益の為に共に働き始める必要があります。もし私達が互いにかみ合ったり食い合ったりしているなら、私達は互いの間で滅ぼされてしまうのです。そしてある日、私達は教会が流血にまみれ崩壊しているのに気づくでしょう。世は「見てみろよ。これがお前達にとってのキリスト教だ。」と言うことでしょう。
教会史上こんなにも多くの時間が互いをかみ合い、食い合うことに費やされてきたとはなんという悲劇でしょう。私達は、程度を超えて、他のグループの人達に不当なレッテルを貼り、こきおろす傾

向にあります。この事ほど神の御国の進展に逆効果となるものはありません。
キリストの内にある自由人として、私達は御霊によって歩む必要があります・・愛と赦しと親切の御霊です。私達は主の慈愛と力を頂くため主に頼らなくてはいけません。これは私達が選択することではありません。一体主の他どこに、この破壊的な風潮に対抗して走り、どうしても賛成することの出来ない人に対しても良いこと、賞賛に値することに焦点を絞る力を見い出すことが出来るというのでしょうか。

自由の責任

自由に伴って大きな責任がやってきます。これは常にそうです。“自由に対して払わねばならない代価とは、永遠の警戒と用心である”とかつて誰かが言いました。私達は自分の自由を維持する為に警戒していなくてはいけません。なぜなら自由を失うのは実に容易なことだからです。
人に惑わされて自分の肉を満足させる為に、あなたの自由を誤用するなどということのないように気をつけて下さい。確かに私達は、キリストにあって自分の選択に従って行動する自由を持っています。そして確かに神はあなたの、その多少問題のある行動の為にあなたの魂を地獄に落とすことはないでしょうが、あなたは自分自身に次の事を問うてみる必要があります。この行動は私の天国への歩みを遅くするものだろうか。ゴールに向かっての自分の進展の妨げにはならないだろうか。私の人生における主なゴール、願いとはキリストにあって見い出されること、キリストにあって完成することです。パウロは言いました。「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。」（第1コリント9:24）「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」（ピリピ3:14）「私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」（ヘブル12:1、2）
私は何ものにも私の歩みを遅めて貰いたくないと思っています。何ものにも自分の進展を妨げて欲しくはありません。誰かが私にこう言うかもしれません。「でもチャック、〇〇〇をすることに関してはなんの問題もありませんよ。クリスチャンだからといって〇〇〇してはいけないという法はありません。」確かにしたければしてもいいのです。でもそれがゴールに対してのその人の歩みの妨げになるかもしれません。「すべてのことが私には許されたことです。しかしすべてが益になるわけではありません。」（第1コリント6:12）合法とされているいくつかの事が私を破壊し、私とイエス様との関係を傷つけるのです。「すべてのことが私には許されたことです。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。」（第1コリント6:12）
自由の身に留まりたいならば、その支配に自分を引き戻す恐れのある何ものをも求めることに自分の自由を行使しないよう気をつけなくてはいけません。その支配に屈服したら最後、私はもはや自由ではなくなるのです。自分を拘束し解放してくれないような活動に自分の自由を行使したいのであれば、私はもはや自由ではないのです。自由を行使した私は愚か者であり、自分自身を束縛に引き戻してしまったのです。そしてそれは決して生きることではありません。
神に感謝しましょう。私達はキリストにあって自由を与えられました。神に感謝しましょう。私達はその自由を維持する為の源を与えられているのです。真に自由であるとはどういうことなのか、言葉では十分に言い表せません。
私達が自由に愛し、自由に仕え、自由に互いの最善の益を求めることが出来るよう、主に手伝って頂きましょう。そうして初めて、ついに私達は神の素晴らしい恵みの自由においてのみ見い出し得る、他とは較べようもない喜びを存分に楽しむことができるでしょう。

10章 皆、放縦に走ってしまうのではないか

神の恵みが人を罪深い生活に導いてしまうのではないかと、多くの人が根拠もない大きな恐れを持っています。神は自分を行いによって裁くのではなく、キリストに対する信仰によって審判なさるということに信者達が気づいたら、放縦に走ってしまうのではないかと多くの人は懸念するのです。彼らは言います。「ちょっと待って下さい。チャック。こんな風にして戸を開いてしまったら、皆ありとあらゆる邪悪なひどいことをして、“神の恵みは私のする全てのことを覆うのです。”などと言って正当化するのではないでしょうか。」

このような異議が唱えられたのは、今に始まるものではありません。パウロが異邦人の間で恵みの福音を伝えた時にも、すぐさまユダヤ人の抗議にあいました。そのような自由を与えられたら異邦人は狂ったようになってしまうのではないかとユダヤ人は思ったのです。ペテロにも、パウロの福音が誤って解釈される危険性が見えていました。そして手紙の中でこう言っています。「それは、私たちの愛する兄弟パウロも、その与えられた知恵に従って、あなたがたに書き送ったとおりです。その中で、ほかのすべての手紙でもそうなのですが、このことについて語っています。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所のばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。」（第2ペテロ3:15、16）

残念なことに、いつの時代にも神の御言葉をとってその内容を曲解し、自分に滅びを招く人達がいます。彼らはパウロの福音を罪深い肉を喜ばせる生活を送るための言い訳として利用します。しかし、福音をきちんと理解する時、決してそのような解釈には導かれない筈です。

あなたは死んでいるのです

ローマ書５章においてパウロは、恵みによる私たちの神との関係を強く、また壮麗な言葉で表しています。20節にてパウロは「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。」と述べています。次の章の初めの節にてパウロは、次のように言うであろう人々を予測してこう答えています。「それなら恵みがもっと増し加わるように、行って沢山罪深いことをしようじゃないか。神の恵みが満ちあふれるのは素晴らしい。だから恵みが本当に満ちあふれるような機会を作ろうじゃないか。」「絶対にそんなことはありません。（直訳：そのような考えは除きなさい。）罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおも、その中に生きていられるでしょう。」（ローマ6:2）このパウロの答えにはクリスチャンとしての歩みや経験において重要な鍵が含まれています。

私が銀行強盗をして捕まったとします。私は留置場に送られ、裁判にかけられます。何週間か後、陪審員が裁判官に提出する判決を手にやってきます。「陪審の結果、彼を有罪とみなします。」裁判官は、私が判決を受ける日時を言い渡します。私は自分が拳銃を使ったこと、天井に何発も銃弾を打ち込み、銀行員を恐怖に陥れたことから見て五年以上の刑を受けるであろうと考えます。そしてついに私が罪の判決を受けるべく裁判官の前に立つ日がやってきます。

法律はその役割を果たし、罪のある者を捕らえ、罪に定めます。私は法廷に行き、裁判官は「被告人立ちなさい。」と言います。私が立ち上がると、裁判官はこう言います。「審議の結果、あなたは有罪とみなされた。よってここに5年の刑を言い渡す。」判決にショックを受けた私は、心臓発作でその場に倒れ、死んでしまったとします。

そのような場合、裁判官は私の亡骸を５年間刑務所に入れるでしょうか。いいえ。私は死により法律の定める有罪の判決から解放されたのです。私は死んだので、私に対する判決はもはや私に対し、何の力も持たないのです。

イエス・キリストに対する信仰によって神の御前に義とされ、現在は神の栄光に富んだ恵みの下に

生きている私たちについて、パウロが主張しようとしているのはこの点です。私たちはもはや肉にしたがって生きているのではなく、私たちの古い自分は死んでいるのです。律法は私たちに死という判決を下しましたが、私たちがキリストとともに十字架につけられた時、律法の要求は満たされたのです。古い私やあなたは十字架につけられました。古い自分が死んでいるのなら、どうしてその私たちが罪の中に生きることが出来るのでしょう。私たちはそのような古い命に対しては死んでいるのです。
「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20)とパウロは書いています。私たちはもう昔のような自己中心的な生活を送るのではありません。私たちの自我中心の日々は終わりました。もはや私たちは肉に従って生きるのではありません。今や私たちは、律法、自分の罪深い性質、そして私たちの恐ろしい咎から解放されています。それは私たちの古い罪深い人はイエス・キリストとともに十字架につけられたからです。いま私たちは、イエス様を信頼することによって神の後に従って歩んでいるのです。

死んでいるのならそのように行動しなさい

神の御前に私を義人として立たせるような信仰は、神のみわざにあって現れる信仰です。もし私が、神の恵みをみだらな生き方をするための口実、覆いとして利用し、依然として古い、自分の肉に従って堕落し汚れた生活をしているのなら、私は自分を欺いていることになります。私は真実には、神の子供ではありません。ヤコブ2:26にはこう書いてあります。「たましいを離れたからだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです。」
神の御霊によって生まれた人は、その事を自分の生き方に現します。イエス様は言われました。「なぜわたしを『主よ。主よ。』と呼びながら、わたしの言うことを行なわないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」(ルカ6:46-49)
使徒ヨハネはこう書いています。「もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」(第1ヨハネ2:3、4)そして同じ手紙の内に二度も繰り返してヨハネは「神から生まれた人は罪のうちを歩むことができない」と言っています。(参照第1ヨハネ3:9、5:18)神の恵みをくじいてはいけません。イエス・キリストをあなたの主、救い主として信じ信頼し、その関係の新しさのうちを歩んで下さい。

神を愛し、あなたがすることをしなさい

ここまで来ると、きっと誰かがこう尋ねることでしょう。「もし私たちが、よい行いの故に救われるのでなければ、喫煙や酒盛り、薄汚いバーをうろつくことから私たちを遠ざけるものがなくなってしまうではありませんか。」このような事が禁じられている故に、そのようなことが出来ないのではありません。単に、そのようなことをしたいと思わないのです。キリストの愛に駆り立てられて、私はキリストを喜ばせるような生き方をしたいと願ってやまないのです。キリストの愛の良さを味わっている為に、私はキリストから離れたくないのです。私はキリストを愛しており、キリストも私を愛して下さっているので、可能な限りキリストの近くに近寄りたいのです。私はキリストに恥辱を与えるようなことにはど

んなものでも一切関わりたくありません。
　皮肉なことに、私は律法の下で生きていた頃よりも、恵みの内に生きている現在の方がずっと正しい生活をしています。法的な関係の下で、私はいつも限界をぎりぎりのところまで押し進んでいました。私はいつも、その特定の行動が正しいのか間違っているのかを確かめようとしていました。私はいつも法の抜け穴を捜し、自分がしている事を正当化、合理化しようとしていました。私は法の許す限界ぎりぎり、プラスほんの少しそれ以上のところを生きていました。

「神はあなたを律法に縛りつけることを願っているのではない。
神はあなたをその愛によってご自分のもとに引き寄せたいと
願っておられる。これが恵みの福音である。」

神との愛の関係はそれとは大きく相違します。私はもはや、何が正しいか間違っているのか議論することはなく、むしろ、「これは父の喜ばれることだろうか。私は父を愛しており、父を喜ばせたいのです。父は私のことをこんなにも愛して下さっているのだから、父を傷つけるようなことはしたくない。もし私がこれをしたら父は喜んで下さるだろうか。」と自分自身に問うている自分の姿に気づくのです。私の心は律法が何の指示をも与えていない部分であっても、自分の考えている行動をもし私が実行したら、神は悲しまれるだろうと私に語ります。
愛の関係とは、神が私たち一人一人と持ちたいと望まれているものです。神はあなたを律法に縛りつけたくはないのです。神はあなたを神の愛でご自分のもとに引き寄せたいのです。これが神の恵みの福音で、神が律法の他に私たちに与えて下さった義です。
私たちのうち余りに多くの人が、愛こそ善意に対する唯一の真の動機であるということを理解し損ねています。クリスチャン生活において、恐れは決して主要な推進力ではありません。邪悪な存在でいるのが恐ろしいからという理由だけで善良にしているのであれば、それは本当の義ではありません。私たちはあらゆる種類の間違ったことやねじれた動機を覆う為、用意周到な外面的な行動をとることが出来ます。結果の恐ろしさだけが私たちを抑制しているなら、私たちは単に抑制下にある悪の例に過ぎないのかもしれません。それは本当の善意ではありません。善意というのは常に愛のみによって動機づけられるものです。もし私たちの道徳の選択が神に対する熱烈な愛と神の心を悲しませるようなことは控えたいという願いに基づいているのなら、私たちは義に対する真の動機を見い出した事になります。
御霊の実は愛です。愛の特に顕著な特徴の一つが善意です。私たちが愛を意識している時、私たちは喜びを経験します。愛が私たちの生活を支配している時、私たちは平安を知ります。愛が表わすものは、常に忍耐と我慢強さです。愛の特徴は柔和さと親切さです。つまり御霊が御霊の実を私たちの内に作っている時、律法のような外面的で面倒なものは必要なくなるのです。律法は愛によって成就するのです。
そこで私たちは素晴らしい発見をします。それは私たちがイエス様との愛の関係を持っているゆえ、義の生活は自分にとってもはや重荷ではなくなり、喜びになるということです。

なかなか消えない問題

私たちが神の恵みを知り、また経験することは可能です。私たちはイエス・キリストに対する信仰によって義とされている喜びと平安の内に、また神の御前に、イエス・キリストにあって正しい者として立つことが出来るという確信の内に生きることが出来るのです。この確信は、自分はキリストとともに十字架につけられたことを知っていることからきています。自分の肉に支配された生活は死に、私は今や、イエス・キリストの御霊に支配された新しい生活を送っているのです。私は新しい性質を

つまり、イエス・キリストの性質を持っています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（第2コリント5:17）これは信じ難いほど大きく人を解放する真理です。

しかし私は、依然として問題を抱えています。私はまだこの体の中にいるので、この状態にある限り私は私の肉の欲求という強力な力に従属しているのです。従って私の内側では戦いが繰り広げられています。肉はその銃を持ち出して発砲し始めます。私の肉・・・古い自分は死んでいるのですが、まるで私はこの古い亡骸を持ち歩かなくてはならないかのようです。私は、半分隠れているので取り除く事の出来ない死体と共に暮らしているサム・マギーのパートナーのようです。

聖書が次のような重要な区別をしていることに私たちは是非とも留意しなくてはいけません。“私の霊は贖われているが、私の体は贖われていない”ということです。これは途方もない葛藤を創り出します。パウロはローマ8:22、23にて宣言しました。「私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりではなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」自分の肉の弱さの為に私は幾度、神の前にうめき泣くことでしょう。

ゲッセマネの園で祈られた後、イエス様は弟子達のところにやってきて彼らが眠っているのを見つけます。イエス様はペテロにおっしゃいました。「シモン。眠っているのか。一時間でも目をさましていることができなかったのか。誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心（直訳は「霊」）は燃えていても、肉体は弱いのです。」（マタイ14:37、38）これほど真実な言葉が語られたことはかつてありません。私の霊は本当に燃えているのですが、私の肉は弱いのです。私はうめき、産みの苦しみをし、こう言います。「ああ神様、あなたが私をこの腐敗した体から救って下さる日をどうぞ早めて下さい。」私はこの古い死体を取り除きたいと切望しています。

「私が弱い時、御霊は確信と力とを増し加え、
私の心は神に対して向けられる。」

いつの日か私たちは皆、自分の堕落した性質から解放されます。聖書は言っています。「朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。『死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。』死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」（第1コリント15:53-57）

話は変わりますが、全てが失われるのではありません。私が弱い時、御霊は確信と力とを増し加えて下さり、私の心は神に対して向けられるのです。私は神の助けと神の力を求めます。神の勝利を経験し始めます。神が私に願っておられるような人生を私が生きるためには、日々イエス・キリストの強さと力により頼まなくてはならないという事に私は気づきました。私が自分の人生を本来の生まれたままの状態に保ち、何の努力もせずにのんびりとやっていく余地はどこにもありません。私がそのようなことをした瞬間に、肉は奮い立ち始め、力と権威とを強奪します。私が欲を抑制していないと、欲が私を支配するようになるでしょう。パウロは書いています。「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」（第1コリント9:27）

さて、もし私が油断をしていて肉に捕らえられ、再び肉に屈服してしまった場合、私はもはや救われていないということになるのでしょうか？私は振り出しに戻り、再び救われなくてはならないのでし

ょうか？そうではありません。私はまだイエス・キリストを信じています。依然として主を愛しており、依然として私の信仰の故に私に義人とされています。私の信仰とキリストにある私の新しいいのち故に、私は自分の肉に支配され続けることがないのです。
私は一時的には奈落の底に落ちるかもしれませんが、そこに留まることは出来ないのです。神は私がそのような状態に留まることをお許しにはなりません。神は他の誰もがやっているような事を少々私もすることをお許しにはなりません。彼らはそれをし、うまく切り抜けているかもしれませんが、私はそうはならないのです。神は私がそうしないよう面倒をみて下さるでしょう。もし私がこの世的な方法に従おうとし、大衆がするような事をすれば、私はそれに失敗するか、それを嫌うか、それに捕らえられるかのどれかです。神は私たちを愛しておられ、私たちは神の子供なので、私たちは単に世がやっているような罪をこっそりとし、切り抜けることは出来ないのです。

基準は全く存在しないのか

私たちは恵みの下にいるのだから、個人の行動に対する神の基準は全く無視していいのだろうか・・と依然として考えている人がいるかもしれません。いいえ。決してそんなことはありません。私たちは新しい関係において、神の力の原動力と内に宿る聖霊を頂いたのです。キリストにおいて私たちは、神の愛と聖さと調和のとれた生き方を望む新しい性質を受けました。聖霊の力のお陰で、私たちは正しい事をしようと懸命に努力する必要はもはやないのです。これが次の箇所でヨハネが言わんとしていることです。「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令とは重荷にはなりません。」（第1ヨハネ5:3）
私たちの中の神の臨在が、正しいことを選び取り、悪を避けることが出来るよう私たちに力を与えてくれるのです。古典文学を読んでいる人は、ユリシーズの話を知っていることでしょう。この古代における大冒険家ユリシーズは、旅の途中、セイレーンの住む島の話を聞きます。恐ろしいほど魅惑的な魔女が、世にも美しい音楽を奏でるので、この島の近くを通る海の男達は必ずや船を島の沖に向け、岩に乗り上げて難破してしまうというのです。これらのセイレーンの歌を聞いて生還した人はいませんでした。この話はユリシーズのような勇敢な男には、挑戦するに値する話のように聞こえました。ユリシーズはこの音楽を聞いた上で生還した最初の男になることを決意します。
目的を達成する為、ユリシーズは自分の船の船員達の耳をろうで覆い、自分を船のマストに固くくくりつけるように指示しました。セイレーンの住む島を過ぎた辺りで魅力的な音楽が始まりました。ユリシーズは島の岸に泳いで渡る為、自分を縛っている縄を解こうともがき始めました。ユリシーズは船を島に向かわせるよう船員達に狂ったように叫び続けるのですが、ろうが耳にあった為その叫びは彼らには聞こえてきませんでした。ユリシーズは船がその区域から出、安全な海域に着くまで自分を縛りつけている縄と格闘し続けました。ユリシーズは確かにその魅惑的な音楽を聞いた上で生きて帰りました。しかし、それから後もその自分を魅了してやまない音楽の記憶に悩まされました。
ギリシャ神話には、その島を通過しつつも生還したもう一つの話が収められています。船員達がその音楽に引き寄せられて浅瀬へ帆先を進め、悲劇に向かっていた時、船に乗っていた琴の名手オルフェウスという人はリラ（古代ギリシャの竪琴）を取り出し、演奏し始めました。オルフェウスの奏でる音楽はセイレーンの音楽よりはるかに素晴らしかったので、船員達は岩礁に向かっていた帆先を変え、難破の危機から救ったこの新しい絶妙なメロディにうっとりとしながら安全なところに向かって航海をしました。
私たちが誘惑に魅了される時、大抵の人はユリシーズかオルフェウスのどちらかに自分を当てはめることが出来ます。ある人にとっては、この世のセイレーンの音楽は殆ど抵抗することの出来ない魅力を持っています。彼らは律法によって縛られていながらも、肉の力に魅惑された時、律法に対してもがき格闘している自分の姿に気づくのです。彼らの唯一の希望は彼らを引き止めておく律

法にあります。

「キリストにあって一つであることから来る喜びは
世や肉が与えることの出来る何ものにもはるかに優っている。」

しかし、新しい歌・・・天国の音楽を心の中で聞いた人もいます。そのような人達は、イエス・キリストの愛があまりにも強く自分を満たすことのできるものである事に気づいたので、世はやはり依然として魅力的であるには違いないが、神の素晴らしいご臨在に引き寄せられる為に、それを喜んで捨て去ることが出来るのです。そのような人達は、縛られたりくくり付けられたりする必要がありません。彼らは自分を抑制する縄に対して、もがくことがありません。彼らは神との親しい交わりの中に神と共に歩むことの栄光を見い出したのです。キリストにあって一つであることの喜びは、世や肉の与える事の出来る何ものにも優って素晴らしいのです。罪の魅力や誘惑は、すっかりその力を失っています。このような満足感を既に発見している人達には、律法は必要ありません。「あなたの隣人の頭を殴ってはならない。」という規定に奴隷のように従う代わりに、彼らにはそのようなことをしたいとも思わないのです。それは彼らの心が神の愛に触れられているからです。彼らの願いはただ自分の隣人が救われることなのです。

つい先日、私はこの原則を行動の内に見ました。私がカルバリーチャペルの近くの、交通量の激しい通りを運転していた時、私の前を運転していた車が突然止まり、私はブレーキを強くかけた為、危うく車輪の回転が止まりそうになりました。その車を運転していたのは小さな白髪頭のおばあさんで、おばあさんにはもう少しでぶつかりそうになった、後ろを運転している私やその後ろの数人が見えていなかったのでした。もし他の人達が気をつけていなかったら、大きな事故になるところでした。おばあさんはその後も危ない運転をしており、私は自分がこう祈っているのに気づきました。「主よ。どうかあの小さなおばあさんが無事に帰宅することが出来るよう助けてあげて下さい。」私をよく知っている人はきっと、そのような状況においてとった私のその様な態度は奇跡以外の何物でもないと証することでしょう。イエス・キリストを通して私たちが持っている神との愛の関係がもたらす変化を経験することが出来るのは素晴らしいことです。

変わることのない愛

キリストのお陰で私たちは神と真に一体になることを経験することが出来ます。ある時は神が私たちに近くおられ、次の時は遠くにおられるということはありません。私たちが失敗をし、実に多くの面においてまだ弱くても、神の御前に立つ私たちの義は私たちの態度や気分が変わる度に変化することではありません。私たちの神との関係は安定していて確実です。それは私たちや私たちの振舞いによって左右されるものではないからです。私たちの関係は、私たちの代わりになされたイエス・キリストの御わざに基づいています。イエス様はご自分の上に私たちの罪を負われ、信仰による私たちの救いを実現するために私たちの代わりに死なれました。私たちは“自分が良い態度を取っている時のみ、神は自分を愛して下さり、自分が悪い態度をとっている時は拒絶される”という考え方を捨て去ることが出来ます。

私はよく孫娘に電話をします。私は朝に彼女と話し、様子を聞くのが好きなのです。私が聞くと、彼女がこう言う時が時折あります。「おじいちゃん、わたしきょうは不機嫌ななのよ。」彼女がそのように言う時、私の彼女に対する愛はいつもより冷めてしまうでしょうか。彼女は自分が機嫌の悪いことを知っています。しかし、その事によって私の彼女に対する愛が、一寸たりとも変わることはありません。また彼女が本当に可愛らしい小さな天使である時、彼女に対する愛が深まるというのでもありません。私はただ彼女を愛しているのです。私は彼女が機嫌の悪い時も彼女がよい子である時も

彼女を愛しています。
 神は同様に私たちを見て下さっています。自分が機嫌の悪い時、私たちはこう考えがちです。“今日は神も私を愛することは出来ないだろうな。自分でさえこんな自分を愛することは出来ないのだから。惨めだ。誰にも近寄って欲しくないな。”また私たちは自分が失敗した時、神は自分を愛して下さらないと考えがちです。そうではないのです！もし私たちの神の御前での身分が私たちの行いに基づいているのだったら、イエス・キリストの死は必要はなかったのです。
 イエス様が私たちの信仰を義とみなして下さる時、イエス様は私たちにご自身との美しく安定した愛の関係を与えて下さいます。私たちは「さあ中に入ってお座りなさい。あなたを助けさせて下さい。あなたを力づけさせて下さい。」というような身分を持っているのです。
 神はあなたを愛しておられます。あなたは神にとって心から愛しい人なのです。だから神はあなたを選び、あなたをご自身の永遠へと召されたのです。だからこそ神の恵みが人を荒々しい生活、放縦に導くことはないのです。救い主に抱かれるのは罪に抱かれるのに較べ、比較しようもないほど喜びに満ちています。

１１章　仕掛爆弾と地雷

いつの時代にも、刈入れの済んだ畑に行ってその収穫物の一部を落穂拾いしようと構えて立っている人がいるようです。
カルバリーチャペルの駐車場でも、奇妙な教義を奨励するためのチラシを配っている人々をよく見かけます。また駐車場の入り口に立って、教会員が入って来る時に教義について惑わすようなことを言っている人々もいます。私たちはいつもそのような人達に対して「あなた方は何故、チラシを配るのに教会に行くのですか。」と聞きます。もし集会を開くことになっていてそれを知らせるためのチラシを配ることにしていたら、私たちは子供達をビーチやショッピングセンターに行かせます。他の教会に行かせるなど考えもしません。何故既にそこに落ちついている人を自分達の方に引き寄せようとして他の教会に行くというようなことをするのでしょうか。
もし自分が実に重要な教義を知っていて、他の人も是非その教義を理解し、信じる必要があると感じるなら、私たちを改宗させようとするのではなく、その真理がどのようにあなたをイエス・キリストに似た者に変えてきたのか見る特権を私達に与えるべきではないでしょうか。あなたの人生において立証された真理を見させて下さい。私たちがあなたの素晴らしい献身と主との親しい歩みを目撃した時、私たちは自分に必要なものをあなたが持っていることを認め、必ずやあなたに何が起こっているのか尋ねることでしょう。
悲しい事に人々はそうするだけでは満足しません。キリストの体を引き裂いて別の教派を信じさせるよう自分が神からの召しを頂いているように人々が感じるのは悲劇的なことです。新約聖書に偽の教師やそのずる賢く、魅惑的な方法に対する警告や勧告が多く書かれているのはこの為です。

あなたは確信を持つことが出来る

異端はどれもキリストの福音を曲解する傾向にあります。大抵、異端は行いや行いによる義を強く強調します。異端に入っている人に「あなたは生まれ変りましたか。」と聞くなら、彼らは大抵「兄弟、それは死ぬまで判らない事なのですよ。あなたの最後の行いがどんなものになるのか、あなたは知らないのだから。」と答えることでしょう。死んで初めて自分が新生したのか否かを知るとは、なんと恐ろしい事でしょう。

「聖書は救いの道は本当に狭い道であることを教えている。」

神は私たちが救いの確信を持つことを望んでおられます。そしてもし私たちがイエス・キリストとその御わざに頼るなら、私たちは救いの確信を得ることが出来るのです。もし私たちの救いが行いに基づいて与えられるなら、救いの確証とは私たちの把握出来ないものになります。もし私たちの救いが信条や行いのシステムに対する忠実さに基づいて与えられるのであったら、私たちは死ぬまで自分の永遠の運命を知ることが出来ません。そして死んでから知っても遅すぎるのです。しかし、もし私達の救いがイエス・キリストに対する信仰とその御わざのみに基づいているならば、私達は救いの確信を持つことが出来ます。
私は自分の行いに確信を持てませんし、自分の義に対しても確信を持てません。しかし私はキリストの御わざとその義に対しては確信を持っています。賛美歌の作詞家がこう書いている通りです。「わが身ののぞみはただ主にかかれり、主イエスの他にはよるべきかたなし。わがきみイエスこそすくいの岩なれ。」
パウロはこの真理をとても強く確信しており、こう書いています。「もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。」（ガラテヤ

1:8）パウロはこの“のろわれるべき”という言葉にanathemaという実に強い言葉を用いています。これは、 地獄の最も低いところに落ちるほど呪われよ、という意味です。
今夜あなたのベットに御使いが座っているとしましょう。あなたはどうも眠りにつけず目を覚まし、自分の足の方に身長2メートル位の輝く人が立っているのを目にします。もしその人が「恐れることはありません。私はあなたによい知らせを持ってきたのです。あなたは特別な人で、神はある特別な仕事をさせるのにあなたをお選びになりました。もしあなたがこの仕事を神のためにするならば、神はあなたをお救いになるでしょう。」と言ったとします。あなたはこのことに対してどのような結論を下すべきでしょうか。一つ確かな事があります。この御使いは神からのものではないということです。その天使は呪われるべきです。
救いの道は本当に狭い道であることを聖書は教えています。パウロの言葉は今日非常に多くの人が信じている幅広い種類の宗教に対して致命的な打撃を与えるものです。その人達は（多くの人は）「心に正しいと感じることをする人は神に受け入れられると私は信じています。」と言います。ペテロは言いました。「『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」（使徒4:11,12）
今日の多くの人々はこう言うでしょう。「ペテロよ。あなたはなんて心が狭いのでしょう。イエスだけが唯一の道だとおっしゃるんですか。ペテロ、それはあまりにも狭いですよ。そんなことにはとてもついて行けません。」と。そう言うのなら結構です。それなら呪われればよいのです。「でもこれはあまりにも厳しい言葉ではないですか。それはあまりにも狭い。イエスは確かにもっと心が広かった筈だ。」と彼らは言います。しかし「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ14:6）とおっしゃったのはイエス様ご自身なのです。そしてこうおっしゃったのもイエス様です。「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そしてそこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」（マタイ7:13,14）
パウロは常にこの真理を明示し続けました。今日でもパウロがガラテヤ人にこう嘆願しているのが聞こえてくるようです。「もう一度言いますから、よく聞いてください。もし私や天の御使いや誰かがやってきて、あなたを自分自身や自分の行いや自分の善良さや、自分の義や、律法を守ることや、割礼を受けていることや、何かの慣例に従っていることや、何かのグループに入っていることや、人に物やお金を施していることに、より頼ませようとするなら、その人は呪われるべきです。」
パウロは何故こんなにも断固として主張したのでしょうか。それは私達がその御子イエス・キリストに信仰をおいた時、神が私達をありのままで受け入れて下さったからです。私達の神への信頼の故に、神は私達を全ての罪からきよめ、私達を受け入れて下さったのです。神は私達の上にご自分の豊かさで満ち溢れた愛を与えたいと願っておられます。それは私達がそれを受けるに値するからではなく、神が私達を愛しておられるからです。これがイエス・キリストにおける恵みの福音です。後にパウロが死んだのはこのためです。

それは驚きです

良い行いを神と関係を持つための基礎であると教えている教義が何故、人々の生活の中に受け入れられているのか不思議に思ったことはありませんか。私は不思議に思いました。
パウロもまた不思議に思っていたことは疑いの余地がありません。彼はガラテヤ人達にこう言っているからです。「私はキリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」（ガラテヤ1:6）人々がキリ

ストの恵みを離れて別の福音に移って行くこと、特にそれが少しも良い知らせではない福音であることは驚くべきことです。
 誰かが「イエス・キリストを信じるのはいいことだ。でもそれだけではいけないんだ。」という時、気をつけて下さい。あなたが私に、私は義人でなくてはいけないとか、自分の聖さによって神の御前で自分を証明しなくてはいけないと言う瞬間、あなたは私を神の近くに導いているのではなく、私を神のもとから押し出しているのです。私は義人ではないし、聖くもないし、私がそのようになれる筈もないのです。ですから、あなたが私に語っていることは良い知らせではないのです。それは良い知らせからは程遠いものです。それは死の宣告です。
　何故、神との愛の関係を離れて、行いや割礼や律法を守ることによって関係を築こうとする人がいるのか、パウロには理解することが出来ませんでした。「あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。」（ガラテヤ1:7）とパウロは書いています。

武器としての愛

 人々が、 本当の福音を離れて偽の福音に走るのは不思議なことですが、偽の教師達が新しい弟子を捕らえる為にとっている方法については、なんら不思議なところがありません。一つの共通のテクニックは愛情を熱心に用いることだと、パウロは指摘しています。「あなたがたに対するあの人々の熱心は正しいものではありません。彼らはあなたがたを自分たちに熱心にならせようとして、あなたがたを福音の恵みから締め出そうとしているのです。」（ガラテヤ4:17）異端に引き込まれてしまった多くの人達は、異端の人達は自分を入信の見込みのある人間としてみなすと、自分に信じ難い程の愛情と関心を払ってくれたので入信してしまったのだと言っています。しかし一旦入信してしまうと、彼らの熱心さはその人に愛情をかけることから教義を教え込むことへと変わります。その新しい信者は豊かに愛情をかけられる代わりに、熱心な肉体の修養を強いられ、ついに疲労困憊してしまうのです。自分に対する自信はすべて剥ぎ取られ、その人はそのグループの霊的曲解に極度に影響され易い状態になります。
 最初にあれほど示された愛は、その人を隔離し自分達の支配のもとに導くための単なる手段であったのです。もしその人が自分達のプログラムについてこないようだったら、その人に対する愛はなくなり、その人は締め出され排斥されたことに気づきます。もしその人が彼らの教える新しい教義に賛成しない場合、その人に対する愛は赤裸々な敵意へと素早く変化します。
 タクソンにおける初期の牧会にて、私は“ジーザス・オンリー（唯一イエス様だけ）”という教義を掲げるペンテコステ派のグループと嫌な出会いをしました。この異端は父、御子、御霊はどれも言葉が違うだけで全てイエス様を意味するものであると教えていました。（イエス様が御父に向かって祈っておられた時、イエス様は誰に話しかけておられたのかということや、イエス様がバプテスマを受けられた時、天から声を発したのは誰であったかということを説明するのに彼らは当然のことながら苦労しています。マタイ3:17にて「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」と告げた声はイエス様の巧妙な腹話術だったとでも言うのでしょうか？）
 このような見解の弱さは明らかであるにも拘わらず、この教義を信じる人達は強気な調子でやってきては、様々な争いを起こす事が好きなのです。悲しい事に私の教会の影響力を持っていた2、3の家族がこの教義を信じてしまいました。すぐに彼らは次の計画として私を標的にし、熱心に私に対する好意を示し始めました。彼らは私を食事に誘っては、私がどんなに将来有望であるか、自分達がどんなに教会を愛しているか延々としゃべり続けました。
 さて、私は常に人々と聖書の内容について論争をするということを嫌っていました。私は大抵人々をけなそうとはせずにその誤った見解を言わせておきました。これらの人々は、イエス様が「わたしと父とは一つです。」（ヨハネ10:30）とおっしゃった箇所をよく引用していたのですが、私はただ「あ

あ、そうだよ。イエス様はそうおっしゃったよ。」と言っていました。彼らが聖書の言葉を引用する度に私は「ああ、聖書はそう言っているね。」と言っていました。しかし私は彼らと論争を繰り広げようとはしませんでした。

勿論、私はその問題に対して明白な答えとなる御言葉を多く知っていましたが、私はわざわざこれらの人々と議論しようとはしませんでした。イエス様はおっしゃいました。「あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。」（マタイ5:25）と書かれているので、私は彼らが引用した御言葉に同意していました。彼らの独特の解釈には同意しませんでしたが、私はいつも御言葉そのものには同意していました。私が彼らと論争していなかったのでこの人達は私を説き伏せることが出来たと思ったのでした。

ある日、彼らは大人のための日曜学校のクラスで自分達の信じる教義を持ち出しました。教師が効果的に彼らの見解を拒絶すると、彼らの内の数人は私も彼らの教義を支持していると主張しようとしました。教師はすぐにこの論争を解決するため私を呼びました。私が、神は一人だが御父、御子、御霊というそれぞれ別の人格に現わされていると自分は信じていると言うと、“ジーザス・オンリー”の教義を支持している人達は激怒してしまいました。

次の日、彼らは私に電話をかけてきて「今夜家でお会いしたいのですが。」と言いました。その夜私が彼らのところに行くと彼らは「真理を否むとはなんと大それたことをなさったのでしょう。自分が本当に信じていることを否定するなどということがどうして出来るのですか？」と詰問しました。そこで私は「いいや。私はそんなことはしていないよ。私は真理を否定してもいないし、自分の信じていることを否定してもいないよ。学びのクラスでは自分の信じていることを正確に言ったんだ。私はイエス様が安っぽい腹話術をしていたとは思わないし、御父に向かって祈られていた時も人々を騙そうとなさっておられたとも思わない。私は御父、御子、御霊はそれぞれ別の存在であると信じているんだ。唯一の神がおられるのだけれどね。」と言いました。その時初めて彼らの真の姿を見ました。

彼らは私を脅しました。「兄弟、神は私達に啓示を与えて下さり、あなたに関する幻を見せて下さったのだよ。私達の言っていることが正しいと教会員の前で言わないとあなたは黒い棺で運び去られるという幻だったんだ。」このような恐ろしい脅迫の言葉が次々と発せられるのを聞きながら、私は「一体この人達が私に対して持っていたあの愛はどうしてしまったのだろう。」と不思議に思い始めました。

「あなたが白状するかどうか決めるのに土曜日まで時間をあげよう。」と彼らは言いました。そこで私は「土曜日までなんて時間は必要ない。私は今すぐにだってどうするつもりか言うことが出来るんだ。」と言いましたが、彼らは「もうこれ以上しゃべるな。兄弟、このことについて祈りたまえ。もし土曜の夜までに今言ったことをすることを約束しないんだったら、もう2度と教会には戻らないから。」と彼らは答えました。日曜学校に出席している５３人の子供の内の１１人が、このグループのリーダーの子供でした。日曜学校をもっと大きくしようとしている時１１人もいなくなってしまうのは痛手でした。

土曜の夜、私は電話を受けました。「さて。兄弟、どうするつもりかね。」「私は決心も変えていないし信じていることも全く変わっていないよ。」と私は答えました。「そうか、それならいいんだ。私達は前もってあなたに警告しておいたんだからね。」と彼は言い、電話の向こうで受話器を置く音が聞こえました。彼は去り、彼の１１人の子供達も彼と共にいなくなりました。

この男性や彼のグループの人達は、私が彼らの教義を信じる可能性のある存在である間は熱心に私に対する愛情を見せていました。しかし私が彼らに支配されず、彼らの勧めにも応じないことを見いだすと、彼らは私も教会もまるで悪習慣のようにやめました。

それは本当の愛ではありませんでした。それは私を改宗させる為に偽善的に演じただけだったのです。シェークスピアもかつて言いました。“変わってしまう愛は愛ではない。変わってしまう時、 愛は愛でなくなるのです。”私が改宗されないと分かった時、彼らの本当の感情が表面に現われたの

です。
これは偽の教師が頻繁に用いる策略です。彼らは人を改宗させる為に実に熱心に愛を示します。しかしその人が改宗に応じようとしないと、彼らは素早く彼を除外するのです。
人々は心からあなたを愛しているかのように、また実に親切で実に善良そうな顔をしてやってきますが、それはあなたを彼らの信じるものに説き伏せる為だけなのです。もしあなたが彼らに引き入れられていないのなら、気をつけてください。彼らはあなたにあらゆる悪口を浴びせ、あらゆる裁きや非難をもってあなたを攻撃することでしょう。これは恵みの福音ではありません。

つまずかないように！

まやかしの教えを信じて真理を離れて行く人を見るのは辛いことです。あなたは彼らを愛しており、彼らがやがて直面するであろう痛みを出来ることなら避けさせたいと思います。しかし、あなたの出来ることは殆どありません。パウロはこのような気持ちをよく知っていました。ガラテヤ5:7はパウロがガラテヤ人達と分かち合った関係を回想しているほろ苦い節です。「あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。」
ガラテヤ人達は、かつては神と互いへの心からの愛の中を歩み、大変な状況下の中でパウロに対し公然と献身的に仕えました。彼らはパウロの為になら進んで自分の目でさえも差し出すほどでした。しかし今彼らはその歩みを妨げられ、パウロを敵とまでみなすようになってしまいました。何故でしょう。それはパウロが彼らを愛する故に真理を彼らに示した為です。
運動の世界であればガラテヤ人は、よいスタートを切ったのにレースの途中でもつれてしまった競走者であるとパウロは例えています。「このような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。」（ガラテヤ5:8）とパウロは書いています。ユダヤ教の人によって持ち込まれた“新しくより深い真理”は神から来ているものではないことをパウロは主張しました。

「信者一人一人にはその教えが本当か否か聖書を調べる責任がある。」

しかし、どれだけ多くの人々がこの種の偽の勧めを真に受けとめてしまったことでしょう。キリストにある誠実な信者までもが伝道者の巧妙な話により惑わされてしまいます。彼らが偽の教えを信じてしまったのは、聖書を調べたからではなく、その説得力のある人に影響されてしまったからです。
このような不敬虔な影響を受けた結果、悲しいことに被害者であるその人は自分の人格でさえも剥ぎ取られ、彼らの奴隷になってしまいます。全く普通の人に思われる人が何故そのリーダーの為に空港で花やピーナッツを売るほど異端の支配下に入ってしまうのか、あなたは不思議に思ったことがありますか。この種の教義はもちろん神からのものではありません。実際のところ、束縛志向の制度の下ではどんなものでも遅かれ早かれ人々は自分が“人”の支配下に置かれてしまったことに気づくのです。
この種の惑わしに対する最善の防衛手段は、「すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守る」（第1テサロニケ5:21）ことです。その人がどんなに尊敬されている人であろうと、どんなに有名であろうともどんなに支持者を多く持っていようとも、私達は誰かの言葉を福音の真理として受け取ることは出来ないのです。信者一人一人がこれらのこと（その人の言うこと）が真実であるか聖書を調べる責任を負っています。
私達がそのような警戒を脇に置き、ある教師の容貌や話し方、もしくはラジオ伝道しているから、テレビ伝道しているからという理由のみで、その人が言う全てのことを信じてしまうとはなんという悲劇でしょう。私達は自分に提供された教えをチェックするということを怠っている時、自分を召してくださった方からのものではない様々な勧めに対して自分を開け放っているのです。神は心を変え

たりはなさいません。神はご自分の真理を校訂したり、新しい啓示をもって味つけしたりなさいません。恵みの福音は変わりません。しかしながら福音が変わったと主張する説教者を見つけることはさして難しいことではありません。

他の名前による束縛

今日でもあらゆる種類の人が律法主義を主張しています。彼らはこのような質問をします。「兄弟、あなたはどのような洗礼を受けましたか。誰が洗礼を授けましたか。その人達はあなたに洗礼を授けた時、どのようなことを言いましたか。」次のような事を言う人さえいます。「正しい形式に則って洗礼を受けたのでなければ、本当の洗礼とはいえません。あなたは滴礼のバプテスマを受けただけですか、それとも浸礼のバプテスマを受けましたか。」

悲劇的な事は、これらの教えがイエス・キリストに対する信仰によって私達の心の中に成された神の御わざから私達を遠ざける為にのみ作用するということです。どんな儀式・・・バプテスマであろうと聖餐式であろうと洗足式であろうと私達を義とするためには何の役にも立たないのです。神に対する正しい身分は、信仰によって完全に私達のものとなるのです。そしてその信仰は愛によって働くのです。これは私達の神との歩みにおいて本当の力、平安への鍵となるものです。偉大な使徒がこう言ったのも無理もないことです。「あなたがたがそんなにもはやく真理を見捨てて本当は福音ではないほかの福音に移って行くのに驚いています。」

真の福音とは良い知らせです。それはイエス・キリストの完成された御わざを通して与えられる神の恵みと罪の赦しの良い知らせです。あなたの神との関係はあなたの義やあなたの行いやある一定のきまりを守ることに基づいているのではなく、あなたが自分のためになされた神の犠牲を信じるか否かに基づいているのです。もしあなたがこの神の御わざを信じさえすれば、イエス・キリストを通してあなたは神と美しく壊されることのない関係を持つことが出来るのです。あなたの罪はすべて洗い流され、あなたの全ての欠点や失敗、態度の罪の責任は消えるのです。それらは存在することはないのです。それはあなたがイエス・キリストにおける信仰によって義とされたからです。

パウロは行いという基礎に基づいて神と関係を持とうとすることの愚かさを知っていました。まさに自分がそこから始めたので、パウロはその結果を見ることが出来ました。「律法についての話は私にはしないでおくれ。私は律法についてすべてを知っている。私は律法の中になった義についてすべてを知っている。私はパリサイ人だったのだ。私は熱心だったんだ。私は私の兄弟達よりも熱心だったんだ。私には律法の話はしないでくれ。それについては全てを知ってるよ。でも神に感謝します。私はイエス・キリストにおける信仰によって神との新しい関係に至った時、全てから救われたのです。」とパウロは言うかもしれません。

私達も同様でした。恵みの福音に落ちついているのですから、だれにも心を乱されたり、罪悪感によるつまずき、また行いによる義という考え方を植えつけられたりしないでください。それは価値のないことです。私達だれ一人としてanathema（地獄の最も低いところに堕ちるほど呪われよ、の意味）というような言葉を名前に添えられる必要はありません。

12章　全部か一つもないか

以前、私はオレゴンで開かれた牧師の昼食会に出席しました。プログラムが始まる前、主の再臨について話しては姿を消してしまうというヒッチハイクの人の話を聞いたことがあるかと、誰かが私に尋ねました。私は彼に聞いたことがあると言いました。私がこの話を一度だけ聞いたことがあるのはかなり前、１９４４年カリフォルニア州バーバンクにてでした。その話の結末はいつも同じなのです。その話をするヒッチハイクの人を自分達の車に乗せた夫婦がガソリンスタンドに行くと、その日にこの人達と同じ話をした人が八人もいたとスタッフが言いました。私にその事を聞いた牧師は、笑ってこう言いました。「まるでオレゴンがいかに田舎かを示しているような話ですね。この噂がここまで伝わって来るのに５０年もかかっているなんて！」

私達は何の役にも立たないことになんと興奮しやすいのでしょう。また、私達の信仰が神の言葉というしっかりとした土台の上に築かれているとは、なんと感謝なことでしょう。私は何か超自然的で特別な啓示を受け取るよりも、主ご自身が聖書という絶対に確実なところから語りかけて下さる方を好みます。たとえ天使がやってきて何か革命的な真理を持ってきたと言っても、私はその天使のメッセージが神から出たものかどうか疑うことでしょう。

私達が御言葉に頼る時、後にああすれば良かったこうすれば良かったと取り留めもなく考える事はありません。聖書のみが私達の信仰とクリスチャンとしての歩みの為の堅固な土台なのです。私達の生活が神の御言葉の真理の上に築かれている時、目新しい教義の一時的な流行や福音の“最新版”もしくは“改訂版”といったものに惑わされることはありません。私達が神の言葉の真理に堅く立つとは、なんと大切なことでしょう。これこそが、キリストにおいてこんなにも豊かに私達に与えられた輝かしい“自由”を維持する為の唯一の方法です。

どのようにしたら私達は堅く立つことが出来るのか

堅く立つことに失敗する人達は、神の御言葉を十分に理解していない為に、キリストに対する単純な信仰という所から動かされてしまっているのだという事を理解することは、重要です。私達の生活に本物の安定をもたらすのは、唯一聖書をしっかりと理解することによるのです。

パウロはかつてこう言いました。神は“聖徒を完全にする”ために、教会に使徒や預言者、伝道者、牧師また教師を備えられた、と。（エペソ4:11,12）ここで聖徒が完全になるという事は、信仰の一致が安定するということであり、「私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがない」ようになることなのです。（エペソ4:14）私達が御言葉の上に築かれるという事はなんと重要なことでしょう。このような惑わしの多い時代にあっては特にそうです。“勿論、神はご自分の子ども達がメルセデスのような高級車に乗ることを願っておられるに決まっているよ。トヨタの車にしか乗らないなんてあなたはなんと霊的ではないのでしょう”というようなことを言い、繁栄主義的活動を行う過度な物質主義に始まり、洗礼の“唯一の”正しい方法について“新しく”示すグループに至るまで、教義の曲解は今日、常に見られ例外ではないのです。

パウロはガラテヤ5:1にて「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかりと立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」と友達に熱心に勧めましたが、パウロのメッセージは彼が最初に手紙を書いた時と同様、今日の私たちに対しても適切な意味あるものです。教会自体が、私達に義についての律法的な基準を課す最初のものとなってしまう事がよくあります。これらのルールや規定は十分に受け入れられます。なぜなら、律法のもつ明確な限界は、ある種の安心感を与えてくれるのです。異端は信者に抗しがたい程の指示を個人的に与え、また権威に対する盲目的な服従によってもたらされる安心感を与え

ているのです。
しかし、このように厳しく統制されたライフスタイルに身を投じる人達は、個人の自由を引き換えにそうするのです。彼らは、これらの異端が与えてくれる安心感とともに、その基準を破ってしまった時に激しい有罪の念がやって来ることに気づいていないのです。そのような組織の奴隷とならされていた多くの人達が、自分はその団体を離れる事は神を離れるに等しい事であると信じていたと私たちに語ります。入信した人が、その異端の団体を疑問視し始めたり、どこか他のところに行きたがると、あなたは今地獄に落ちる危険にさらされているのだと言われるのです。このような種類の圧力をかける方法や真理を完全に閉め出してしまうような乱暴な主張は束縛を基礎としている団体の特徴です。
一方、主との歩みにおいて成長することの出来る場所を捜すよう人々を促す教会は、霊的に健全であることのしるしを示しています。カルバリーチャペルではよく人々に、よく周りをみて自分を最も効果的に牧すことの出来る場所を見つけるよう提案しています。私たちのところに来る人の中には、私たちの礼拝にもっと感情的、または感覚的な部分を求める人がいます。私たちはこのような人達に、自分の持っている自由を行使して、より自分の希望に沿うような教会を探すよう言います。誰かが私たちの教会に縛られることなど全く願っていないことです。

「私たちにとって、この真理を内に持つことは不可欠である。
信仰を行いに置くことは、私たちを神の恵みから切り離すことである。」

パウロが用いている“奴隷のくびき”という言葉はシモン・ペテロが最初のエルサレム公会議で語った言葉の引用でしょう。使徒１５章にてペテロは、コルネリウスの家にて異邦人へ奉仕するようにという神の召しについて詳しく語りました。そして、公会議がユダヤ人でない人達に“私たちの先祖も私たちも負いきれなかった”奴隷のくびき（10節）を負わせないよう提言します。パウロは、恵みにおける自由についてのメッセージは自分が考え出したものではないということを強調する為にペテロの言葉を引用しているのです。キリストにおけるこの自由というものは、教会の確固たる姿勢だったのです。

儀式は救いをもたらさない

エルサレム公会議で否定された教えの鍵となる解釈は、異邦人は救いを受けるために割礼という儀式を受けなくてはいけないという主張でした。公会議の人達は、行いは人を義人にすることは出来ないというパウロの主張に同意したのでした。パウロは後に、儀式に信仰を置くことは福音に反することであると述べました。「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。」（ガラテヤ5:2）とパウロは書いています。
これによって私たちは安心してこう言うことが出来ます。どんな行いであっても、行いに自分の信仰を置くことは、自分を神の恵みから切り離すことになる、と。この真理を内に持つことは、実に大切なことです。救いを受けるために割礼を受けなくてはいけないと唱えて回る教師はもはやあまり多くはいませんが、救いを受けるためには洗礼の儀式を受けなくてはいけない、と実に誠実な人が主張しているのをなんと多く耳にすることでしょう。
この方針をもってあらゆる奇妙で極端な主張を唱えている人達もいます。救いを受けるためには洗礼を受ける必要があるだけでなく、正しい方法で受けなくてはいけないと教えている宗派もあります。イエス様の御名のみによる洗礼でなくてはいけないと主張するところもあります。自分達の団体の、

ある一定の牧師による洗礼でなくてはいけないというところもあります。余りにも詳細に捕らわれてしまい、滴礼か浸礼か、もしくは洗礼を授ける時その人を前向きに倒すべきか後向きに倒すべきかをめぐって教会が分裂してしまったところさえあります。

このような分裂の全ての元にあるのは、神と正しい関係を得るために、特別なよい行いに対し、誤った信頼をおいてしまっているということです。もし私達が救いを得る為に、何か良い行いを信頼するのであれば、キリストは私達にとって何の価値もないと聖書は明確に教えています。私達は両側の柵に乗り、キリストと自分の良い行いの両方を信頼することは出来ません。もし自分の救いの基礎として洗礼を信頼しているのだったら、私達は行いに信仰を置いていることになります。私達は自分の霊の家を、私達を支えることの出来ない砂の土台の上に建てているのです。

何年か前、ある若者が私のもとにやって来て、自分はもうクリスチャンではないがモルモン教に加入したと言いました。私が彼に永遠の命を得る為の希望として何を信頼しているのかと聞くと、自分の希望はイエス・キリストに対する信仰とモルモン教のメンバーである事に基づいていると彼は答えました。そこで私は率直に彼にそのような彼の決心は悲劇的であると告げました。彼がイエス・キリストの完成された御わざというただ一時のもの以外のものに信頼を置く瞬間、彼は遠く離れ過ぎてしまった、と。

神の御前に義人として立つ為に必要なのはただ一つ、キリストに対する信仰です。もし私達がイエス様と割礼という2つの事（もしくは洗礼、什一献金、教会のメンバーである事）に信頼を置くことを主張するなら、キリストは私達にとって何の価値もない方となってしまいます。

全て守るか何もないかのどちらか

義となる為に自分の行いに依存する人達は、“選ぶ”というアプローチの仕方を採ることが出来ません。もし私達が一つの良い行いを救いに必要なものとして受け入れるのであれば、私達は律法全体に対して借りのある者となるのです。私達は律法すべてを守らなくてはならなくなるのです。パウロがガラテヤ3:10にて指摘している通りです。「というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。“律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。”」ヤコブは次のように書くことにより、この真理を更に詳しく陳述しています。「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」（ヤコブ2:10）

私達が義を得る手段として律法に頼るなら、キリストは私達に何の益ももたらさないのみでなく、完璧と言えるよう私達はあらゆる律法の戒めを守らなくてはなりません。私達の神との関係は律法主義もしくは恵みのどちらかの上に打ち立てられているのです。

パウロはユダヤ教の偽の教えに対する拒絶において加減しませんでした。彼はこう書いています。「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」（ガラテヤ5:4）“私はお前よりも聖いのだ”と響くような包みをキリスト教に持ち込む人は恵みを拒絶しているのです。

よい行いをした報いとして天国にいる人など一人もいないのだという事を覚えている事も役に立ちます。私達は、アブラハムやダビデやパウロが神の御前に義とされる為に行なったあらゆる素晴らしい事を話す事に耳を傾けなくてもいいのです。これらの人達は単純に神を信じ、彼らの信仰が義とみなされたのです。私達の内、誰も天国で互いの良い行いをどちらがより優れているかと比較し合う人はいないのです。神の御座の前においてその行いが称えられるのはただ一人、私達の主、イエス・キリストしかいないからです。イエス様、イエス様のみが私達の救いに関して栄光を受け取るのです。イエス様がいらっしゃらなかったら誰も天国には入れなかったのです。

「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」(ガラテヤ6:14)とパウロが言っているように、私達がどんなに多くの良い事をイエス様の為にしようと、私たちがどんなに多くの人をイエス様のもと、そしてイエス様の為に建てた教会に導こうと、私たちの唯一の栄光は私たちの為に死んで下さったイエス・キリストにあるのです。私達の義というのは良い行いとか、人間の努力とか、ある一定の儀式や食事に関する律法を尊守するというような問題ではないのです。この瞬間、及び永遠における私たちの義は、神の御子イエス様に対する私たちの単純な信仰の結果です。

信仰による義はキリストに属す者達の間からあらゆる差別を取り除きます。私はあなたよりも優れてはいないし、あなたも私より優れている訳ではありません。私達は皆、神の栄光に富んだ恵みによって救われた罪人なのです。神の御前に義人として立つのに別の道はないのです。神が受け入れられる義は一種類しかないのです。それはイエス・キリストの義です。

これは私達信者にとって決して小さな問題ではありません。私達はキリストが解放して下さった自由の中に堅く立たなくてはいけません。私達は私達を責めたてるようなルールを入り込ませ、一日に7時間は祈り、ディボーションの時、聖書も25章は読まないと本当の意味で義人ではないかのように感じるようになる程、そのルールが私達の生活を支配するようにしてはいけません。私達の義とは、私達がどれほど多くの御言葉を読み、祈り、断食し、施しをするかということに基づいているのではありません。私達の義とはイエス様が自分を罪から洗い清めて下さり、御父の目に汚れのない者として下さったという事を単純に信頼するか否かという事に基づいているのです。

私達の救いの御わざは成し遂げられました。それを改善するために私達が出来ることな何もありません。私達の良い行いは、私達が神に受け入れて頂き、神から愛を受けたことの結果であって、神の愛を獲得する為ではありません。キリストの戒めに従って歩んだからと言って私達がより一層義人になる訳ではありません。ただ、更に幸せになり、より一層満たされた思いを味わう様になるでしょう。私を現在ここでこんなにも愛して下さり、また永遠に私の面倒を見て下さると約束して下さっている方に自分を捧げる事に優る人生が他にあるでしょうか。神に導かれ、先導される事ほど満足の得られる経験はこの世にはありません。

選択は2つのみ

私達は皆、行いに励んで神を喜ばせるに足るほど自分が善良になろうとするか、もしくは私達が自分では出来ない事を神が私達の為にして下さると信じ、神を信頼するかのどちらかです。私達は人生の常に、このどちらかの道にいるのです。もしまだ自分が十分に善良になることで神を喜ばせようとしているのだったら、私達は常に敗北や挫折という運命を歩むでしょう。もし私達が自分をすっかり変え、自分の中にキリストを形造って下さる神の恵みを信頼するのならば、私達はいのちや平安を楽しむことになるでしょう。

「私は律法や規則を守ることによっては
決して私達の心を変える事は出来ないという永遠の教訓を学んだ。」

私の家族が、家庭にもっとキリストのような雰囲気を取り込もうと団結して努力をしようとした時のある出来事を思い出します。

子供達が成長するにつれて兄弟間のライバル意識が常に強かった一時期がありました。どういうわけか私達の子供は互いの悪口を言うになりました。私達は彼らが相手を“ばか”とか“ぼけ”また“まぬけ”と呼び、それが対立を生み出している事に気づきました。そこで私達はこの状況を利用してしつけをしようと思い、いくつかのルールを設けました。

さて、2階建ての家において最も嫌がられる仕事は、階段に掃除機をかけることでした。そこで私達は家庭生活の空気を向上させる為に、互いを侮辱する度に記録をつけることにしました。このルールはある日が来るまでは実に理にかなった方法であるかのようでした。しかしその日私はすっかりはめられてしまったという嫌な思いをしました。

ある日、私達の2人の息子はある悪巧みを始めました。私が部屋に行ってみると彼らは物を壊している最中でした。私の口から出てきた最初の言葉は「一体どこのバカがこんなに部屋を滅茶苦茶にしたのかね！」というものでした。結局誰が、階段の掃除をする羽目になったか、ご想像の通りです。

しかし、この出来事を通して一つ良い事がありました。私は律法や規則を守る事によっては決して私達の心を変える事は出来ないという永遠の教訓を再び学びました。私達の動機は良いものでした。私達家族は皆、義を目指してのこの家族での努力において奮闘しました。しかし、誰もが全くそれには到達出来ず、惨憺たる結果に終わりました。どんなに一生懸命努力して聖くなろうとしたところで、私達の義とは神の目には汚れた着物のようなものだという事実に直面しなくてはいけないのです。神は私達に義への違った希望を与えて下さいました。それは私達が贈り物として受け取るべき、神との関係、立場といったものです。イエス・キリストを信じる事により、また自分では完璧な基準に到達することは出来ないという事を知ることによって、私達に義が授けられるのです。これは私達の前に置かれた実に重要な選択です。私達には私達の古いぼろぼろの汚れた着物をきれいにして天国で何とか見苦しくないものにしようと努力する事も出来るし、信仰によってキリストの完全な義を着る事を選択する事も出来るのです。

私が結局掃除機をかける羽目になった事は、私に自分の唯一の希望は“恵み”を選択する事である事を思い出させてくれました。

コースを外れ、視界から消える

クリスチャン生活において道から外れてしまうことが、どんなにたやすい事であるかということについて私は絶えず驚かされています。信仰や実践の比較的小さな部分におけるさして重要でもなさそうな弱点でさえ、私達のクリスチャン生活のほとんど全ての面において私達を完全に中心から引き離してしまう事が出来るのです。ですから、教義の純粋性を維持する為のあらゆる努力が、日々より重要になってきています。

最近、私は教会も大患難時代を経験すると信じているある人と、霊的なことについて話し合う機会を持ちました。彼はなぜ彼の考えるところの終末論のさして重要でもない局面において、私がそんなにも強い立場を取るのか不思議がりました。私は次のような質問をする事によって彼に応答しました。「教会が大患難時代を経験するのだったら、黙示録に書かれている14万4千人とは誰なのかい。」彼はこう答えました。教会は霊的なイスラエルであるので、これらの人達は教会の一部なのだと。次に私はイスラエルという国に対する神の約束の全てが、教会においてともかくも霊的に成就するということを彼が信じているか否かを聞きました。彼は信じていると言いました。「終末論のさして重要でない部分が、教会に対するあなたの教義にも全く影響を与えてしまっているとは何と興味深いことだろうね。」と私は言いました。パウロの言葉に当てはめると、「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させる」のです。（ガラテヤ5:9）

別の話に置き換えてみましょう。あなたが飛行機でロサンゼルスからハワイに向かっているとします。離陸前に機長が機内放送でこう言ったとします。「さて乗客の皆さん、実は航路を自動調整するナビゲーター装置に少々問題がありますが、心配しないで下さい。通常の空路から2度以上外れることはありませんから。」ロサンゼルスを飛び立った時点における2度のずれは大したものでなくても、太平洋上3000マイルの上空に行くことまでには航路を絶望的に外れ、航路を見失っている

状態です。ハワイの本島は全く見えない状態でしょう。
ほんのわずかなずれであってもコースから外れることを避けるというのが最善の取り組み方であることは明白です。教義という問題においては御言葉を調べ、全ての事が聖書の教えにかなったものであるかチェックし、人の説得力ある話に取り込まれることを避けなければなりません。私達はそのようにして恵みの中に立つべきです。

高価な用心

惑わされないようにしなさい。－この用心には何か代価が必要です。最初から福音を宣べ伝えることには論争と迫害とが付きまとってきました。パウロもガラテヤ5:11にてこう言っています。「兄弟たち。もし私が今でも割礼を宣べ伝えているなら、どうして今なお迫害を受けることがありましょう。それなら、十字架のつまずきは取り除かれているはずです。」もしパウロが一連の良い行いをする事によって神の御前に正しい者とされるということを宣べ伝えていたら、キリスト教に対する反対は起こらなかったでしょう。しかしキリストの十字架はいつもつまずきとなってきたのです。
十字架は、私達に神の御前に義とされる方法は一つしかない、ということを示しています。キリストによってのみ救いという本当のメッセージは人々を憤慨させます。あまりにも狭く排他的であるからです。十字架は、永遠のいのちへの唯一の希望は、イエス・キリストの死とよみがえりにあると世界に宣言しています。パウロは本質的にこう言っているのです。「私は寛大になりたくて“あなたにとって効果があるのならば割礼もいいでしょう。”と言ったなら、誰も私を迫害しないだろう。でも私は真理に立とうとするので迫害されているのである。」と。
パウロは決して遠回しに物事を言う人ではありませんでした。パウロの真理に対する感情的な傾倒を、割礼の問題に捕らわれている人達に対しての彼の言葉による激しい攻撃に見ることが出来ます。「あなたがたをかき乱す者どもは、いっそのこと不具になってしまうほうがよいのです。」とパウロはガラテヤ5:12で言っています。“不具にさせられる”と表現されている言葉はキング・ジェームス版では文字通り“去勢される”事を意味します。パウロが意味していたのは「もしこのような偽の教師達が肉を少々切り取る事で義となると信じているのであれば、彼らは彼らでその主義をいつまでも貫かせればいい。」という事でした。パウロの言葉を現代の状況に置き換えれば、「あなたに洗礼を受ける事によって義とされると教える者はその教義を貫き、没頭すればいいのだ。」という事にもなりましょう。パウロは栄光ある恵みの福音をあえて曲げようとする人達に対して自分の感情を投げつけたのです。
このような事の展開が、どんなに使徒パウロの心を痛めた事でしょう。ここには聖霊が働き、また人々が互いを愛し合い、神を愛していた交わりがありました。偽の教師達がやってくる迄は、主にある一致、そして主にある嬉しい興奮があったのです。偽の教師達は彼ら独自の福音を紹介することによって、教会に分裂をもたらし、すぐに派閥が発達し始めました。このキリストの体が知っていた美しい愛と交わりは、すぐに単なる遠い思い出となってしまいました。このような教師達に対するパウロの非難が、非常に率直であったのも無理はありません。

パウロありがとう

イエス・キリストの栄光に富んだ救いの恵みの元へとやってきた私達は、パウロに対して本当に感謝しなくてはいけません。もしパウロがいなかったら、教会の多くは簡単に単なるユダヤ教の一派になっていたことでしょう。しかしイエス・キリストの恵みの中で堅く立ち、新しい信者を定着させたのはパウロだったのです。彼はこのような立場を取ることによって代価を払わなくてはなりませんでした。彼は迫害され、中傷され、奉仕の大半において意地の悪い反対を受けました。しかし、彼の行いは

そうする価値のある事だったのです。彼はその生涯を閉じる時、この様な感動的な言葉を書くことが出来ました。「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」（第2テモテ4:7、8）

神が私達に真理の為に立つ恵みを与えて下さり、その恵みを愛のうちに人々に分かちあう知恵を与えて下さいますように。私達をイエス・キリスト及び、真理の知識のうちに堅く立たせて下さいますように。神がこんなにも豊かに私達に与えて下さった信じ難いほど深い祝福と自由を私達が知る事が出来ますように。そして私達が神の栄光に富んだ恵みに堅く立ち、神の美しい愛のうちを歩む時、これらの祝福を日々経験することが出来ますように。

13章　王室のメンバー

子供の時、王室に生まれることは、どんなだろうと思いを巡らした事はありませんか。裕福とは言えない所に育った人達は、金持ちになるということはどんなだろうということを空想する事にかなりの時間を費やしたことでしょう。

私達は裕福な家族の出身ではないかもしれませんが、私達のキリストとの関係の故に、私達は信仰によって霊的な国の相続人とされた事を聖書は明確に示しています。パウロはガラテヤ3:29で「もしあなたがたがキリストのものであれば、それによってアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」と書いています。私達が本当に受け継いできたものについて辿ってみると、自分のアイデンティティー（正体）がもはやヨーロッパやアジア、アフリカに根づいているのではないという事を見い出します。恵みにより、私達は自分の本当の身元（家柄、血統）をキリストにまで遡ることが出来るのです。この事は、神のアブラハムに対する御約束の成就です。この特別な関係のおかげで私達は今や、まさに神の御国の相続人となっているのです。

相続人とは何か

莫大な遺産を受け継ぐ６、７才の子供というのは、実際、実に裕福な人物です。しかし彼の両親が残した遺書に規定されている通り、この子供が成人に達するまでは、実際には家庭において雇われた召使いとさして変わらない位置に置かれます。確かに相続人の物質的な必要は全て満たされるでしょう。しかし彼は成人するまで、自分の遺産をどう取り扱うかについて何の権威も持たないのです。

相続人の生活状況はパウロの時代とさして変わってはいません。パウロはこう書いています。「ところが、相続人というものは、全財産の持ち主なのに、子どものうちは、奴隷と少しも違わず、父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります。」（ガラテヤ4:1,2）相続人はその財産を管理する全責任を与えられた管理者の権威の下にある者とされたとパウロは説明しています。一般的にはその子が大人になるまで、その子どものしつけを監視し、物事の善悪を教える為、後見人が任命されていたのです。

ローマ人の社会においては、少年は7才になるまで幼児とみなされていました。この年齢から１７才まで、小さな紫色の帯がその子の衣服に巻かれ、その子が子供である事を示していました。１７才になると紫色の帯のない、別の衣服が与えられ、この人が大人として考えられるべきであることを示していました。しかし、２５才になるまでは仕事に関わる法的な権利は与えられていませんでした。

ユダヤ人の社会では物事はもう少し単純でした。１２才になると、“バー・ミツバー”として知られている儀式を行い、一人前の“契約の息子”となるのでした。その男の子の父親は立ち上がり、もう息子の行動に対して責任を負う必要のなくなった事の感謝の祈りを捧げるのです。するとその男の子は、一人の人間として自分の行動に責任を負う事を受け入れる祈りを捧げました。

パウロはこの良く知られた大人への移行を、神の民と律法の関係を説明するのに用いています。イスラエルが律法の下に置かれた時、イスラエルは神の約束の相続人とされました。しかし、その国が律法の下にある限り、彼らの栄光に富んだ相続は成就されないのでした。彼らは神がご自身の息子の提供を通して、その全ての約束を履行なさる“時の満ちる時”と呼ばれる日の来るのを待ちました。その時の来るまで、イスラエルはまさに律法の支配的管理の下にある小さな子供のようでした。

律法の束縛

律法は、食べ物の事から仕事上の取引、結婚関係に至るまで日々の生活に付随するほとんど全ての事態をカバーしていました。律法は神の民が子供から“卒業”し、大人になり、ついに彼らに約束された遺産の恩恵を十分に楽しむようになるまで、彼らに対する厳しい監視として作用しました。メシヤが来ることによって、神との新しく素晴らしい関係についての約束がイスラエルに与えられましたが、この約束は御父がお定めになった時まで成就されないのでした。
律法は個人、社会全体の両方に対して秩序正しく調和のとれた生き方をする為の枠組みを与えました。しかし、もしそのような外面的な指針が、私達が神との間に持っている関係の全てであったなら、私達は束縛という形式の中に存在している自分の姿を見い出すでしょう。この事の故に、パウロは次のように書いているのです。「私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷となっていました。」(ガラテヤ4:3)

「律法は、聖霊が私達に与えたいと望んでおられるような
豊かで満ち満ちた自由のあるいのちへと私達を導く事は決して出来ない。」

パウロが“この世の幼稚な教え”と述べているのは、私達が呼ぶところの生活の基礎の事です。このような種類の基礎的な日常生活においての“すべき事、してはならない事”に関して言えば、モーセの律法は実に有効なものでした。
私は教会の最初の公会議(使徒15章に述べられています。)が信者の生活を支配している、行動に関する複雑な規定に関する問題に対して、とても熱心に取り組んだという事をいつも皮肉に感じてきました。結局は、信者にはもはや外面的な行動の規定に奴隷のように従う義務はないという結論に達しましたが、今日未だに多くの教会が教会員に対して同じようなコントロールを課そうとしています。
私自身、女性とはどのような身なりをし、髪型はどのようなものが適切で、どのようなものが不適切であるかを女性に教えることが神からの命令であると信じられているような教会で成長しました。リーダー達はまるで、化粧の仕方に関する神のご意見について啓示を受けていると信じているかのようでした。私達子供にはしてもいい事と、してはならない事に関する無数の戒めが与えられていました。教会は私達をモーセの律法下に再び引き戻したなどと、極端なことを言うつもりはありませんが、確かにそれはその重みに耐えかねる程の罪のとがめと束縛の重い荷として私の上にのしかかりました。そして私は常に悔い改めていました。彼らの設定した基準を守って生きることなどどうしても出来なかった為です。
律法は決して、聖霊が私達に与えたいと望んでおられるような豊かで満ち満ちた自由のあるいのちへと私達を導くことは出来ません。律法はただ、罪悪感と罪のとがめと挫折をもたらすだけです。しかし幸運な事に、律法で話が終わってしまうわけではありません。

定めの時がやってきた時

パウロの時代には、遺産を授与する為の法的手順は実に精密なものでした。子供が遺書に規定されている成人の年齢に達した時、後見人や管理者が監視する必要はもはやなくなり、“時の満ちる”年齢に達した時、相続人は約束されていた物を直接受け取る事が出来ました。
パウロが次のように書いた時、パウロはその事を心に留めていました。「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」(ガラテヤ4:4)イエス様が既にやって来られたので、私達は神の約束された溢れるほどの祝福を経験する事が出来るのです。しかし、この“定めの時”という概念には、もう一つの隠された意

味があります。あなたは御子をお遣わしになるまで約１４００年もの間、なぜ神はご自分の民が律法の下に生きる事をお許しになったのか不思議に思ったことはありませんか。正直に言えば、私達には決して神のタイミングを完全に理解することは出来ないでしょう。神の道は私達の道とは異なり、神の思いは私達の思いとは異なるのです。しかし、もし歴史を少し見てみれば、イエス様が人類の前にやって来られたのが、実に時宜を得ている事の明らかな理由を多く見る事が出来ます。

まず、キリストはかつてなかった平和の時期に生まれました。キリストの誕生以前の１３年間及びキリストの生きておられた期間中、ローマにあるヤーヌスの宮の門は閉じられたままでした。ローマが戦いに参加する時はいつも、この宮はヤーヌスに勝利の祈願を捧げる礼拝者でいっぱいでした。しかしキリストの時代には、ローマの支配による平和が確固たる位置に収まっていました。

ローマはまた、輸送交通面において飛躍的な発展を遂げ、ローマ帝国全体を網羅する実によく設計された道路が作られました。また明瞭で表現的で、非常に明細な言語であるギリシャ語がローマ帝国の支配下にある国々の共通語となりました。

これらすべての要因が、１世紀における福音の急速な普及に貢献しました。神はあらゆる人類に対する神の愛と赦しのメッセージが世界規模の影響を持つよう、この戦略上最も好ましい時期を待っておられたのかもしれません。

またパウロがキリストについて、御父に“遣わされた”と言っている事に留意して下さい。このパウロの言葉には、キリストが永遠に先在されていた事だけでなく、イエス様がある特別な目的を持って来られた事が暗示されています。

イエス様は人類の贖いを完成する為にこの世に遣わされました。イエス様は人が神と親密に関わり、神の約束された満ち満ちた祝福の中に入ることが出来るよう、新しい契約を築き上げる為にいらっしゃいました。

パウロはまた、イエス様は“女から生まれた者、律法の下にある者にされた”と教えています。この処女からの誕生に関する言及は、聖書で与えられているメシヤに関する最初の約束を強くほのめかしています。創世記3:15にて神は、女の子孫が蛇の頭を踏み砕く、つまりサタンがこのエデンの園に持ち込んだ死の行いと神からの分離とを打ち砕く事を約束されました。イエス様はまた“律法の下にある者”とありますが、これはキリストがユダヤ人として生まれ、まずユダヤの人々を贖う為に遣わされた事を思い出させるものです。イエス様は神の民がついに霊的な成人に達し、彼らの霊的な遺産の全てを楽しむ事が出来るようにする為に来て下さったのです。イエス様を通してのみ、神の民は天の父からの遺産を受け取る事が出来るのです。

なんという父親なのでしょう

私はよく、初めからカルバリーに属していたイヴァ・ニューマンという名の、既に昇天された親愛なる聖徒を思い出し、彼女がいないのを寂しく思います。この敬虔な女性は私の年齢よりも長い期間、神と共に歩みました。私は彼女が祈るのを聞くのが大好きでした。「大好きなお父様、・・・」と彼女は祈ったものです。私はその祈りをどんなに好んだ事でしょう。彼女は神との親密で美しい、親しい交わりを楽しんでいました。彼女は“大好きなお父様”として神と関わっていたのです。

あなたはキリストの死と贖いのお陰で、あなたもこれと同様の豊かで親しい関係を持つ事が出来るようになった事をご存じでしたか。「そして、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父。』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちに遣わしてくださいました。」（ガラテヤ4:6）パウロはこう書く事によって、この事を言わんとしていたのです。

この一節の中に私達は、三位一体（神、御子、御霊）全体が、信じる者の人生（いのち）に関わり合いを持っているという素晴らしい構図を見ることができます。御父である神が、神の御子の御霊を私達の心に送られます。ローマ8:15、16のこれと同内容の一節は、私たちが神の子どもであること

は、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、証しして下さる事だと私たちに教えてくれます。このような関係は、私たちが完全な霊的生まれ変わりを経験して初めて可能になります。イエス様ご自身がこうおっしゃっています。「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。」（ヨハネ3:6,7）私達が霊的に生まれ変わる時、私達は神との素晴らしく親密な関係に入る力を与えられます。それはパウロの“アバ”という言葉の使用に象徴されるような親しい関係です。アバとは父親に対する親愛の情のこもった言葉です。アバとはアラム語で、今日でもイスラエルに行けば小さな子供が「アバ！アバ！」と大声で呼んでいるのをしばしば聞くことが出来ます。彼らは「お父さん！お父さん！」と言っているのです。

イエス様はたびたびこの言葉を使いました。恐らく弟子達は、イエス様がその祈りの生活においてあまりにも頻繁にこの言葉を使うのを聞いていたので、弟子達はその言葉をギリシャ語には訳さなかったのでしょう。弟子達はそのアラム語の表現をそのままにしておきました。イエス様が御父と分かち合っていたのと同じ温かさや親密さを自分達も獲得したいと考えたからです。

「私達が神を私達の父親、愛するお父さんとして
知るようになる事は神の意図なさったことである。」

神が私達の神との歩みにおいて、私達ともこれと同様の愛情のある個人的な関係を持つことを望んでおられる事を知るのは、なんと素晴らしいことでしょう。

私達はなんと往々にして、神を偉大で遠くにいらっしゃる創造主として見てしまう事でしょう。しかし、私達が神を自分達の父親、愛するお父さんとして知るようになる事が神の意図なのです。

このような親しさを無礼と考える人もいますが、そのようなレベルの親密さへと私達を招いておられるのは神ご自身なのです。祈祷会でイタリア人信者のグループと会った時の事を思い出します。彼らは私の為に英語で祈っていましたが、神を“パパ”と呼んでいました。最初、私はこの呼び方を少年のような、あまりにもくだけた言い方だと思いましたが、少し経って、考え直しました。その表現には、聖書に対して真実に響く、愛の深さ、親密さがありました。

神が今や私達を、恐怖に後ずさりした奴隷としてではなく、心から愛されている子供として御そばに歓迎して下さっているとは、なんと驚くべきことでしょう。しかし、これこそが本来、父親と子供とが持つべき関係ではないでしょうか。私の子供が私のところにやって来る時は、気をつけの姿勢を取り、敬礼して恐怖に震えながら私に話しかけたりしません。彼らは私に接する時、取って付けたようなあらゆる堅苦しさをもって、「ああ、偉大な御父よ。今日あなたの子供である私の謙虚な願いを聞き入れたまえ。」などとは言いません。大抵、こんな感じの話し方をします。「ねえ、父さん。5ドルいるんだ。説明してる暇はないんだけど、後で説明するから、何も聞かないで5ドルくれよ。」

神は私達の神との時間が、私達にとってくつろぐ事の出来る、元気を回復出来るようなものであって欲しいと願っておられます。神は私達が神に対してくつろぎを感じ、私達と神との関係について自由で、オープンである事を願っておられます。いずれにせよ、私達の生活は神の前には一冊の開かれた本であるのですから、そのように感じた方がいいでしょう。神は私達自身よりも私達の事をよく知っているのです。

神は私達が神と冷たい、よそよそしい関係を持つ事を願っておられません。神は私達が心の実に深い所で、神の愛を個人的に知る事を願っておられるのです。そのような親しさを伝える表現であれば、どんなものでも・・・“父”であれ、“お父さん”であれ、“パパ”であれ、完全に喜ばれるのです。

理想的なお父さん

神は最も純粋な、真実な、聖い意味で私達の父親です。神は理想的な形で私達の父親です。神は私達を助けて下さる方です。私達の堕落した社会のせいで多くの子供達の心の中にある父親のイメージは破壊されてしまっており、これは悲劇的な事です。私は神が私に敬虔な父親を与えて下さった事を感謝しています。父はいつも私が実に親密な栄光に富んだ形で神と関われるよう助けてくれました。私はその堕落したお手本のせいで、人生において父親としての神に関わることの出来ない人達を気の毒に思います。

あなたの経験がどんなであれ、神はあなたが神と最も親しい種類の交わりを持つこと、又あなたが神を愛情深い、義なる父親、聖く、純粋でいろいろと気に掛けてくれる父親として知る事を望んでおられます。そして私達の心にある神の御霊は「アバ！お父さん！父よ！」と叫ぶのです。

神は私達がもっともっと神を愛するようになるように、私達に神の愛を傾け、神の優しさ、神の善良さを惜しみなく与えることの出来るお方です。これが人に対する神の目的です。神の目的があなたの内にて達成されるまであなたの人生は決して完成しないのです。あなたが神とそのような親しい個人的な関係を持ち、あなたが「ああ、アバ！」と言い、心からそのように感じるまでは。

お父さん方、あなたの子供が初めて“お父さん”と言った時の事を覚えていますか。それは本当に聞き分ける事の出来るものなのです。あなたはそれを完全に理解したのです。私の娘は実に賢い子でした。彼女が発した最初の言葉は“お父さん”でした。その通り、この上もなく明瞭でした。私は振り返り興奮して金切り声を上げ、「なあに？」と叫びました。私はこの時誰も近くにいなかった事を寂しく思いました。誰がこの事を信じるでしょうか。私は彼女にもう一度その言葉を言わせようとしましたが、彼女は実に愛くるしい利口そうな微笑みを返しただけで、決して繰り返そうとはしませんでした。しかし、私はその言葉を聞いたのです！やがて彼女はその言葉をみんなの前で言うようになり、私は嬉しくてぞくぞくしました。

私達が初めて「ああ、アバ！」と言い、神が私達の言葉を耳にするその日、神は嬉しい感動を覚えられるのです。それは私達が心から「あれは私のアバなんだ。あれは私のお父さんなんだ。」と言うことの出来る関係の始まりなのです。驚くべきことは、これが私達の神との交わりの豊かさのほんの始まりに過ぎないということです。

神の相続人

神を私達の“アバ”として神との関係に入る事くらいに理解する事の出来ない程素晴らしいのは、それが物語の終わりではないという事です。パウロは教えています。「ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。」（ガラテヤ4:7）神が養子とした息子として神との関係に入ることによって、私達の心にある神の霊は「ああ、アバ！」と叫んでいるのです。私達は神の相続人になったのです。神の永遠の栄光に富んだ御国の相続人なのです。

私達の御父は私達を非常に愛して下さり、気前よく私達をご自分の相続人にまでなさいました。そしてこの霊的遺産は私達の生活（人生）においてとても現実の、そして現在の祝福になるよう、 神によって意図されたのです。信者が自分の遺産を楽しむのに天国に行くまで待たなくてはいけないと考え違いをする人もいますが、真理から遠く離れてはいけません。聖書は神の御国の特徴を義と平和と聖霊による喜びであると教えています。（ローマ14:17）私達はこれらの素晴らしい祝福を、今ここで利用することが出来るのです。すべての考えにまさる神の平安は、今、私達の心と思いを守ることが出来るのです。私達の魂が、今、ことばに言い尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどる事も可能なのです。私達は罪悪感や恐れからの解放を体験する事が出来ます。それは、私達がイエス・キリストによって成し遂げられた御わざを信じている事によって完全に義であると宣言されている為です。

皆さん、それだけではないのだよ

これらは神が私達をキリストとの共同相続人にして下さった為、既に私達のものとなっている私達の栄光に富んだ遺産の中のほんの２、３の要素です。私達は私達の天の“お父さん”の素晴らしい愛と恵みの故に、最も素晴らしい祝福の場に入ることが出来るのです。

しかも、それだけではないのです。イエス様はその右にいる者たちにこう言う日が来るとおっしゃいました。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。」（マタイ25:34）私は神の相続人です。私は王に養子とされた息子なのです。ですから私の父が宇宙の王であるなら、私はチャールズ皇太子のような存在という事にならなくてはいけません。

あなたも王子もしくは王女という事になります。あなたは御国の相続人という事になります。その御国はあなたがたが神と共に分かち合い、楽しむ事を神が願っておられる終わりのない世界です。人がこの満ち満ちた完全で親密な神との交わりへと再び立ち返った時、神の人に対する目的は達成されるのです。

神の私達に対する限りない愛と配慮を知り、私達の心はいま私達の感じているその温かさや安心感に対する感謝に満ち溢れることでしょう。神が私達の面倒を見て下さり、私達を見守って下さり、神の愛の中に保って下さるという事を確信する事は、なんと力強いことでしょう。私達は自信を持って生き、歩みの一歩一歩において常に私達の味方となり、後ろで堅く支えてくれ、私達が日々新しいいのちをいただいて神と共に歩む事が出来るように、素晴らしい供給源を私達に与えて下さる御父がいる事を確信する事が出来ます。

私達の“アバ”は私達がつまずく事から守り、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることを明言しておられるのです。（ユダ24）神は私達の主イエス・キリストを通し、私達に子供としての権利を与え、朽ちる事のない遺産を与えて下さいました。私達がそれを受けるに値する存在であるからではありません。私達が努力によって獲得した為でもありません。これはすべて、神の豊かな慈愛と恵みによって成されたのです。

私達は生まれ変わると、その独特な方法で、自分が霊的に豊かになった事、および最も良く、真実な意味で王室の一員になった事を発見するとは何と素晴らしいことでしょう。私達は神の子供なので、御国の王子や王女とされたのです。キリストが私達の為にして下さった事の故に、私達は朽ちる事もなく、汚れてもおらず、消え去る事もない遺産を受け取るのです。そしてその遺産は、私達が皆永遠の間、それを楽しむ事を心待ちに待っているのです。

14章　私達の唯一の責務

新約聖書のメッセージは単純で単刃直入で、間違いようのない程明白です。私達は神の恵みにより救われています。それはただ信仰によるものであり、私達のした何かのよい行いによって救われているのではありません。クリスチャンの唯一の責務とは、神が無償で提供してくださる愛と恵みとを信じる事です。

この明白なメッセージは、私達がキリストに信頼するのと並行して一定のルールに従ったり、一定の儀式を実践することを願っている人達の教えとは、はっきりとした対照をなします。このような教師達は自分達の伝えるメッセージを福音と呼んでいますが、実際には全く良い知らせではありません。彼らは、神に受け入れられる為にはそれに見合う行いをしなくてはいけないと主張します。彼らによると律法と行いは恵みにくっついているのです。それはまるで義に至るための2つの部分からなるチケットのようです。しかし、このような教師とは対照的に、新約聖書は人を義とするのは律法や行いではなく、神の恵みと、信仰による私達の応答であると主張しています。

私達はお決まりの、二者択一の状況に直面しています。義は、キリストという方お一人に対する信仰によってもたらされるか、神の律法を完璧に守ることによってもたらされるかのいずれかです。信仰によって神との正しい関係を得る事と、行いによって救いを得る事とは互いに相容れないものです。私達が神の御前に義とされる事を求める時、私達は自分でどちらかを選択しなくてはいけないのであって、妥協した中間を求める事は出来ないのです。

アブラハムは単純に神を信じた人であって、神は彼を義とみなしました。私達はアブラハムと同じ立場にあり、アブラハムが享受したのと同じ祝福、約束の相続人なのです。この特権を伴う身分は、信仰によってのみ来るのであって、律法や一連のルールへ従順に従う事によってもたらされるのではありません。もし私達が信仰によってではなく、自分の行いによって神の前に正しい者とされることを追い求めるのならば、私達は自分が呪いの下にあることを発見する事でしょう。この法則には一つの例外もないのです。

もし私達が、神の前に義とされる保証の希望として律法に頼るのであれば、私達は何の落度もなく、すべての戒めを守る事によってのみ、安心を得る事が出来る事になります。パウロはこう書いています。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」（ガラテヤ3:10）これによると、死ぬまで自分が救われたかどうかはっきりと知ることは出来ないという事になります。誰がそのような圧迫の下に生きることが出来るでしょうか。

例えばあなたが全ての戒めを守り、一度も間違った事はせず、完璧な人生を送ったとしましょう。ある日、あなたは信号が青となっている時に道を渡ろうとします。突然、赤信号を無視した車が走ってきてあなたをひいてしまいます。あなたはその人の車の変速機があなたの頭の上を過ぎて行くのを見ながら、あなたは拳を振り上げ、この世を去る前の最後の言葉として、あなたはこのとんでもない運転手の運転の仕方をののしる事でしょう。あなたはその小さな行動の為に、失格者となってしまいました。あなたは完璧というレベルから落第してしまいました。あなたは罪を犯しました。そして聖書は罪の報酬は死であると教えています。

あなたは神の戒めのうちの9つは完璧に守ることが出来るかもしれません。しかし、10番目の戒めを守ることに失敗したら、あなたは目的を逸してしまうのです。あなたは罪を犯しました。そして恐ろしいことに律法全体を守り、そこに書いてある事全てをしない限りあなたは有罪となるのです。どの律法を破ってしまったかということは関係ないのです。たった一つの失敗の為に、あなたは外に放り出されるのです。

ですから、あなたが自分自身の善良さという事によって義とされる可能性はみじんもなくなってしまいました。あなたは既に外に放り出されているのです。あなたは既に落第したのです。あなたが期待出来るものと言えば、律法の呪いだけです。良い行いによって義とされることなど、不可能なのです。

不完全な人間の努力が頼りなのですから。律法主義とはのろいの道です。
逆に、本物の義と祝福の“道”は信仰の道です。あなたの努力により頼むのではなく、イエス・キリストにおける神のあなたに対する素晴らしい慈愛と豊かな恵みにより頼んでいるからです。あなたは目的を逸してしましたが・・・あなたは自分の努力によって義となる事には完全に失敗しましたが、神はあなたをご自分の御子において義とされました。あなたが神の基準に満たない事の責任をイエス様が取って下さり、あなたが支払わなくてはならない、しかし、決して支払う事の出来ない罰金をイエス様が支払って下さったのです。あなたがただイエス様を信じ、あなたの信仰をイエス様に置くならば、イエス様はあなたにご自分の完全な義を与えて下さいます。そしてイエス様によって神と正しい関係にある者とされた今、あなたは神の素晴らしい祝福の全てを受け取る者であるのです。

悲劇的な間違い

教会が犯し得る間違いの一つは、信者が神の為にすべき行いを強調する事です。「あなたはもっと祈らなくてはいけません。あなたはもっと捧げなくてはいけません。もっと証をしなくてはいけません。もっと聖書を読まなくてはいけませんし、いろんな委員会に出席して神に奉仕しなくてはいけません。」というような心が重くなる、非難めいた説教をあなたは何度聞いたことがあるでしょう。励まされたい、元気づけられたいと思って教会に行ったのに、自分がどんな失敗を犯しているか、神が自分にどんなに失望しておられるかというような事を聞かさる事のなんと多いことでしょう。私にとって最も不必要な事は誰かが、私の失敗について重荷を私の上に載せることです。私は自分でももっとすべき事を分かっているのです。誰も私に、あなたは十分に祈っていない、聖書を読んでいない、神にまだ十分捧げていないなどと教えてくれる必要はないのです。私がそのようなメッセージから得るものと言えば、大きな罪悪感のコンプレックスです。私は心から神をもっと愛したいし、もっと祈りたいし、神とより深い交わりをしたいと願っている訳ですから、私の挫折感は募るばかりです。私達が失敗という分野に強調点を置く時、レースを途中で投げ出したり落ちぶれて行く、打ちのめされ落胆したクリスチャンを結局創り出してしまうことになります。
しかし新約聖書により頼む時、私達はなんと違ったメッセージを見ることでしょう。新約聖書は、私達が神の為にすべき事ではなく、神が私達の為に既にして下さった事を強調しています。私達が神の為に出来る事というのは、決して満足の得られるものにはなり得ないのです。義を得る為の私達の努力は、常に私達の不完全さによって台無しにされてしまいます。しかし、神が私達の為にして下さった事は完全で、美しく、完成しており素晴らしいものです。私達がそのような等式を逆さにして、神の素晴らしい恵みについてではなく自分達の果たすべき責任について延々と語ってきたとは、なんと悲しい事でしょう。余りにも多くの教会が今まさに死に絶えるような危機に瀕しているのはこの為です。私達は自分の窮地にあって出口を指し示してくれる人は必要としていても、自分の失敗を思い起こさせてくれる人をそれ程までに必要とはしていないのです。私達には恵みが必要なのであり、罪悪感ではないのです。

あなたの一つの義務

神はたった一つの単純な責任をあなたにお与えになりました。神の約束を信じる事です。あなたはたとえ十分に祈っていなくても、十分に捧げていなくても、十分に犠牲を払っていなくても、神との関係からもたらされる祝福を享受する事が出来ます。それは神があなたの為に既に成して下さった事を信じるあなたの信仰の故です。
神はあなたがイエス様を通して神に義とされるよう、イエス様を罪ある者となさいました。あなたが単純に自分の信仰と信頼を、イエス様があなたの為になさった御わざの上に置く時、イエス様はあ

なたにイエス様の義を授けて下さるのです。イエス様の御わざはすべて恵みによるのです。
パウロはガラテヤ人への手紙を“どうか、恵みと平安があなたがたの上にありますように”というあいさつの言葉で始め、“どうか、私たちの主イエス・キリストの恵みが、兄弟たちよ、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。”という言葉で閉じています。パウロの祝祷は、この手紙が神の栄光に富んだ恵みに鋭く焦点を合わせている事から考えて、深い意味を帯びています。モーセの律法ではなく、イエス様の恵みこそがガラテヤ人の最も必要としていたものでした。肉のむなしい努力ではなく、イエス様の御霊の力の内に歩む事が彼らに対する召しだったのです。
ガラテヤ人はこれに対してどのように反応したのでしょうか。私達には分かりません。多分これはガラテヤで起こる問題が、いつも答えがたった一つであるような問題ではないからです。あなたは自分の義により頼みますか、それとも神が恵み深く与えて下さるものにより頼みますか。あなたは、信仰から来る恵みによって救われるという単純なメッセージに留まりますか。もしくは、キリストの完成された御わざの上に、自分の義なる行いのリストをつけ加えますか。あなたは肉のうちに歩みますか。それとも御霊によって歩みますか。あなたはキリストの十字架のみを誇りますか。それともあなたはあなたの肉を誇る事が出来るよう、この世の賛同や報酬も求めますか。
これらの問題はあらゆる世代のクリスチャンの誰もが、やがては取り組まなくてはならない問題です。あなたの選ぶ答えが平安と恐れ、高ぶりと本物の謙遜、更に言えば霊的な生と死との違いをも生むことでしょう。
あなたが揺らぐことなく、イエス・キリストの恵みを支持して堅く立ちますように。あなたが人を喜ばせる惑わしの欲望に動かされる事がありませんように。あなたが常に天の事を思い、このますます暗くなっていく希望のない世界において、地の最も良い人となり、いのちの言葉を蒔く人でありますように。そして今日あなたが、イエス様があなたの為に成して下さった事のみを誇りとしますように。